

俺の新たな高校生活と2人の姉妹

ブリザード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一条楽とその偽の恋人、桐崎千棘やその友人、小野寺小咲達かが2年に上がり新たに新入生が入学してくる春の季節。その最初の登校日に登校してくる女の子、小野寺春はある男子生徒と出会う。その男子生徒は一条楽や小野寺小咲と同じ中学の一つ下の後輩だった。これはブリザードの2作目のニセコイの小説です。

目次

第1話	プロローグ	1
第2話	先輩のイモウト	6
第3話	シスコンな春	12
第4話	『オノデラ』	18
第5話	命のオンジン	25
第6話	トモダチ作り	33
第7話	ビョウキの看病	40
第8話	サイナんな林間学校	46
第9話	フシギナ気持ち	51
第10話	モヤモヤな気持ち	58
第11話	この前のオカエシ	68
第12話	とある日の学校へのトウコウ	75
第13話	サイアクな1日	80
第14話	クルシイ気持ち	89
第15話	オフザケ?	94
第16話	完璧者にソウダン	100
第17話	タイヘンな事	107
第18話	ツナガル思い	113
第19話	向かいのケーキヤ	124
第20話	タナバタ大会	131
第21話	夏のオマツリで	138
第22話	ジブンノ気持ちに正直に	149
第23話	ハウカゴに惚れ薬	156
第23・5話	ハウカゴに惚れ薬 (by小咲)	162

第24話	2人とデートデ	169
第25話	トツゼンの告白	182
第26話	ソレゾレの思い	191
第27話	ドウシテそう思うのか	201
第28話	オイワイしましょう	214
第29話	恋のライバルだから!	222
第30話	オミマイへ行こう	229
第31話	ヒサビサの兄妹喧嘩	238
第32話	兄をアイスルあまり	248
第33話	昔のオハナシ	256
第34話	オウサマゲーム	264
第35話	フトシタ油断から出た言葉	270

第1話 プロローグ

春side

春。暖かな風が桜の枝を揺らし髪をくすぐる、そんな4月。私は今日から高校1年生。念願叶って家の家の近くの共学の学校に合格。今まさに新しい生活に期待に胸をふくらませているところですよ……！高校生ってどんな感じだろう？とりあえず初日は空も真っ青で桜も咲いて、なんだか素敵な恋とかが始まってしまいいそうな予感です。………とか思っていたのですが。

「お嬢ちゃん可愛いね。高校生？」

「学校なんていいから俺たちと遊ぼうぜ」

なんだか初日っからピンチです!!

あわわ……どうしよう。ただでさえ中学女子校で男の人って苦手なのに……

「ほら、こっちに……」

私の肩に男の人が触れようとして来る。誰か助けて!!

「おい、その辺にしとけよ」

「……………え？」

主人公side

「ああ、今日から高校1年か。中学とはまた違って楽しいんだろうな」

そんな期待を胸にふくらませて俺は今学校に登校している。

「空は雲ひとつない青だし、桜は咲いてて綺麗だし今日は最高の入学式日和だな……………ん？」

独り言を言いながら登校していると、俺と同じ学校に通う生徒だろうと思われる女の子が生徒がガラの悪い不良4人に絡まれていた。

「あの人達何こんな朝っぱらからナンパとか何してんだ？アホじゃねえの」

そう思いながら俺は少女の元へ駆け寄る。男の1人が少女の肩を触れようとしている。女の子はビビってグツと目を閉じている。

「おい、その辺にしとけよ」

俺は触れようとしている手を払い女の子の前に立つ。

「……………え？」

「あ、なんだよてめえ」

さて、飛び出してこっちに來たのはいいがこの後どうしよう。さすがに大人4人に喧嘩で勝てるわけなんか全くしない。こういう時つてどうするべきなんだろうか。……………そうだ。

「なんだ？盾つくと容赦しねえぞ」

「そうはいかねえ。この子は俺の彼女だ。一緒に学校に行く約束してたのに……………大丈夫か？」

俺は後ろを向き女の子を心配する。女の子はビビって何も話を聞いてなかったのか、ただコクリと頷くだけだった。

「……………ちっ！彼氏いたのかよ。行こうぜー」

男達は去っていった。それを見た俺たちは溜息をつく。女の子は安心したのか地面に座り込んだ。

「怪我とかしてない？大丈夫だよな。立てる？」

俺は女の子に手を出す。あれ？この女の子誰かに似てるような……………

「……………すみません。足がすくんで立てないです」

「あらら、どうしよう。このままじゃ入学式間に合わなくなっちゃう」

「あ、あなたも新入生なんですか？」

あなたもつて事はこの子も新入生。つまり同じ学年が。

「そうだよ。俺は今日から凡矢里高校1年、黒崎 凧だ。よろしくな」

「……………1年の小野寺 春です」

「小野寺？……………もしかして、小野寺小咲さんの妹？」

「お姉ちゃんを知ってるの!？」

この子小野寺先輩の妹だったんだ。どうりで誰かに似てると思った。

「小野寺先輩は俺の中学の時の先輩なんだ。色々世話になったりした

「んだよ」

「そうなんだ……あ、入学式どうしよう?」

「確かに」

時間を見ると、やばい時間まで来ていた。そろそろ向かわないと間に合わなくなる。

「まあ、小野寺だけ遅刻させるのも悪いし俺もここで残るよ」

「そんなの悪いよ。黒崎君だけ先に行つて。私のせいで遅れたなんて言えないでしょ?」

「それでまた不良に絡まれたらどうするんだ?」

「でも!……」

「……あ、1つあるわ。2人とも間に合う方法」

俺は小野寺の前でかがむ。

「俺がお前をおんぶして向かうよ。そうしたら間に合うだろう?」

「え!」

俺がそう言うのと小野寺はだんだん顔を赤くしていった。

「いいから。どのみちこの方法しかないんだし小野寺も初日から遅刻は嫌だろう?」

「……うん」

小野寺はしぶしぶという感じで俺の背中に乗っかってくる。それを確認した俺は歩き出した。

(男の人ってこんなに優しい人もいるんだ……そういえばさつき黒崎君が私の事助けるためとはいえ彼女って……やだ、何私意識してるの!?)

「ん?」

春が頭をブンブン振っている。なんかあったのか?……そういえば小野寺を助けるためとはいえさつき彼女って。あとで謝らないとな。

「何とか間に合ったな」

なんとか間に合い校内に入ろうとした時には小野寺はもう立てるようになっていた。そして、無事に入学式に出席する事が出来た俺たちは2人でクラス分けを見に行った。

「私は……………あ、あった!」

「俺もあったわ。小野寺と同じクラスだな」

「本当!?よかったー。黒崎君がいないと話す男子が1人もいなくなっちゃうから」

1人もいなくなるって?女子校だったのか?それとも、何か男子が嫌いとか?

「あ、春。よかった。待ち合わせの時間になってもこないから心配してたんだよ」

「風ちゃん!?ごめんね。ちよつと色々巻き込まれて」

「まあ、無事だったんなら良かったんだけど。って、あれ?そつちの人」

風が俺に気づきこっちを見てくる。

「あ、そうだった。今日登校中に私が不良に絡まれてるところを助けてくれたの。その上すつごく優しいんだよ!」

「おっす。よろしくな、風」

「春を助けたのって風君だったんだ。よろしくね」

「あれ?何でそんなに仲良さげに話してるの?」

「家が隣同士の幼馴染」

お互いに指をさしあって同時にハモる。その様子に小野寺は驚いた顔をして俺たちを交互に見る。

「えっ、そうだったの?」

「風がこの学校受ける事は知ってたから顔は合わせるとは思ってたけどまさか、小野寺の友達とは思ってなかったよ」

「私も。初日から私の友達が風君と一緒に登校してくるなんて思わなかった。これって、運命なんじゃない?」

「う、運命!？」

風がそう言うのと小野寺は顔を赤くして俯いた。そんなに恥ずかしくなかったのだろうか？

「春も大胆だね。いきなり男の子とイチャイチャで登校してくるなんて」

「イチャイチャしてないよ!!」

「またまた、嘘ついて」

「ついてないったら!」

女子2人の仲よさそうな会話。俺が話に入る隙間は全くなさそうだ。

「……それにしても、本当に良かったね春。苦手な男の人に友達ができて」

「男の人苦手なのか？」

「……うん。女子校通ってたのもあるんだけどね。でも、黒崎君なら大丈夫そう」

「俺で普通に話すことができれば、他の男子だって大丈夫だよ」

「うん……でもちよつと不安かな？」

「……まあ、すぐに治す必要はねえよ。ゆっくり治していけばいいよ」

「うん……ありがとう」

「ふうん」

風が俺たちをじつと見つめる。風がこういう目をする時は大概よからぬ事を考えている時だ。気をつけないと。

「春……頑張つて!」

「え、何が？」

「早く教室行こ。入学式間に合わなくなっちゃうよ」

風が何が言いたかったのかわからない間、俺たちは3人で教室に向かった。

第2話 先輩のイモウト

「俺の席は……ここだな」

「私はここだよー」

「ん？」

教室に入った俺たちは自分の席を探してそこに座った。すると、俺の席は春の席の後ろだった。風も俺の横でこっちに手を振っている。

「何だこれ、すごい偶然だな」

「ホントー、やっぱりこれ運命なんだよ」

「何で運命ってばかり言うのさ、風ちゃんは」

でも、これは偶然でなければ運命としか言えない感じだった。登校中に小野寺と出会い、小野寺の友達実は俺の幼馴染でその上全員同じクラス。そして、席がここまで近いとなると俺も風に賛成したくなる。

「……あ、お隣さんだよ。私、この席なの。これからよろしく」

小野寺が隣の席の女の子に挨拶する。その子は頬杖をつきながら小野寺を見ていた。首にマフラーをかけていているすごく美人な女の子。

「あ、あのお名前は？」

「ポーラよ。ポーラ・マツコイ」

「ポーラさんね。私は『名乗らなくていいわよ。覚える気ないから』……え？」

初対面なのにいきなりきつい態度。外国ではこういう感じなのだろうか？それともただこういうのに慣れてないのだろうか。

「まあ、俺も一応自己紹介だけしとくか。俺は黒崎風、よろしくな。こっちは幼馴染の風だ」

「そつ。覚える気ないけど、よろしく」

こういうのは最初からズカズカ行くと余計に嫌われる。だから、名前だけ紹介しといて徐々に慣らしていくのが一番……って、今この子手榴弾落としたぞ。

「な、なあ、今のってあれだよな。レプリカとかおもちゃとかそんな感

「じのやつだよな?」

「いえ、これは本物よ」

まじかよ………今の女子高生って持ち歩く感じで手榴弾を持つのか?

「なあ、風は持ってないよな?」

「持つてると思う?」

「ですよね」

「どうやら、おかしいのはこの子のようだ。よかった。いや、何も良くないけど。」

「ね、ねえ、黒崎君。ちよつといいかな?」

「ん?どうした?」

「ちよつとお願いがあるんだけど、今日の放課後って空いてるかな?」

小野寺が体をこっちに向けて話しかけてくる。

「普通に空いてるけど。お願いって?」

「私、この学校で1人探してる人がいるの。だけど、1人で探すの大変そうだから手伝って欲しくて」

俺のモットーは基本的に女子の願いはなんでも聞く、だ。よつぽど酷いお願いでなければ全然問題ない。

「別にいいぞ。その人の名前とかわかる?」

「うん。私達の学校一つ上の先輩で」

「一条先輩っていう人」

「どうしてこうなったんだ」

時は変わって放課後。小野寺の頼みを聞いて今二手に別れて一条先輩を探しているのだが。

「一条先輩って中学の時の先輩で結構世話になってたから小野寺の頼みって聞きにくいんだよな」

一条楽。俺の一つ上の先輩で中学の時、時々勉強とかみてくれたりした優しい先輩。ただ、実家が集英組のヤクザということで少し周りに恐れられている。

『その一条先輩って人、凄い絶世美女がいるにもかかわらず、他の可愛い女の子にも手を出すとかいう酷い人らしいだって！その人に会って私は言わないといけないことがあるの！』

「一条先輩はそんな人じゃないと思うんだけど」

小野寺は多分何かを勘違いしているはずだ。そうに違いない。

「で、2学年のフロアに来たわけだけど、探すならとりあえず小野寺先輩を探さない」と

「私がどうかした？」

「うおっ!!」

いきなり後ろから声をかけられ、声を上げ驚きながら後ろを向く。するとそこに立っていたのは俺が探していた先輩。

「小野寺先輩、お久しぶりです。いきなり脅かさないで下さいよ」
「久しぶりだね、黒崎君。そんなつもりはなかったんだけどね」

小野寺先輩はにっこり笑って俺に挨拶してくれる。俺は今までこの人ほど可愛い女の子に会ったことがない。それほどにこの人は可愛い。

「私がどうか言ってたけど、私に何か用？」

「はい。実は今日の朝、色々あってあなたの妹の春に会ったんです」
「春と？……もしかして何かあった？」

流石、小野寺の姉。色々あつてとしか言っていないのに、妹に何かあったと心配してるようだ。

「まあ、それなりに。今はその話は置いときます。詳しい事は小野寺から聞いてください。その後、一緒に登校して、クラスも同じになつて………つて、これはどうでもいいか。それで、小野寺に頼み事をされたんです」

「頼み事？」

「はい。一条先輩と一緒に探して欲しいって」

「一条君を？どうして？」

「実は小野寺のやつ、何を勘違いしたのか、それとも噂を耳にしたか知らないんですけど一条先輩が彼女がいるのに他の女の子に手を出す酷い男つて思ってるらしくて」

「い、一条君はそんな悪いことする人じゃないよ!!」

小野寺先輩は中学の時から一条先輩に恋をしている。こうやっていつてもらえる一条先輩が少し羨ましく感じる。

「多分………おそらく………そんな事はしてないと思う」

「何でだんだんそんなに齒切れ悪くなってるんですか」

「一条君、女の子に手を出したりはしてないけど彼女はいるし、事実他の女の子とも凄く仲良いからちよつと不安になつて」

「え、彼女って本当にいるんですか？」

「へ、あ、うん。本当だよ」

なんでさつきからそんなに齒切れ悪いんだ？

「彼女って………じゃあ、小野寺先輩は！」

「大丈夫。いつか、一条君を彼氏にしてみせるって思ってるから！」

ここまで他人を思う事ができる小野寺先輩は凄いなと思った。俺はまだ恋なんかした事がない。だから、その気持ちはわからないけど、きつと凄くいいものなんだろう。

「それに……………もいるし」

「ん？何か言いました？」

「ううん。何でもないよ」

今なんか言ったような気がしたんだけど気のせいだったのかな？

「それより、今は一条先輩の事です。どうにかして一条先輩の誤解を解かないと」

「となると、まずは春を探さない」と

「そうですね」

小野寺先輩から小野寺に言ってくれるときつと誤解は解けるはずだ。……………今思ったけど、小野寺先輩と小野寺って呼ぶと何かわかりにくい。今度下の名前で呼んでいいか聞いてみよう。

「よし。そうと決まれば早速」

パン!!

いきなり、何か渴いた音みたいなのが響いた。ここからはそう遠くない近い場所だ。

「今の音なんだろう？」

「行ってみましょう！」

「う、うん」

俺たちは急いで音のした方に向かった。

「で、これはどういう状況？」

おそらく、音の場所がしただろう場所をつくところでは小野寺がスカート裾を掴んで、顔を真っ赤にして涙目になりながら頬に紅葉

マークができている一条先輩を睨んでいた。一瞬、ここで何が起きたのかわからなかったが状況を整理してみると何が起きたのか見当がついた。

「一条先輩……小野寺のパンツ見たんですか？」

「ち、違う！俺のせいじゃないぞ。いきなり風が吹いて……」

俺がそう言う和小野寺はさらに顔を真っ赤にし、一条先輩は負け惜しみのような言い訳をする。

「全く……あなたって人は」

「いや、一瞬のことだったから何かわからなかったから」

「パンツの絵柄は？」

「クマさん………はっ!!」

この人……最悪だ。これじゃますます誤解がときにくくなる。にしても、クマさんか。高校生にもなってそれはどうなのだろうか。

「えっとー、一条君？」

「お、小野寺!?これはその……」

「お姉ちゃん!？」

小野寺が小野寺先輩を見つけるとすぐにそっちに駆け寄る。

「お姉ちゃん。私が来たからにはもう大丈夫だから安心して。ね、ね!」

そう言う和小野寺は小野寺先輩を守るように一条先輩の前に立つ。

「私の名前は小野寺春。小野寺小咲の妹です!!」

第3話 シスコンな春

「い、妹。お前が小野寺の?」

先輩は小野寺を指差してつぶやく。どうやら、まだ理解しきってないようだ。

「あ、言い忘れてました。お久しぶりです一条先輩」

「今それ言うのか!?お前、ちよつとKYだぞ」

KYだなんて失礼な。俺は今言わないといけないと思ったから言っただけなのに。

「……………そ、そういえばこの前に妹がいるって」

「近づかないでください!お姉ちゃんはあなたなんて人みたいに渡しませんから!!」

「ええっ!?!」

いきなりの発言に驚く一条先輩と小野寺先輩。……………もしかして、小野寺ってシスコンなのか?

「ちよ、春!何言ってるのいきなり」

「お姉ちゃん、目を覚まして!お姉ちゃんは騙されてるんだよ!」

「な、なあ小野寺。お前ちよつと話を『黒崎君は黙って!!』はい」

怒られた。俺何も悪くないのに怒られた。理不尽すぎる。

「どうしたの?さつきから騒々しいけど……………あれ、誰その子?」

「千棘……………」

一条先輩の後ろから俺の知らない女の子が顔を出す。その人もさつきのポーラと同じですごく美人で綺麗だった。多分だけど、ハーフだと思う。

「えっ、小咲ちゃんの妹!?……………へえ、小咲ちゃんに妹いたんだ。ヨロシクね。お名前なんていうの?」

「……………弱みでも握られてるんですか!!?」

いきなりの爆弾発言。初対面の女性に弱みでも握られてるんですか?って聞ける小野寺は凄いなと思った。

「弱み?えつと、なんの話?」

「だって変ですよ!先輩みたいなスタイル良くて人当たりが良さそう

な女性が………こんな見るからにダメそうな、軽薄で性格悪そうな男の人と付き合ってるなんて絶対おかしいです!!」

「こちらこちら!!」

「小野寺、興奮してんのか知らないけど言い過ぎだ」

俺は小野寺の頭を軽く叩く。

「痛っ、いきなり何するのさ」

「何するのさ、じゃない。仮にも先輩だぞ。もう少し言葉に気をつけるんだ」

「でもこの人は!!」

「きつと何かの誤解だ。小野寺に言い忘れてたけど、この人俺の中学の時の先輩なんだ。中学の時そんな女の人をたらし込めるような人じゃなかったぞ」

「おい、風。それはどういうことだ」

っつと、しまった。本音が漏れてしまった。

「えつと………あなたは誰?」

「あ、自己紹介忘れてました。一条先輩と小野寺先輩と同じ中学出身の黒崎風つて言います。よろしくお願いします。えつと………」

「私は桐崎千棘よ。このダーリンの彼女なの。ヨロシクね、黒崎君」

「はい。こちらこそ」

桐崎千棘。どうやら、この人が一条先輩の彼女のようだ。一条先輩にはどう転んでも合わない………しまった、また本音が。

「楽様くっ!!こちらで私とお茶などができますか?」

「うおっ、橘!?!」

また1人女の子が来た。今度は一条先輩に飛びついて抱きついてた。この人も桐崎先輩と同じですごく美人な女の子だ。

「先輩。あなた高校に入って何があったんですか?そんなに可愛い女の子を集める特技か能力でも身につけたんですか?」

「失礼なこと言うな!俺は普通だ」

説得力がない。小野寺先輩、桐崎先輩と続きました美人な人が来たのだから。

「な……な、何をこんな廊下のだ真ん中で男の人に抱きついてるんで

すか！その人には彼女がいるんですよ」

「……………はい？……………フツ、まだまだお子様のようですね」

そう言うと、女の人は一条先輩から体を話しこちらに向く。

「愛というのは貫くものなのです。例え彼女という障害があろうとも、愛があればどんなことでも乗り越えられるのですよ。というわけで、楽様、2年に上がったことなんですし、古くなった彼女から私に乗り換えて見ませんか？」

「人を中古車みたいに言うな!!」

女の人はもう1度一条先輩に抱きつき、その女の人に桐崎先輩が突っ込む。

「凄いですね。あそこまでモテモテな理由ってなんなんだろう？」

「わかんないけど、元々そういう力があつたんじゃないかな？」

小野寺先輩が苦笑いして言う。

「小野寺先輩もくつつきに行かなくていいんですか？」

「わ、私はそういうことは……………」

まあ、小野寺先輩がくつつきに行ったら一条先輩が倒れちゃうかもしれないけど。

「春。一条君は春が思ってるほど悪い人じゃないんだよ。所詮、噂は噂なんだからね」

「お姉ちゃん……………」

小野寺先輩が小野寺に説得するように言う。

「……………でも」

小野寺は俯いてた顔を上げて言った。

「この人私のパンツ見たんですよー!!」

その瞬間、あたりの空気が凍ったような感じに襲われた。そして、その状態が数秒続いた後

「ダーリン？それはどういうことかしら？」

彼女の桐崎先輩がブチ切れていた。

「うおお！誤解だ!!」

「問答無用!!」

そして、一条先輩は空へと吹っ飛ばされて行った。

「何か凧君と帰るのって久しぶりだね」

「ん？確かにそうだな。お前は中学別に行っちゃったからな」

さっきの騒動が起こった後、俺は小野寺と別れ今は凧と一緒に下校している。

「小学校まではずっと一緒に帰ってたのにね」

「あれは家が隣同士だったからだろ」

「周りから、バカップルとか今日も熱いね〜とか言われたよね」

「そうだったか？」

「そうだよ。その度に凧君がそう言った男の子達に突っかかっていったんだよ」

そういえばそんな事もあったような気がする。だが、そう言われても俺は凧だけは恋愛感情で見ることができなかつた。こいつも結構可愛いのに。

「ねえ、凧君」

「なんだ？」

「私のこと好き？」

「ぐふっ!!」

飲んでいたジュースを一気に吹いてしまった。こいつはいきなり何をいいんだすんだよ。

「いきなりなんだ？」

「聞いてみただけだよ。で、どうなのー？」

「……………それでもし俺が好きだって言ったら？」

「それはそれで楽しそうだなって思うだけだよ」

「楽しそう？なにがだよ」

「凧君には多分わからないよ」

凧は時々何が言いたいのか分からない時がある。それを理解しよ

うと思うが、理解できるのは5回に1回程度だ。たいていが理解できない。

「で、どうなの?」

「……………友達として好きだけど、それ以上の感情では見れない」

「ふーん……………そうなんだ」

そう言うのと、風はにつこり笑って俺を見ていた。

「な、何だよ」

「何でも」

なんで風はこんなに上機嫌なんだ?

「私は好きだけどなー」

「ぶふっ!!」

さつきよりもすごい勢いでジューズを吹いた。

「なっ!おま……………それは、どういう意味だ!」

「んー、さあ?どういう意味なんでしょう?」

相変わらず風はにつこり笑って俺を見ていた。

「お前、何考えてんだ?」

「何を考えてるでしょう?」

「ふぎけるな。そんなの考えたってわかりはしねえよ」

「せめて分かってもらう努力はしてみてもいいと思うんだけどな」

そんなこと言われてもわからないものはわからないんだ。と言おうとしたが今回は考えてみる事にした。

「……………本当に俺の事が好きなのか?」

「んー、どうなんだろうね?」

「……………やっぱり何を考えてるかわからないけど俺はお前の事を恋愛の

意味で好きになることは多分ないぞ」

これって俺はこいつの事を振ったことになるのか?ても、こいつが

本心でそう言ったのかどうかわからない。そもそも、なんでこんな話を

をしたらんだ?

「……………風君」

「今度はなんだ?」

「春ともども、これからもよろしくね?」

「……………」

「……………」

結局、風が何を考えてるかは俺はずっとわからなかった。そして、俺は風の事を改めて、とことんくえないやつだと思った。

第4話 『オノデラ』

春side

「あちゃー、困ったわね。日曜日中村さんも来れないだって」
「え、そーなの……」

「どうやら、日曜日のうちのお店の状態がピンチみたい。ここは私が手伝わないと。」

「加藤さんも来れないって言ってたよね？」

「参ったわね。突如2人の人員不足とは」

「だったら私も手伝うよ。お姉ちゃんもやるんでしょ？」

「それでも1人足りない………あ、そうだ。小咲、例の彼、助っ人にお願いできる？」

「え……あ、うん分かった。頼んでみるよ」

「助っ人？」

「例の彼？助っ人？お母さんが認めるほどの人って私達の身近にいたっけ？そんな人私聞いたことない。」

side out

風side

「姉貴ー、咲ー。朝ごはんできたぞー」

「はーい」

「今行くよー」

日曜日の朝。久しぶりに休みを迎えたような気がするのだが何故かそんな気がしない。理由はわかってる。

俺の家は両親が仕事で忙しいため、あまり家に帰ってこない。そのため家での家事は俺と高3の面倒くさがりのクールな姉の理沙と中3のいつも元気で明るいムードメーカーの妹の咲の3人で交代でし

ている。今日は俺の当番の日だ。といっても、家事をするのは朝と夜だけだ。昼はみんな適当に過ごすことが多い。

「今日の朝の献立は？」

「和食だよ。卵焼きとシヤケと味噌汁」

「私シヤケって苦手なんだよね。骨多いし」

「それだけの理由なら普通に食べてくれよ、姉貴」

3人が揃うと、手を合わせて朝食を取り始める。

「……………なあ、2人に相談があるんだけど？」

「ん？」

「どしたの、お兄ちゃん。改まって」

姉貴と咲がこっちに顔を向ける。俺には1つ、高校から上がるとしてみたいことがあった。それは……

「俺バイトしたいんだけどいいかな？」

「バイト？」

バイトだ。ただし、これを2人が了承してしまうと今まで後退でやってきた家事の事で迷惑をかけてしまうかもしれない。簡単には了承してくれるとは思えない……………

「いいんじゃない」

「別にいいよー」

「軽っ！2人とも軽すぎだろ！いいのか、それで!？」

あまりに許可を出すのが軽すぎたため驚いてしまった。俺がバイトを始めるという事はこれからの家事が少し大変になるという事かわかってるのか？

「別にあんたがそのバイトの5割を私達の私物に使ってくれるなら何でもいいよ」

「私も。あ、私大福食べたい!」

バイト代の5割を……つまりは半分。これはかなり出費がでかいぞ。

「ちなみに4割に下げたりする事はないから」

姉貴と咲が声を揃えて言う。なんでこういう時だけ息がピッタシなんだよ。

「……………わかった。ただ、一気にお金が入るわけじゃないからそれはわかっててくれよ」

「りょーかい」

「もちろん！バイト探し頑張ってねー」

よし。そうと決まれば早速今日の昼から探す事にしよう。何のバイトをしようかな。

姉妹2人にバイトする事を了承してもらい、今バイト先を探しているところなのだが……

「バイトって簡単に見つかると思っただらそうでもなかったんだな。結構厳しいわ」

ファミレスやらスーパーやらいろんなバイトを見てみたがあまり自分にしっくりくるものはなかった。

「何かいいところはないものか……………ん？ここは……………」

目に付いたのは『おのでら』と書かれた看板だ。歩き回っているうちに小野寺の家の前まで来てしまったみたいだ。

「ここはバイト募集とかやってないのかな。でも、そうしたら小野寺と先輩と一緒に仕事をするのか」

でも、それもありっちゃありだよな。あの2人とバイトできるなんて幸せ以外の何物でもないぞ。2人とも可愛いし。

「取り敢えず入って聞いてみるか」

おじやましまくす、と言いながら扉を開けて中に入る。

「いらっしやいま……………あ、黒崎君！こんにちは」

「こんにちは、小野寺先輩」

店の中に入ると小野寺先輩が俺を迎えてくれる。

「ん、何？あなたまた男の子と知り合いになったの？この子ったら隅に置けないわね」

「お母さん!!」

カウンターの方には先輩のお母さんがいた。また男の子と知り合いになった？一体どういうことなのだろうか。

「で、今日はどうしたの？……あ、もしかして春に会いに来たとか？」
「いえ、そういうわけではないんですか。ちよつと、バイト出来るところを探してて。ここで募集とかしてないかなって思っています」

「へえ、バイトを……どうかな、お母さん？」

小野寺先輩のお母さんに話を振る。すると、少し悩んだような顔をしていた。

「うーん。うちは今日みたいな感じでなければ基本的人は足りてるんだけどね。でも、男手は確かにないのよ。あなた和菓子とか作れる？」

「作れますよ。うちは両親が仕事で中々帰ってこないのでもそういうのは自分で覚えましたから。あくまで、趣味の範囲ですが」

「よし、採用!!」

「いいの!?!」

面接とかなしで和菓子作れるか作れないかだけで判断された。

「小咲の知り合いなら問題ないでしょ。春とも面識あるみたいだし」

「小野寺………娘さんは俺のクラスメイトです………じゃなくて、いいんですか!?あくまで趣味の範囲ですよ。そんなすごいもの作れるわけじゃないですよ?」

「そんなのいいわ!基本が分かっているらば後は春が教えてくれるから。和菓子作りの事は春に聞いてちょうだい。料理はあの子で飾り付けとかが小咲の仕事だから」

そういえば、小野寺先輩って全く料理できないんだっただんな。ほんの時々美味しいのができるって聞いたことがある。

「あなた名前は？」

「黒崎凧です」

「じゃあ、黒崎君。あなた部活は？」

「してないですね。帰宅部です」

「よし。それなら、月水金と土日のどっちかはどう？もちろん土日はそっちの都合に合わせるわ」

「全然大丈夫です」

「じゃあ、それで決定だね」

バイトってこんな簡単に決まってるのかな？名前と部活と和菓子作れるかどうかしか答えてないのに。

「これからよろしくね？……それで今日はどうするの？折角だから何が食べていく？」

「そうさせてもらいます。オススメのやつください」

「わかった。春、一条君。うちのオススメ作ってー」

……………一条？

「小野寺先輩、一条って？」

「あ……………」

何だか墓穴を掘ったというような顔をしている。

「ち、違うの！今日はたまたま！たまたま人が足りなくて手伝ってもらっただけなの！深い意味なんてないの！本当だよ！」

「あ、はい。わかりました。ですから、そんなに否定しなくても」

顔を真っ赤にして一条先輩がここにいる言い訳をしようとす。

「小野寺先輩も成長してるって事なんですね」

「だから、違うって言うてるのに」

「なんで他の女の子じゃなくて一条先輩を呼んだんですか？」

「それは……このお手伝いに来てもらった時にお母さんが認めるほどの腕だったから、お母さんが一条君を気に入っちゃって」

「ふーん……まあ、いいですけど」

悪いがそんなの信じられない。そうか、中学の時はまともに話しているのも見たことなかったのに今はこんなに……………

「もう、黒崎君の意地悪」

「……………ぐはっ!!」

「え、あれ？黒崎君!？」

やばい。思ったより強力だった。小野寺先輩の涙目×上目遣い。これほど強力（とても可愛い）な兵器（仕草）があつていいのだろうか？いいわけがない！

「あ、すいません。ちよつと立ちくらみしちゃって」

「立ちくらみして吐血するって、あんた面白いね」

小野寺先輩のお母さんがこつちを見て笑っていた。……………小野寺先輩のお母さんって言いにくいな。

「すいません、これから小野寺さんって呼んでいいですか？小野寺先輩もいて小野寺もいるからわかりにくいので」

「ん？いいよ別に」

「ありがとうございます」

取り敢えず、これで呼びやすくなった。

「お姉ちゃん、持ってきたよ……………ってあれ？何で黒崎君がここに？」

「おつす、小野寺。明日からここでバイトするからよろしく」

「えっ？何の話？」

「黒崎君、いきなりそんな事言っても通じる訳ないよ。ちゃんと順を追って説明しないと」

「……………それもそうですね」

何のことか理解していない小野寺はキョトンとしている。

「俺ここで雇ってもらったの」

「雇ってって……………どうして？」

「そりゃ、俺がバイトしたいからに決まってるだろ。俺が和菓子作れるって言ったら採用してもらえたんだ」

「……………要するに、今日バイト探してて、行き着いた先がここでお母さんに雇ってもらったってこと？」

「まあ、そんな感じだ」

「ふーん……………」

（…………ちよつと待って。じゃあ、これからクラスメイトと一緒に働くって事!?風ちゃんにバレたらどうしよう。絶対からかわれる!）

春が頬に手を当てて顔を真っ赤にしている。……………てか、この和菓子うまつ！

「これ小野寺が作ったのか？」

「そうだよ。先輩は頼りになる気がしないので私が1人で作ったの。……もしかして、口に合わなかった？」

「いや、ぎゃくぎゃく。美味しすぎてびっくりしてる。凄いな、小野寺って料理上手いんだ。尊敬するよ」

「こんなに上手い和菓子食ったことないもんな。小野寺と仕事するうちに俺も作れるようになるかな？」

「そんな、尊敬するなんて言われたら恥ずかしいよ……」

「いや、でもこれ美味しいし。これだけ美味しいもんに先輩の飾り付けがあるなら最強だな」

「あんたわかつてるね。私も苦勞してこの子達を産んだ甲斐があったってもんなんだよ！」

小野寺先輩の飾り付けは何かの特殊能力を秘めてるくらいだ。普通の弁当を高級幕の内弁当に見せれるくらいの。この人がいればどんな料理でもきつと美味しく見せることが可能だろう。そして、小野寺の料理力だ。

「これから色々教えてくれな。小野寺も先輩も」

「へ、あ、うん」

「それはもちろん！」

小野寺と小野寺先輩がそれを了承してくれる。

「何なら春の男になってもいいんじゃないの？」

「お母さん!!なんてこと言うのさー！」

出会って俺が何を認められたのかわからないがいきなり小野寺さんに小野寺の男になっていい宣言をされた。この人の期待を裏切らないようにも頑張ろう。

「まあ、とにかくこれからよろしくお願いします」

こうして、俺のバイト先が決定した。バイトは『おのでら』のお菓子を作ることや力仕事だ。これから頑張ろう。

第5話 命のオンジン

「はああ~~~~~……………」

月曜日。昼休みになると、小野寺がいきなり呻き声を上げる。何かあったのだろうか？

「どうしたの春？」

「あ、風ちゃん」

そんな小野寺に風が声をかけると、小野寺は起き上がった。

「多分、一条先輩の事考えてるんだろ」

「えっ？なんでわかったの!？」

なんでわかったの？とか言われても

「なんとなく。呻き声を上げるほどの事なんて最近なら一条先輩の事しかないからな」

一条先輩が小野寺先輩と仲良くしてるのを小野寺は快く思っていない。それに対しては本気に怒ってるくらいだ。俺も説得しようとしたが全く意味がなかった。

「聞いて風ちゃん！実際会ってみたらやっぱり酷い人でさく昨日なんかあの人彼女いるクセにお姉ちゃんの事狙ってウチまで来たんだよ！」

「ふ〜ん。それでその日に風君が春の家でバイトする事に決まったんだよね〜？」

「そうそう。黒崎君がうちでバイト……………つてなんで知ってるの!？」

「そうだ。なんでお前がその事知ってんだよ!!」

「ふふつ、私は春と風君の事は何でも知ってるんだよ？」

何でも知ってるって……………なんかちよつと怖いな。どこまで知ってるか聞いてみよう。

「なあ、風。入学式の時の小野寺のパンツの柄は？」

「ちよ、黒崎君!?!何を聞い『クマさんの柄のやつだよ』風ちゃんもなんで知ってるのさ!!」

小野寺が顔を真っ赤にして俺たちに怒鳴る。てか凄いな、マジで当

たってるよ。風にはもう何を隠し事しても無駄なのかもしれない。

「ところで……………どうして、黒崎君が入学式の時の春のパンツの柄を知ってるのかな?」

「え?あ、あれ?ちよ、風?何を怒って?」

なんでも知ってるってことは俺が小野寺のパンツの絵柄を知ってるって言うのも知ってるかと思っただのに……………てか、風怖い。

「これが怒ってるように見える?それより、質問に答えて?」

風はにっこり笑って俺を見ていた。やばい、このにっこりは風が怒ってる時だ。幼馴染の俺が言うんだ。間違いない。

「いや、違うんだよ!入学式の日の放課後、一条先輩が小野寺のパンツを見たんだ!それを俺はただ聞いただけで別に小野寺のパンツを見たわけじゃ……………」

「風君?」

「は、はい!!」

必死で俺が体験した事を伝える。嘘はついてない。ついてないからきつと風は許してくれる!そのはずだ!

「せ・い・ぎ」

「……………はい」

現実はそのなに甘くないようだ。俺は風にみっちり説教を受けた後、昼休みずつと床で正座の刑をやらされた。叱られてる俺を見ていた小野寺はずつと恐れるような目で風をみていた。そして俺は決めた。もう風を怒らせないでおこう、と。

「うう……………まだ足の調子がおかしい。なんか歩きにくいわ」

「だ、大丈夫?」

放課後。昼休みに正座させられた俺は一人でジュースを買いに行

こうとしたところ風に呼び止められてまた正座させられた。そして、やっと、解放されてジュースを買いに向かっているとところに小野寺先輩とパツタリあったので、2人で自販機の方へ向かっていた。俺は風にならずと教室の床で正座させられたせいかな足の感覚が少しおかしかった。

「まったく、風も酷いですよね？何でも知ってるって言ったから、ちよつとしらなさそうな事聞いただけなのに」

「でも、そのせいで春は恥ずかしい思いをしたんだと思うよ？」

「まあ、確かにそうだとは思うんですけど……………」

自販機の前までたどり着き俺はお金を入れる。午後の紅茶を買おうとしたがあいにくすべて売り切れてていた。正直、俺は飲み物の中であれが一番好きだ。だが、ないのなら仕方ない。他のにしようと思つた時何故か抹茶オレに興味を惹かれそれを選んだ。

「普段こういうのは飲まないんだけどな」

抹茶オレの飲み口にストローをさし飲もうとしたが小野寺先輩が自販機を見て驚いたような顔をしているのに気がつきそつちを見る。見ていたのは俺と同じ抹茶オレ。そこに売り切れと書いてあった。どうやら、俺が買ったのが最後だったようだ。

「……………はい、これどうぞ」

「え、でも……………」

「いいですよ。俺、午後の紅茶買おうとさきて売り切れだったからそれ買っただけですから」

「じゃ、じゃあせめて黒崎君が買った分は返すね」

そう言つて俺にお金を渡してくれる。そして、俺は小野寺先輩に抹茶オレを渡した。

「さて、じゃあ今度は何を買うか」

お金を入れ、もう一度自販機のジュースを見渡す。すると、俺はあるものを見つけた。

「……………ミックスジュース。体が元気になりますよ！つてなんだこれ？」

気になつたので買ってみる。それを手に取ると何やらヤバイ雰囲気

気を醸し出していた。

「気になって買ったのはいいがうまいのか？」

飲み口にストローをさし、一口飲む。

「おえっ!!なんだこれ、まっず!!」

「どうしたの？」

なんだこれ？アクエリアスとか青汁みたいな味がしたぞ。何でこんなものを自販機に置いてるんだ！

「……飲んでみますか？」

「今の黒崎君みたらそんなの飲む気にもならないよ。遠慮しとく」
(大体それしたら、間接キスになっちゃうよ。そんなの恥ずかしくてできない)

「そうですか……」

もう一口啜る。……うんダメだ。人が飲むものじゃない。悪いがこれは捨てさせてもらおう。

「ね、ねえ、黒崎君は私と最初に出会った時の事覚えてる？」

「えっ？いきなりどうしたんですか？」

「いや、ただ覚えてるかなって思って聞いてみてるだけなの。で、どうかな？」

「そ、そりやあまあ。あれは中々鮮明的な出会いだったので」

あんな人との出会い方はもうきつと2度とできないだろう。そんな感じの出会いだったから。

「そっか。覚えてるんだね……」

それだけ言うと小野寺先輩は恥ずかしそうにしながら中庭の方へ歩いて行った。

「何で今そんな事聞いてきたんだろ？」

小野寺先輩の意図を考えながら、俺も少し距離を置きながらも小野寺先輩と同じ方向へ歩く。

「………ん？何だあれ」

見ると小野寺先輩が歩いて行く方向に校舎をペンキで塗ろうとしていたのか、その足場を支えている鉄パイプが今にも崩れそうなくらいグラグラしていた。

「ちよつと待て……あれは流石にやばいだろう」

小野寺先輩はその事に気付いていない。そう悟った瞬間俺は走り出した。

「小野寺先輩！上、危ないです!!」

「えっ?」

俺が声をかけるのと同時くらいに鉄パイプは真下へ……小野寺先輩がいる場所に数十本の鉄パイプが襲いかかる。

「小野寺先輩!!」

いきなりの事でまったく動けないのか、俺はそんな先輩に全力で飛びついた。頼む、間に合え!!!

ガラガラガツシャーン!!!

凄まじい音を立てながら鉄パイプは地面へ落下した。

小咲 side

『はぁ………やつと家に帰れる。今日は家に帰ってゆつくり休もう』

中学2年の頃、あの日は少し体調が悪かったけど、テストがあつたので少し無理をして学校に来た。教室に着いた時、るりちゃんが心配してくれたけど私は大丈夫と言ってテストを受けた。テストは午前中だけだしきつと大丈夫。そう思つてテストを乗り切つた。そして、今はテストが終わり帰路についている。

『ダメ………これ結構熱あるかも』

しんどかつたので周りを見ずにただ家の方へと歩いて行く。けど、それがダメだった。

『お嬢ちゃん、そこからすぐ逃げろ!!』

『へっ?』

誰かの声に私の意識がはつきりする。そして、何かの音に気がつき横を見ると私の方にバイクが走ってきていた。いつの間にか私は信号も見ずに横断歩道を渡っていた。つまり、赤信号なのに私は渡ろうとしていた。

『やだ……………体が動かない』

バイクはブレーキをかけているが私の方に迫っていた。私はこの後どうなってしまうんだろう。そう思った時、いきなり誰かが私を抱えてバイクから遠ざけてくれた。

『だ、大丈夫ですか!』

私を抱えてくれた人がそう聞く。だけど、その声を聞いた後私はすぐに意識を失った。

「ん……………あれ……………ここは?」

「小野寺先輩!? よかった。目が覚めて」

目を覚ますとそこは私の部屋だった。さっきのは夢だったのかな……………意識がはつきりしてきて周りを見渡すと、私の横に椅子に座った黒崎君が。

「あれ? 黒崎君? どうして……………あ! あの時鉄パイプが私に落ちてきてそれで……………」

「落ち着いてください。ちゃんと説明しますから」

「う、うん……………」

「鉄パイプが小野寺先輩のほうに落ちた時、俺が全力で飛びついて、小野寺先輩をその場から遠ざけました。おかげで俺も小野寺先輩も無

事です。ただ、その後、先輩が気絶しちゃったので俺がおんぶして小野寺先輩をここまで運んで来ました」

「そうなんだ……ありがとう黒崎君。また私を助けてくれて」

中学2年の時、私がバイクにひかれそうになったのを助けてくれたのも黒崎君だった。体調を崩して動けない私を抱えてギリギリでバイクから遠ざけてくれた。あの時、黒崎君がいなかったら………今回も。

「黒崎君がいなかったら私、本当に危ない目に………」

「いいですよ、別に。困ってる女子がいたらそれを助けるのが俺の性分なんで」

でも、私を助けるために黒崎君も結構危ない目にあっている。今回も前の時も。だから、ちゃんとお礼はしたい。

「ちなみにお礼なんていりませんよ」

「えっ!？」

今私の考えてる事読まれた？

「よく考えたらあの場面で誰かいたらそれを助けない人がいるわけないです。俺は当たり前前の事をしたまです」

「でも、黒崎君は自分が怪我しそうになってまで私を………」

「そうですね。でも、俺がそうしないといけないと思っただけから。そうする方が正しいと思っただけからそうしただけです。ですから、先輩が気にすることじゃありませんよ」

その時思った。一条君はいつも人のことばかり考えていて困ってる人がいればほっとけなくて自分の事なんてすぐどうでもよくなつてそして、その人が喜んでくれたら自分も一緒に心から喜んで上げる事のできる人。

だけど、黒崎君は他人の事となると自分が傷ついてでも助けようとしてくれる。現に私は黒崎君に2回助けられた。それも両方とも自分が傷つくかもしれないのに。黒崎君は自分が傷ついてでもそれを優先的に考えて行動している。それを思うと私は………

「先輩？」

「黒崎君………ううん、凧君。本当にありがとう」

私は……この人を日常の中でお礼をして行こうと、そう決めた。

第6話 トモダチ作り

「……ふふ、これでよし。完璧な作戦だわ。喜びなさい黒虎。次の日曜日には一条楽はあなたのものとなるわよ」

ポーラが携帯を見て独り言を言いながら笑っている。何か、はたから見ると少し不気味な感じだ。

「なあ、ポーラ」

「……………」

「おーい」

「……………」

返事はない。仕方ない……こんな事で気をひくのはどうかと思うのだが……………」

「ポーラ……お前、Bカップあるのか？」

「なっ!!あるわよー多分ー!」

顔を真っ赤にしながら俺に怒鳴る。やっと反応してくれたよ。こういう事言わないと反応しなそうだったし。

「多分って……自分のスリーサイズくらい把握しとけよな」

「う、うっさいわね!あんたにそんなこと言われる筋合いはないわー!」

あんだと呼ぶという事はおそらく俺の名前はまだ覚えられていないようだ。

「それより、さっき何考えてたんだ?」

「……別に。あんたには関係ないわ」

そう言っつてポーラは立ち上がり教室を出ようとする。

「おい、もうすぐ授業始まるぞ」

俺の言葉を無視してポーラは教室を出て行った。

「……………」

「すごいね、凧君……あんなにポーラさんと仲良さそうに喋って」

「ん?ああ、小野寺。おはよう」

いつの間にか俺の隣に驚いたような顔をして俺を見ている小野寺が立っていた。

「一体どんな事したらあんな風に仲良く話せるの?」

「お前にはあれが仲良くに見えたのか？」

「だって、私が話しかけても軽く無視されるだけだから……」

ポーラは全然授業を受けたり、教室に来ないためクラスから孤立していた。それをなんとかできればいいと思っているのだが。

「いや、大したことは言っていない」

「へえ、風君にしたらまだあまり仲良くない女の子にスリーサイズを聞く事は大した事じゃないんだ？？ふーん」

そう言っつて、俺の隣の席の風はメモ帳に何かを記録していた。しまった、こいつがいる事をすっかり忘れていた。

「えっ、黒崎君は女子にそんな事を聞く人だったの」

「い、いや、待て、誤解だ！」

「誤解じゃないよね？？さっき聞いてたの私見たもん」

くそ、風が変な事を言い出した時から何かこいつとは何か不思議な感じがする。てか、風の奴、昔より俺の事をからかってきてくる。

「い、言っとくけど私のスリーサイズは教えないよ！」

「いいよ、別に。ポーラのは話しのきつかけを作るために止むを得ずそうしただけだから」

「あれ？？そうなの？」

「そうだよ。大体、お前に直接スリーサイズ聞くなら、風に聞くよ。なあ、風？」

そう言っつて俺は風の方を向く。すると、風は悩んだような顔をした。

「うくん、知ってるには知ってるけど………教えると思う？」

飛びつきりの笑顔でそういった。その顔を俺にこう言っつてるような感じがした。

『春をそんなエロい風な目で見てたら風君でも許さないよ』

「りよ、了解です。風様」

「ならばよし」

やっぱり風は怖いかも。

日曜日

「なあ、小野寺ー」

「何ー？」

「どうやったら、ポーラと仲良くなれると思う？」

今日は俺のバイトの日。今日は小野寺と2人で自転車に乗って配達に行ってきた。俺が次からは1人で配達できるようにと、今日は特別に小野寺と一緒に来ている。そして、今はその配達の帰り。小野寺が俺の後ろで俺の方に掴まりながら後ろに座っている。

「そんなの私もわからないもん。私だって仲良くなりたいたいし……………」
そう考えたら私はその質問を黒崎君にしたいよ」

「俺？だから、俺はあいつと仲良いわけじゃないって」

ただ、変な事(向こうのスリーサイズ聞いただけ)をしただけなのに。そんなに仲良く話してるように見えたのか？

「仲良いっていうのは俺と風みたいな奴を指すんだ。あと、俺と小野寺とか」

「そ、そうだよね……………」

(仲良いって言われた。なんか嬉しいな……………)

「それで、どうしたらいいと思う？」

「うーん…………遊びに誘ってみるとか？」

「今、まともに絡めてない時点でそれは無理だろう」

「じゃ、じゃあまずお昼ご飯を一緒に食べる事から」

「あいつ昼休みっていつもどこにいてるんだ？」

「じゃあポーラさんと一緒に学校に向かう」

「あいつってどこに住んでるんだ？」

ダメだ、何個か候補を挙げてみたものの1つもできるものがなさそ

うだ。何だこれ？虚しい。

「ダメだね。こうなれば明日もスリーサイズを聞いて話を盛り上げるしか」

「そんな事したら風ちゃんきつと怒るよ？そして、私も2度目は許さない。ポーラさんも女の子なんだよ？」

「よし。この案は却下だ」

男じゃないって？小野寺と風に怒られるくらいなら男をやめてやる！

「しかしそうとすればどうしたものか……………ん？」

坂道を自転車を下っていると、林の方から人が3人出てきた。そのうちの1人がなんだかぐったりしてとても苦しそうにしているのが見える。

「あの一、すいません。なんか具合悪そうですけどどうかしましたか？……………って」

自転車を止めその人達の前に止まると、そこに立っていたのは一条先輩とポーラと俺の知らない胸の大きい女の人。……………これは強烈だ。

「黒崎君、何エロい目でその人を見てるの？」

「いや、えつと、その……………すいません」

「風ちゃんに報告だからね」

やばい。死刑宣告をされているような感じだ。

「それより先輩。どうしてここに？」

「春ちゃんこそ！」

「私は配達の帰りで……………」

「ちようどよかった。実はカクカクシカジカで！」

「えっ!?それは大変!!すぐに病院に行かないと。後ろに乗せてあげてください」

すげえ。カクカクシカジカで今の状況がつかめるんだな。俺にわかるのはその女の人がとてもぐったりして辛そうだという事だけなのに。

「…………あれ？ポーラさん！え、なんで？ポーラさん、先輩と知り合い

だったの!？」

「どうやら小野寺はポーラの存在に気づいてなかったようだ。

「……………あなたはブラックタイガーの知り合いなの?」

「ブラッ……………ううん、ちらつと見たただけだけだ」

「ブラックタイガー?何かのコードネームなのか。それとも、ただの名前がわからないけどそういう名前なんだな。

「だったら、どうして助けてくれるの?」

「なんでって……………よくわかんないけど、ダメ?」

「そう言うときポーラは驚いたような顔をしていた。

「ほら、ポーラも乗れ。早く病院に連れて行ってやらないと」

「あんた……………あんたは何で?」

「俺の性分は『困っている女の子や助けないといけない女の子がいたら助ける』だからな。嫌だと思われても助けさせてもらおうぞ」

「2人が自転車の後ろの荷台に乗ったのを確認して自転車を走らせる。……………あ、一条先輩忘れてた。まあ、いいか。」

次の日

俺と小野寺が教室に着くと、ポーラは頼杖をつきながら不機嫌そうな顔をしていた。

「おはよう、ポーラさん。今日もちやんと学校来たんだね」

「昨日は大変だったな。あのあと大丈夫だったか?あの人……………ブラックタイガーだっけ?ただの風邪で済んでよかったな」

「俺たちは話しかけるがポーラはシカトしてくる。」

「今日はちゃんと授業受けるの?初めてでしょ、授業受けるの。わからないことがあったら何でも」

「ちよつといいかしら?」

小野寺がずっと話しかけているとやっと反応してくれた。

「気安く話しかけないでくれる？ 私まだあなたと仲良くなったつもりがないんだけど」

「えっ?」

ポーラはずっと話しかけていた小野寺に冷たい態度をとる。

「なるほど。あなたと仲良くなってるという事は俺とは仲良くしてくれるわけだ」

「んなわけないでしょ!!あなたもおんなじよ!」

「そんなこと言わずに仲良くしようぜ。ほら、板チョコあげるから」

「!!?.....そ、その手には乗らないわよ」

あれ?今ちよつと食いついた?もしかしたら.....

「そうか。折角、板チョコあげようとしたのにいらぬのか。仕方ない。じゃあ、俺が食べるか」

俺は板チョコの封を開けてポーラに見せつけるようにして食べようとする。

「うっ.....」

「何?食べたいのか?」

「な、何言ってるの!私はヒットマンよ。そんなのいらぬわ!」

「そうか。じゃあ俺が.....」

「あっ!」

口の中に入れようとする素振りを見せるとポーラは反応する。口から遠ざけるとそっけない態度をとり、近づけるとこっちに向き反応する。

「そんなに食いたいなら半分やるよ」

板チョコを半分割ってポーラに渡す。すると、ポーラは口元からよだれを垂らした。

「.....あ、ありがとう」

そう言つてチョコレートを食べ始めた。

「なるほど。お菓子が好きなのか。これを使えばもっと仲良くなれるかも」

よし。この作戦は頭の中に置いておこう。きつと、また使えるはずだ。

「なるほどー、凧君は巨乳の女の子が好きだけではなく、クラスメイトの女の子をチョコレートで釣る、と。3年一緒の学校じゃなかっただけでここまで変わるんだ〜」

隣の席の風が笑みを浮かべながらメモ帳に何かを書いている。おそらく、今の俺の行動だろう。

「ちよ、ちよつと待て。誤解だ」

「誤解じゃないよね？私今しっかり見てたもん」

「うっ!!……………頼むから他の人にはばらさないでください」

「んー、どうしようかな〜」

……………どうやら俺はこういうことに関しては風には一生勝てないようだ。そう思うと俺の目から一粒の涙がこぼれ落ちた。

第7話 ビヨウキの看病

『……………ということでもプール掃除手伝って欲しいんだけどダメか？小野寺とか春ちゃんとか呼んでるからきつと楽しいと思うんだけど？』

俺は今一条先輩と電話をしている。昨日、一条先輩のクラスがプール掃除を頼まれていて何人かにやってもらわないといけなかったらしいが一条先輩の担当がその事を忘れていたらしい。担当が気づいたのは放課後で、その時教室に残っていた一条先輩に土曜日。つまり、今日掃除する事を任せたらしい。

「はあ、プール掃除ですか。確かに楽しそうですね。掃除終わったらその後遊んでもいいと言うんですからなおさら」

小野寺先輩や小野寺の水着も気になる。きつと似合っていて可愛いんだろうな。

『だろ？じゃあ、引き受けてくれるか？』

「……………すみません、先輩。行きたいのは山々なんですが無理です」

『えっ？何で？』

「だって、俺今『お兄ちゃん、大丈夫……………あ!!病人なのに起きてちゃダメでしょ!ちゃんと寝とかないと!!』……………という事です」

俺は昨日の夜にいきなり体調を崩し熱を出していた。本当いきなりの事でびっくりしている。

「すみません。私、黒崎凧の妹の黒崎咲です。兄はただいま体調を崩して寝込んでいるのでお電話はお控えください。それでは……………」

「あ、おい！」

電話の通話を切り俺の携帯を投げてくる。

「ダメでしょ、病人なんだからちゃんと寝てないと！」

「いや、電話するくらい別に」

「よくない!ほら、おかゆ作ったら食べて。その後、お薬飲んでちゃんと寝てね！」

今、俺の家には俺の妹の咲しかいない。姉貴は友達と遊んで来ると言って朝早くに家を出てしまった。対する妹の咲。こいつは遊ぶ約

束をしていたのに急用が出来たので無理と言って俺の看病をしてくれている。

「よかったのか？今日、ショッピングに行くつもりだったんだろ？」

「今さら気にしてももうどうにもならないし別にいいよ。その代わり、風邪が治ったらお兄ちゃんと2人で行くからね？」

「お、おう」

了承すると咲はにっこり笑った。やば、ちよつと可愛い。

「はい、お兄ちゃん。おかゆだよ」

「あ、ああ、悪いな」

……こういう時ってカップルなら『はい、……君。あ〜くん』とかやるシチュエーションではないのだろうか？俺もできればそういう体験を試してみたいものだ。

「はい、お兄ちゃん。あ〜くん」

まさか本当にやってくれるとは思わなかったよ！

「咲？何をしてるんだ？」

「だって、お兄ちゃんしんどそうだから私が食べさせてあげようと思ってる」

くっ……何て優しい妹なんだ！こんなに優しい妹に育ってくれてお兄ちゃん嬉しいよ！！

「じゃ、じゃあ……あーん」

咲が俺の口の前に持ってきてくれてるレンゲを口の中に入れる。

「あちっ!!」

「あ、ごめん。今度はちゃんと冷まさないとね」

レンゲでおかゆを掬い、フーツ、フーツと息を吹いてもう一度口の前に持ってくる。

「はい。今度は大丈夫だよ」

「あ、ありがとな」

何度かこのやり取りを繰り返し、おかゆを一粒残らず食べ終えた。「ふーっ、美味しかったよ。ありがとな」

「ううん、お兄ちゃんのためだもん。今、水とお薬持ってくるからちよつと待っててね」

お盆におかゆの茶碗を乗せて、咲は1度部屋を出て行った。
……うん、何だか結婚したての夫婦になった気分だ。結婚したら
こんな感じになるのだろうか。

「でも、俺に好きな人が……」

俺は恋の方で異性を好きになった事は1度もない。幼馴染でもある風を恋愛的に好きになる事はなかったのだ。この先、俺が恋する事などあるのだろうか？

「ただいまー、っってお兄ちゃん？何でそんな難しそうな顔してるの？」

「いや、別になんでもないよ」

「そう？じゃあいいけど……あ、これお薬ね」

「サンキュー」

風邪薬を受け取り、それを口の中に放り込み薬を流し込むため水を飲む。

「さてと。じゃあ、薬飲んだしちよつと寝るな」

「うん。ゆっくり休んで元気になってね。私は隣の部屋にいるから何かあつたら呼んでね」

「ああ、サンキューな」

「別にいいよ。お兄ちゃんのためだもん」

その言葉を聞いて俺は目を閉じた。

俺はもしかしたらとても出来のいい妹を持っているのかもしれない。
い。

『お待たせしました。待ちましたか？』

『ううん。待つてないよ。私も今来たところだから』

『小野寺……先輩』

『もう……私達付き合っただよ。小野寺じゃなくて下の名前で呼んでほしいな。先輩もいらないよ』

『じゃあ…小咲さん』

『うん…風君』

俺と小咲さんの距離が近づいていく。そして、キスできそうなくらいに近づき……………

「……………俺、今何の夢みてたんだよ？」

目を覚ました。だが、何だかものすごい夢を見た気がする。俺と小野寺先輩が付き合って。そして……………

「いや、ちょっと待て!!そんな事があれば本当に嬉しいけど俺と小野寺先輩にそんな事があるわけないだろ!!!」

「何がそんな事あるわけないの?」

「えっ?」

いきなりの声に驚きそつちの方を向くとそこには正座して本を読んでいた小野寺先輩が。

「あれ?先輩。どうして?」

「風君が風邪引いたって一条君に聞いたからプール掃除を終えてこつちに来たの。具合はもういいの?」

「え、ええ。まあ、マシにはなりましたが……………じゃなくて、何で俺の家に。小野寺先輩は一条先輩と一緒にいたいんじゃない?」

「べ、べべべ別に一条君と一緒にいたいわけじゃ……………」

わかりやすいくらいに焦る小野寺先輩。やっぱりこの人をからかうのは面白い。

「ただ、この前のお礼がしたくて。あの時私を助けてくれたから」

あの時というのはおそらく鉄パイプが落ちてきた時の事だろう。

「そんなの別にいいですけど……………そういえば、よく咲が俺の部屋に通してくれましたね。あいつの事だから全力で先輩を止めると思って

たのに」

「うん。止められた。でも、出掛けるところみたいだったから、『出掛けてる間に風君に何かあったら危ないでしょ?』って言ったらしぶぶ通してくれたよ」

出かけるというのはおそらく晩ご飯の支度でも買いに行つたのだろうか。

「風君の妹って何か春に似てる」

「春に?」

「うん。風君を守ろうとしてくれる事とか、他の女の人を近づかせないようにする事とか、必死に看病しようとしてる事。全部春に当てはまるもん」

「ああ……確かに」

小野寺も一条先輩を何としてでも遠ざけようとするもんな。そういうところは咲と小野寺はそっくりだ。

「先輩、移ったらダメだしそろそろ帰った方がいいんじゃないですか?俺は全然大丈夫ですから」

「風君の妹と約束したから。私が帰るまではお兄ちゃんのそばにいてくださいって。それまではここに居る事にする」

「そうですか……」

帰ってください、と言つたのは別に小野寺先輩が嫌いとかそういうのじゃない。ただ、2人つきりだとさっきの夢を意識してしまつてどうも落ち着かないのだ。小野寺先輩を見ただけで顔が赤くなるのを感じる。何だか、先輩も顔を赤くしている。……あれ?

「先輩。もしかして……トイレですか?」

「ち、違うよ!!風君失礼だよ!」

「すみません……あ、正座してるの辛いですか?」

「そ、それもあるんだけど……えっと、その……」

何だか小野寺先輩の様子がおかしい。さつきよりも顔が赤くなつている。

「や、やっぱりいい!風君、リンゴとかあるかな?私むいてあげるよ?」

「え、あ、いや、別に」

「き、気にしなくていいの！私がしたいだけだから!!」

そう言つて先輩は勢いよく立ち上がった。

「先輩、さっき正座辛いつて言つてたのにそんないきなり立ち上がりでもしたら!!」

「へっ……わっ!!」

正座していて足が痺れていたのにいきなり立ち上がったせいで小野寺先輩はバランスを崩した。そのせいでこっちに倒れてくる。俺も寝たまま小野寺先輩を受け止めようと手を出す。

「……………」

「……………」

結果的には俺も小野寺先輩も怪我をせずすんだ。だが、俺も先輩をうまく受け止められず小野寺先輩が俺に倒れこんで来たような格好になってしまった。そして、俺はそのせいでさっきの夢を思い出し全く何も言えなくなる。

「な、凧君……………ごめん。すぐどこから」

「いや、俺もすいません。うまく受け止められなくて」

先輩が起き上がろうとすると俺と先輩の目が合った。たった今こんな事があつたせいでお互いに目をそらし合う。

「お兄ちゃん……帰つたよー。だいじょー……………」

そして、まるでタイミングを計つたかのように俺の部屋に入ってくる妹の咲。ブラコン気味の咲がこんな様子を見たらどう思うか。そんなの考えなくてもわかる。

「ふ、2人とも何してるの!!小野寺さんも早くお兄ちゃんから離れてください!!」

案の定、咲は小野寺先輩に矛先を向けた。

「や、あの、違うの。今のはバランスを崩しただけで……………」

「言わなくてもいいです！やっぱりあなたにお兄ちゃんを任せたのは間違いでした!!」

その後、先輩と俺は小一時間ほど咲に説教され、咲の先輩への好感度もだいぶ下がってしまったのであつた。

第8話 サイナンな林間学校

今日から3日間。凡高の1年生では毎年恒例の林間学校である。今俺たちはその場所にバスで向かっているのだが……………

「クー……………」

「ううん……………」

「何だこの状況」

バスの1番後ろに俺と小野寺と風とポーラと俺のクラスメイトの倉橋翔太と5人が座っている。翔太は俺がクラスで1番最初に作った男子の友達だ。

「なあ、お前……………それなんだ？」

「何だと言われましても……………」

右から翔太、小野寺、俺、風、ポーラの順で座っている。ポーラは今の俺の状況を興味ないように窓を眺めてる。

そして今の俺の状況といえば。俺の両隣りの2人が俺にもたれかかるように寝ていたのだ。おかげで俺は今全く身動きができない。その上、バスに乗っている他の男子から冷たい視線を浴び、女子は今の状況の俺たちを写真で撮っている。

「……………なあ、風。俺今お前をすごく殴ってやりたい。てか、殴っていいよな。もう殴るぞ」

「お、落ち着けて!!これは俺のせいじゃない。それに今俺を殴って2人が起きたらお前は2人から嫌われてしまうかもしれないぞ!」

「んぐつ……………それは」

拳を作り降り掛かろうとする翔太を止める。あまりうるさくすると2人が起きてしまうかもしれないから割と小さめの声で。一瞬唸った翔太はそのまま振り上げた腕を下げた。

「……………ううん、風君」

寝言で風は俺の名前を呼んだ。そして、俺に密着するようにさらに寄ってくる。

「おい、ちよ、風!!」

男子にはさらに嫉妬の目が、女子はキャー!、という声が上がった。

「凧君……………」

何だ、こいつ。なんで寝てるのにこんなに俺に寄って来るんだ。男子から嫉妬され、女子には騒がれて。まるで寝ているのに俺をからかうみたいなの……………からかう？

「凧……………お前、起きてるだろ」

そう言うで一瞬体がピクツと動いた。

「やっぱりか。ほら、そんなつまらないことしてないでさっさと起きろ」

「ちえ、凧君ならもう少し騙せると思ったのにな」

「もう十分騙されたよ」

凧は俺から離れると小悪魔のような笑みを浮かべていた。

「な、何だよ」

「凧君、そうやってたら春と付き合ってるように見えるな」って思ってた。あと、男子の目が怖いなって」

「はあ？何を言ってる」

何を言ってるんだ。そう言おうとしたが言えなかった。凧が俺から離れた今俺にもたれかかってきているのは凧のように演技ではなく、普通に寝ている小野寺のみ。小野寺はうちのクラスで1・2を争うほど可愛い女の子だ。ただでさえ、さっきは凧と小野寺にくつつかれていたのだ。それが小野寺だけとなれば一体どうなるだろうか。答えは簡単だ。

『くろくさくきく』

男子全員にさっきより強い視線を浴びせられるのは当然の事だ。

「いや、えっと、その……………すいません」

バスを降りた瞬間どうなるかと想像しただけで俺は身震いしてしまった。どうか事が穏便に過ぎますように。

「まあ、そんなうまくいくわけがないな。酷い目にあつたよ」

「大丈夫、黒崎君？何かあつたの？」

「元凶のお前がそれを聞くな!!」

「え、何?! 私黒崎君に何かした!?!」

小野寺のせいで俺はバスを降りた瞬間、翔太を除く男子達に酷い横暴を受けた。翔太がそれに参加しなかったのは『他の男子が俺の分までやってくれるから別にいい』とのこと。

「まったく……………お前何してたのか覚えてないのか?」

「私なんかしてたの?」

「……………いや、知らないなら別にいいや」

バスの中では気付いたら小野寺は俺にもたれかかってくる。寝ていたのはわかってはいるけど普通に寝ていたと思っっているのだろう。

「ねえねえ、黒崎君。春ちゃんをちよつと借りてもいいかな?」

俺のクラスの女子が話しかけてくる。

「別にいいよ。てか、小野寺は別に俺のものじゃないんだからそんな事聞かなくてもいいのに」

「だって、あんな事してたから。とにかくありがとう。春ちゃん、ちよつと来て」

「へっ? 何? 何なの?」

小野寺は女子に引く張られ、この場から離れていった。

「さてと……………林間学校、最初の日程はカレー作りだったな。まあ、これは俺と小野寺がいるし大丈夫だろ」

数十分前にそう思っていた自分を呪ってやりたい。

「おいこら、ポーラ！お前何カレーに入れようとしてんだよ！」

「何って板チョコだけど」

「そんなもん普通は入れねえよ！」

「だって、私辛いカレー食べられないもん」

「そんなに辛くないから安心しろ！」

班に分かれカレーを作る。俺の班は俺の他に小野寺とポーラと風。俺以外は全員女子だ。班決めの時、男子に凄まじい目で睨まれたのは言うまでもない。カレー作りでは俺と小野寺で野菜を切るところまではうまくいっていたのだ。問題はそこからだ

「ちっ、これ火力弱くない？これ使う方が絶対うまく行くわ」

「ちよつと待て！何当たり前のように手榴弾出してんだよ！早くしまえ！」

俺たちは普通のカレーを作ろうとしてるのに、ポーラが暴走していた。

「お前ちよつとここでじつとしてろ！」

「うるさいわね。命令するんじゃないわよ」

「いいから余計なことは………風！お前何入れてんの！？入れようとしてるじゃなくてそれ入れてるよな！！」

「ちよつとスパイスを加えたいの。だから、カレーに唐辛子を少しね」

「今絶対少しじゃなかった。塊が入ってたよな！」

「気のせい気のせい」

「何さらに加えてんだよ！！」

ダメだ。ポーラと風が邪魔をしてくる。これじゃあ普通のカレーなんかでできるわけがない。

「どうにかしないと………そうだ！ポーラ、さっきのチョコレート………って何食べてんだよ！」

「だって、お腹すいたし」

「だってじゃねえよ！あと少しくらい待ちやがれ！」

ああ、このままじゃまともなカレーなんてできるわけがない。まあ、唐辛子加えてる時点でまともじゃないが。

「仕方ない。ここは俺に任せろ」

「えっ!?これをなんとかできるの?」

さつきまでの様子を何と言ったらいいのかわからないような目で見ていた小野寺が俺に聞く。

「普通は無理。だけど、俺はやり遂げる!」

「黒崎君……………」

「凧君、かっこいい」

よせよ。そんなに褒められると俺は照れちまうよ。というわけで……

「先生、このカレーの作り直しを要求します」

「かっこわるー」

俺は先生に唐辛子たっぷりのカレーを作り直すことを要求した。そんなおれを小野寺と凧はジト目で睨んでくる。いや、こんなの作り直すしかないじゃん。

俺は先生に頭を下げて頼む。だが、先生はにっこり笑って。

「自業自得だ。責任もって食え」

「鬼だ!先生鬼だ!!」

俺の要求は呑んでくれなかった。

「仕方ない。こうなったら、俺のカバンの中に入ってる甘いお菓子をこの鍋の中に……………」

「黒崎君のお菓子なら、ポーラさんがさつき食べてたけど」

「あいつまじで痛い目にあわせてやろうか!!」

結局、このカレーの打開策は一つも思いつかず、唐辛子たっぷりカレーを俺たちはひいひい言いながら完食した。

俺たちの林間学校はまだまだ続く。

第9話 フシギナ気持ち

「で、どうなんだよ黒崎」

「い、いきなりなんだよ。てか、何の話だ？」

風の入れた唐辛子のおかげで俺たちの班だけ唐辛子カレーを食うことになってしまった。それでも俺たちは必死の想いでカレーを食べ続け完食した。今は各自時間まで部屋で休むことになっているのだが、俺は何故か男子に詰め寄られていた。

「何がじゃねえ。お前は小野寺と風のどっちが本命なんだ！」

「……………そういうのって普通寝る前に話すもんじゃね？」

「んな事どうでもいいんだよ！さあ、答えろ！」

男子の1人に詰め寄られ、その後ろの男子2人がコクコクと頷く。翔太はそんな俺の様子をニヤニヤと見ていた。

「どっちとか別にねえよ。風は幼馴染で小野寺は俺のバイト先が一緒なだけの友達だ。恋愛対象として見てない」

「嘘つくな！お前絶対どっちが狙ってるだろ！」

「狙ってないって。そんな風に見ることは出来ねえよ。大体、俺は恋とかしたこと無いから、その気持ちかどんな感じかわからねえよ」

俺は確かに小野寺と風は可愛いことは認めるけど1ヶ月経った今もただの友達としか思っていない。

「……………待てよ。そういえば黒崎が小野寺の姉と一緒にいる事を見たことがあるぞ」

「何!?て事はお前の本命はあの2学年で可愛いランキングTOP3の中にいる小野寺先輩か!!」

「だから、何でそうなる!!俺は今誰にも恋をしていない！」

「嘘つくな！さてはお前、このまま逃げようとしてるな。そうはさせねえ!!おい、みんな！トランプをやるぞ！」

俺を含めた男子5人が円になって座る。その中には翔太も一緒だ。いいか、黒崎。お前がもし今からやるトランプのゲームで負けたらお前の好きな人を言え」

「はあ？何でだよ」

てか、それって3対1になるよな。もし、翔太もあつちに行ったら4対1だ。

「……………まあいいけど」

「なんかあつさり引き受けたな」

「だって俺嘘ついてないし。それにお前らがトランプで俺に勝てると思ったら大間違いだぜ」

「何？」

「見せてやるぜ。俺のトランプの強さをな！」

ポーカー

「ほら、ストレートフラッシュだ」

「う、嘘だろ!？」

ブラックジャック

「ほい、俺ブラックジャックな」

「ば、バカな!？」

大富豪

「革命からの8切りからの3のダブルからの5であがりな」

「つ、強すぎる！」

ダウト

「翔太、それダウトだ」

「……………何でわかんだよ」

「一瞬目線が泳いだのが見えた」

「くそ……………風、それダウトだ！」

「残念、JOKERだ」

「まじかよ!!」

一方その頃女子部屋

「ねえねえ、春は黒崎君と付き合ってるの？」

「それとも、春が黒崎君の事が好きなだけ？」

「どうなのどうなの？」

「うう……………風ちゃん助けて！」

「……………頑張つて！」

「風ちゃん!？」

「うう……………何で4対1で負けねえといけねえんだよ」

結果、トランプのゲーム全ての勝負に俺は勝った。翔太以外の男子はショックだったのか床に倒れこんでいる。

「そりゃ、運とか思考とかだな。ダウトとか大富豪は考えてカードを出さないと勝てねえぞ」

俺は何故か、昔からトランプのゲームが強かった。トランプのゲームをして負けた事はほとんどない。ダウトや大富豪が強いのとはともかくポーカーやブラックジャックが強いのは運に等しいだろう。

「風、お前変な特技持つてんのな」

「特技って何だよ。ただ、トランプが強いだけだ」

「くっそー。いつかお前を負かしてやる！」

「いつでも相手するよ……………と、そろそろ温泉の時間だな」

時計を見ると風呂に入る時間になっているのに気づいた。すると、他の男子達が一斉に動き出した。

「温泉だど!!おい、お前ら。あれやるぞ!」

「……………あれって何だ?」

「無論……………覗きだ!!」

そう宣言して俺と翔太以外の男子3人は走って部屋を出て行った。

「翔太は覗きとかしねえよな?」

「本音を言うならしたいけど、後が怖いから遠慮しとくよ」

「よかった。もし、するとか言い出したらどうしようかと思つたよ」

俺と翔太はゆっくり歩いて温泉場に向かった。

「ふー、さっぱりしたー」

温泉で覗きをどうやってするか考えていた男子達をほつといてゆっくり温泉に浸かった俺は早めに出て外に出ていた。

「あー、外の風が気持ちいい」

春や夏は風呂とか温泉とか上がった後の外の風は最高に気持ちいいと思う。湯冷めするかもしれないからあんまり長くいる事は出来ないけど。

「……………あれ?」

しばらく散歩していると空をぼーつと見ている小野寺がいるのが見えた。

「おい、小野寺。なにしてんの?」

「へっ?……………って黒崎君!」

俺の声に気づいた小野寺がこっちを向いて俺を確認した瞬間、小野寺が物凄い勢いで後ずさった。

「いや、俺だけ何でそんなに後ずさんの?流石に傷つく」

「あ……ごめんね。ちょっと色々あって」

「色々って?」

「部屋とか温泉で女の子にバスであった事を聞かされて私が黒崎君の事をどう思ってるのかを尋問されて、嫌だったから私だけ早めに出ちゃった」

バスであった事……俺にもたれかかって寝てた事か。

「あれは事実なの?」

「ま、まあ、事実だな」

「うう……ごめんね、黒崎君。私重かったよね?」

「別に。むしろ、小野寺の寝顔が見れて俺は結構ラッキーだったぞ」

「どうしよう……寝顔まで見られたなんて」

俺の言葉に小野寺は顔を真っ赤にする。俺にもたれかかって寝てたんだから寝顔見られるのは当たり前だと思っただけだ。

「変じゃなかった?涎とか垂らしてなかったよね?」

「そんなこと無かったって。普通に可愛かったぞ」

「かわつ!」

赤くなつた顔がさらに赤くなる。まるでトマトみたいだ。

「あ、ごめん。そんな事言われるの嫌だよな」

「ううん。そんな事ないよ。むしろ嬉しいから」

「そ、そっか」

笑ってそう答えてくれた小野寺を見て俺は一瞬ドキツとするのを感じた。

「星、綺麗だな」

「そうだね」

会話がそれだけで途切れてしまう。星の名前とかわかれば会話が続いたかもしれないけど俺はそういうのは知らなかった。

「私、黒崎君と一緒にいるとなんかいつも安心できるの。男の人って苦手なはずなのに何でかな?」

「さあ?でも、小野寺にそう言われるも俺も嬉しいよ。中学の時は女子とはあまり喋らなくて、それまで女の子の友達は風しかいなかったし、学校内で話す人なんて小野寺先輩と宮本先輩くらいしかいなかった

たから。だから、俺もこうして小野寺と会話できる事がすごく嬉しいよ」

「そ、そっか。……何か照れるね」

「心配しなくてもいいよ。俺も一緒だから」

小野寺にそんな事言われたら俺だって嬉しいに決まってる。

「ねえ、黒崎君」

「ん？どした？」

「黒崎くんってさ、風ちゃんの事どう思ってるの？」

「はあ!?いきなりどうした」

「いや、ちよつと気になって。あ、いやなら答えなくていいんだよ」

何で女の子ってそういうこと気にするんだ？当の本人の風にもそれ聞かれたのに。

「風は幼馴染としか思ってたないな。長いことあいつと一緒にいるけど風を恋愛対象としては見たことねえよ」

「そ、そうなんだ。ふーん」

(今度風ちゃんが黒崎君の事をどう思ってるのかも聞いてみよつと)

「好きな人か……………」

もし、好きな人ができたらそれはどんな感じなのかな。まあ、それは一条先輩や小野寺先輩に聞いたらわかるだろうけど。

「でも、もし人を好きになるとして、小野寺や小野寺先輩とかだったらきつと楽しいだろうな」

「えっ?」

あ…………しまった。今のもしかして声に出しちゃった?

「黒崎君。今の……………」

「ああ!ちよつと話しすぎたな。俺そろそろ部屋に戻るから!それじゃあ」

「あ、ちよつと!!」

やばい。本当にやばい。今逃げたつてどうにもならないのに。明日どんな顔をして小野寺にあつたらいいかわかんなくなるだけなのに!!

春 side

「でも、もし人を好きになるとして、小野寺や小野寺先輩とかだったら
きっと楽しいだろうな」

「えっ？」

一瞬、黒崎君が何を言ったのかわからなかった。だけど、今のつて。

「黒崎君、今の……………」

「ああ！ちよつと話しすぎたな。俺そろそろ部屋に戻るから。それ
じゃあー！」

「あ、ちよつと!!」

黒崎君は適当に誤魔化して、私から逃げるように去っていった。

「何で黒崎君はあんな事言ったのかな……………」

普通ならあんな事言われたら気持ち悪いとか何か嫌な気持ちにな
るはずなのに。

「何だろう。この嫌じゃない不思議な気持ち。嫌じゃないけど、凄く
変な感じがする。」

よくわからない気持ち私の中を駆け巡るのを感じた。

第10話 モヤモヤな気持ち

昨日の小野寺にあんな事を言ってしまったため俺は夜に全然寝る事が出来なかった。おかげで今は寝不足でとても眠たい。

「ふわぁ、眠たく」

「おはよう、凧君」

「うおっ………ってなんだ風」

いきなり声をかけられ後ろを向くと笑いながら軽く手を振っている風が立っていた。

「何だって言い方はないんじゃないかな〜？」

「悪かったよ。ちよつと寝不足でさ」

「昨日の夜何かあったの？」

「………まあ、色々」

風に昨日の事を話したら絶対からかわれるに決まってる。だから、風には言わないでおこうと決めた。

「もしかして、昨日春に言ったことを気にしてるの？」

「………なんで知ってるの？」

昨日あの時には俺と小野寺しかいなかった筈なのにどうして風は知っているのだろう。

「あ、本当だったんだ。適当に言ったら本当にあつてるとは思わなかった」

「カマかけたな!!」

ここが食堂だという事を忘れて俺は風に叫んだ。周りで朝ごはんを食べてるみんなの目が俺の方に集まる。

「………ごめん。何でもない」

そう言っただけで俺と朝ごはんのお盆を取り適当な席に座る。すると、風は俺の横に座ってきた。

「………なんだよ？」

「別に〜。ただ、ちよつと凧君とお話ししたいだけだよ」

風はいつものように微笑み朝食を取り始める。俺は何か嫌な感じがしたが黙って俺も朝食を取り始める。

「昨日何があつたの？」

「何でもないって」

「何かあつたから気にしてるんでしょ？」

「本当に何でもない」

「ええ、つまらないな」

俺が昨日何があつたのかうつかり漏らしてしまったが内容はまだ聞かれてないんだ。内容さえ聞かれなければ心配ない。

「クラスで幼い頃の風君の恥ずかしい話をされるのと今ここで昨日の事話すのどっちがいい？」

「スンマセン。言いますからマジでそれだけはやめてください」

幼い頃の話しを持ってくる何て風のやつ卑怯だな!!

「じゃあ、お願いね」

「……………昨日、俺がもし好きな女の子が出来るなら小野寺か小野寺先輩がいいって本人の前で言っちゃったんだよ。心の中で留めておくつもりだったのに」

「……………ふーん」

「まったく最悪だよ。おかげで今日から小野寺と何か顔合わせにくくなっちゃった」

「確かにそれは春が聞いたらどう思っちゃうんだろうね」

「そうだな……………っておい、なんだその顔。明らかお前今楽しそうな顔してたぞ」

「ええ、そんな事ないよ」

風のきつきの顔は明らかに何かを考えているような顔だった。少なくとも俺を心配してるような顔ではなかった。

「とにかく、余計なことはするなよ」

「それはしないけど……………なんで春や先輩はよくて私はダメなのかかな？」

風は俺の顔を覗き込むように聞いてくる。

「べ、別にお前がダメって言ってるわけじゃないよ。前にも言ったけどお前は幼馴染っていう事もあって距離が近すぎるからあまりそんな風に見れないだけだ」

「……じゃあ、もし私が幼馴染じゃなかったら風君は私に振り向いてくれたのかな？」

「んなっ!？」

そんな事は1度も考えた事がなかった。風が幼馴染だからという理由で恋愛対象として見れなかったが、もし風が俺と小野寺の時みたいな出会いをしてたら。いや、そんなことじゃなくて普通の出会いだったとして……俺は風に恋をするのだろうか？

「……もう、風君ったら何真剣に考えてるの？そんなの冗談に決まってるじゃない」

風は笑いながら覗き込んでいた顔を離した。そして、食べ終えた朝食をお盆に乗せ立ち上がる。

「風君、私は風君をただの幼馴染として見てるわけじゃないんだよ。」

「は？何を言ってる」

「私にとって風君は特別な存在なの」

風はいきなり何言ってるんだ？俺には言ってる意味がよくわからない。

「それともう一つ。周りをよく見た方がいいよ」

そう言うとき風はお盆をカウンターの方向に戻しに行った。てか、周り？

「黒崎……てめえ、何朝から女の子とイチャついてんだよ。非リア充こ俺たちに見せつけてんのか？」

俺の周りにいる男子達が凄い形相で睨んでいた。やばい、これは本当にやばい。

「いや、待て。別に俺はイチャついてたわけじゃねえ」

「うるせえ。何が特別な幼馴染だ。バスの時から我慢してたがもう無理だ。みんな！かかれー!!!」

『うおおおおおおお!!!』

「ちよ、まっ!!」

その後の俺の記憶はない。次に起きた時にはすでに夜になろうとしているところだった。

「くそ……何でこんな酷い目に」

「まあまあ、よかったじゃない」

「うっせえ!!元はと言えばお前があんな変な事とか言わなかったら俺が気絶する事なんてなかったんだ!」

今は林間学校毎年恒例の肝試しをやるうとしてしている。この肝試しは絶対男女一緒に行動する事になっており、そしてペアになった男女は絶対手を繋がなければならぬ。ということ、今は女子から順にクジ引きをするところだ。

「で、風は何番だったんだ?」

「秘密。もしかして私とペアになりたかったの?」

「ま、まあ普段喋らない女子となるならお前となる方がいいかな」

まあ、これはクジ引きだから例え風の番号を知っていたとしてもどうなるという事ではない。ちなみに、今は俺のそばに風と小野寺がいるが小野寺は一言も喋らない。昨日の事を気にしてるのだろう。

「ねえ、私と春。ペアになるならどっちがいいの?」

「!!?」

「はあ?」

風はいつものように微笑みながら聞いてくる。小野寺はそれを聞き肩をビクンとさせる。

「そんなの決められるわけ……あ、次男子だ。行ってくる」

俺はクジ引きを引くために列に並んだ。まあ、何番になろうと俺の知ったことではない。

「……………8番か。誰と一緒にんだろう」

俺は一通り女子に聞いたが8番の番号を持った女子はいなかった。

「まさか……………本当に風なのか?」

俺は風と小野寺の所に戻る。

「なあ、お前ら『凧君は何番?』え?……………8番だけど」

8番と言った瞬間、風の手が一瞬ぶれたように見えた。

「あれー？8番って春の番号だよなー？」

風は明らかにおかしい口調で小野寺に尋ねる。

「え？私の番号は……あれ、8番になってる!？」

8番になってる？…どういうこと？

「わー、すごい。風君と春がペアになるなんて凄い偶然だねー」

「おい、風。さっきからその変な棒読みはなんだ。なんかやだからやめてくれ」

まあ、何が起きたかよくわからないけど俺のペアは小野寺って事か。昨日の事もあって気まずいけど仕方ないか。

(ちよつと風ちゃん！…どういう事！)

(いいからいいから。春も知らない男子と一緒になるよりはいいでしょう。)

(うっ……それは)

(それに何か話したい事があるなら2人きりで話した方がいいの。ね?)

俺が考え事をしているうちに2人も何か話していたようだ。

「じゃ、頑張つてー。私は相方の子を探してくるから」

そう言つて風は駆け足で行つてしまった。

「ま、まあ、何だ……とりあえず、よろしくな」

「う、うん」

や、やばい。昨日の事もあってすげえ気まずい。もう表現しにくいけど本当に気まずい。と、とにかくなんか話さないで。

(ど、どうしよう。昨日のあの言葉のせいで黒崎君の顔をまともに見れない。なんか話題を出さないと)

「あ、あのさ」

俺と小野寺の声が重なる。

「お、小野寺が先に言えよ」

「いや、黒崎君からでいい」

「いや、小野寺が」

「黒崎君が」

「小野寺から」

「黒崎君から」

「……って、何だこれ。なんの連鎖だよ！何でこんな付き合いたてのカツプルみたいな事してんの俺たち！」

『8番の人ー、こつちきて準備してくれ』

「あ、俺たちだ。行こうぜ」

「う、うん」

「……そういえば、肝試し中は手を繋がらないといけないんだっけ。手握るぞ、とか言ったらなんか気持ち悪いからそつと……………」

「つっ!!!」

俺が小野寺の手を触れた瞬間、小野寺が凄い勢いで俺から後ずさつた。

「えっ?」

「……………あ、ごめん。肝試し中は手を繋がらないといけないんだもんね。あはは」

小野寺がこつちに戻ってきて手を出してくる。俺はその手をそつと握つた。

「8番の人ー……………ってなんだ風かよ。何だ？付き合いたてのカップルみたいな顔しやがって。羨ましいね」

「べ、別にそんなんじゃないやねえよ！それより、なんでお前がここに?」

「ん?これの実行委員だから」

翔太、実行委員だったのか。知らなかったな。

「てか、何ムキになつてんだよ。そんな事したっていいことなんてねえぞ」

「うっせ!」

「…………そろそろ時間だ。2人ともラブラブしてこいよ!」

「んな事しないっての!!」

俺と小野寺は肝試しに行くために歩き出した。

『うああああああ!!』

「すげえ、この人よくできてるな。でも、これ誰なんだろう?」

「わからない。でも、何処かで見えた事ある顔だよね」

今、俺と小野寺は肝試しのルートを歩いているが俺もだが小野寺もこういうのには強いようなので全くビビったりしない。むしろ、楽しんでこいつは何組の誰かみたいなお話をしている。

「にしても、毎年こんなにくっつてると思うとすごいな」

「本当。お姉ちゃんは去年大丈夫だったのかな?」

相変わらずお姉ちゃんの事を心配する小野寺。シスコンなんだろうな。

「ねえ、黒崎君。こんな状況だけど聞いてもいいかな?」

いきなり真剣な顔になって話し出す小野寺。

「何だ? って言ってもわかるけどな。昨日の事だよな?」

「うん。どうして、あんなこと言ったの? やっぱ、ちよつと気になつて」

俺に好きな人ができたとして何故小野寺か小野寺先輩だったら楽しいと思つたのか。

「……………わかんね」

「へっ?」

「悩んだんだけど自分でも何でそう言ったのかわかんなかったよ。俺恋愛した事ねえしな」

小野寺や先輩が可愛いからとか優しいからとかなのかわからない。けど、お前や先輩と一緒にいる時は凄え楽しいぞ。バイトとか始めたばっかだけで止められそうにねえもん」

「そ、そう言ってくれると私も嬉しいよ。私も黒崎君と一緒にいる時は凄く楽しいし」

俺と小野寺は歩きながらも話をする。お化け役の人たちが出なくなったのは気のせいだろうか。

「だから、もし彼女にするなら小野寺か先輩がいいって思つたのは、い

つも一緒にいると楽しいからなのかもしれない」

「そ、そうなんだ」

俺にはまだ恋という気持ちがどういふものなのかわからない。だから、俺は恋という気持ちを今回の事で知りたくなった。

「……………私もね。昨日からおかしいの」

「えっ?」

「昨日、黒崎君にああ言われて私男の人って苦手だから嫌な気持ちになるはずなのに全然そんな事ないの。どうしてだと思っ?」

俺と同じように小野寺も悩みを抱えていた。俺とはまた別の悩みのようなのだ。

「それは多分、小野寺がその男の人が苦手なのを少し解消できたんじゃないのか?」

「解消?」

「うん。だから、嫌な気持ちを感じなくなったとか」

そうだとしたら喜ばしい事だ。それだったら翔太や他の男子とも仲良くなれるように努力をしていけばいいだろうから。

「そうだったらいいんだけど、なんか違う気がする。もっと、重要な……………」

小野寺の男子恐怖症よりも重要な? そんな事って何かあるのかな? ?

「……………もしかして、お前俺に何か特別な感情でもあんのか?」

「えっ?」

小野寺が男子で普通に話すのは俺と一条先輩くらいだ。他の男子はあまり話そうとしない。その内の1人にあんな事言われ、まして、まだあつて3ヶ月も経ってない男子に嫌な感情を感じないわけがない。これは俺の自意識過剰でしかないのだが。

「……………確かに黒崎君は私にとって特別だけど。でも、そんな特別な感情なんかは」

「そうだよな。そんなわけは……………ってあれ、いつの間にかゴール前まで来てる」

小野寺の悩み事を考えながら歩いているといつの間にかゴール地

点まで来ていた。……あれ？何で途中何も出てこなかったんだ？

『何であるの2人はあんなにシリアスな感じを醸し出してんだよ!!脅かしに行こうと思ってもいけねえじゃねえかよ!!!』

お化け役の人達の考えが全員一致した事を俺達は知らなかった。

「……まあ、いいか。この事はまた今度考えよう」

「そ、そうだね。今の私たちにはきつとわからないことだよ」

(だけど、このモヤモヤする感じ。あまり男の人とは関わらないようにして来たからわかんないけどこれって………)

「どうかしたか？」

「……ううん、何でもない」

(そんな事あるわけない。さっき言ってた特別な感情はただ唯一私が楽しんでお話しできる男子っただけ。ただ、それだけ………なはず)

第11話 この前のオカエシ

肝試しが終わった後、俺は男子達に林間学校3回目となる襲撃を受けたが林間学校は無事に終えることができた。俺と小野寺も元通りの関係に戻ることができ一件落着となり数日経ったある日。

「え、小野寺と先輩が風邪?」

『そうなんだよ。小野寺の風邪が春ちゃんにうつっちゃったみたいでさ。もし風が暇なら手伝ってくれねえか?』

日曜日だったので家でゴロゴロしていたが、いきなり一条先輩から電話がかかってきた。用件は小野寺と先輩が風邪をひいてしまったということ。

「まあ、別に暇ですからいいですけど」

『よかったー。じゃあ、準備が出来次第来てくれ、頼むな!』

プツン、と電話が切れた。声の感じからしてもどうやら結構忙しいみたいだ。ということ、俺も急いで準備に取り掛かる。

「あれ、お兄ちゃん。どこか行くの?」

「ん?ああ、ちよつと友達と先輩の家に」

準備ができたので家から出ようとした瞬間、居間からアイスを食べながら歩いてきた咲が声をかけてきた。

「お兄ちゃん……もしかして、小野寺先輩のところに行くんじゃない?」

「そうだけど?」

ビュオ!!

そういつた瞬間、俺を家から出さないように玄関の前で立ち塞がる。

「……………咲?」

「お兄ちゃんが小野寺先輩の所へ行くというなら私は絶対お兄ちゃんを家から出さない!!」

「はあ?」

いきなりの発言に俺は素っ頓狂な声を上げてしまう。てか、家から出さないって。

「いや、先輩だけじゃなくて俺の友達もいるんだ。通してくれないか

？」

「嫌！友達がいるにしろいないにしろ小野寺先輩の所は行かせない！」

小野寺先輩は俺が想像する以上に咲に嫌われてしまったようだ。あんなにいい人がどうして。

「頼む。通してくれよ」

「嫌！」

「今度アイス奢ってやるから！」

「嫌！」

「今度俺がお前の好きなどころ連れてってやるよ」

「い……嫌！やっぱりダメ！」

ちよつと心が揺れたようだが折れなかった。こうなると、咲はなかなか心が折れない。だが、どうにかしないといけない。

「じゃあ、今日から3日間俺がお前と一緒に寝る。これでどうだ？」

「い………3日じゃダメ！」

「1週間か？」

「そ、それならいいよ」

1週間、咲と一緒に寝る事であろうやく許しをもらえた。どうやら俺はそうとう咲に甘いようだ。こいつの頼み事は不思議と断れない。

「じゃあ行つてくるな」

「うん。いってらっしゃーい。変な事されたらすぐ帰ってくるんだよ」

「そんな事されねえよ」

外に出た俺は自転車を用意してすぐに小野寺先輩の家へ向かった。

「着いた……けど、どっから入ったらいんだ？」

正面から入ろうとしたが『おのでもら』はどうやら今日は休みのよう

だ。小野寺と先輩が風邪を引いてるからだろうか。

「……そういえば裏口から入れたな」

裏口から入れる事を思い出した俺は裏口へ回る。裏口のインターフォンを鳴らししばらく待つと一条先輩が出てきた。

「おお、やつと来たか。2人の面倒見るの大変なんだ。まあ、春ちゃんはさつき寝ちやつたけど」

「お疲れ様です」

俺は小野寺先輩の家に上がり、一条先輩と共に2階へ上がる。

「小野寺？…入るぞ？」

「あ、うん。どうぞ」

一条先輩が小野寺の部屋のドアをノックして中へ入る。俺もそれに続くように中へ入った。

「一条君、春は大丈……あれ、風君!？」

「こんにちは、小野寺先輩」

「こ、こんにちは……じゃなくて!どうして風君がここに!？」

俺が来たのを見て起き上がる小野寺先輩。いきなりの事で状況を理解できていないようだ。熱が出るせいか顔が赤くなっている。

「1人で2人の看病するの大変だから風を手伝ってもらおうと来てもらったんだ」

「そ、そうなんだ。わざわざありがとう、風君」

「い、いえいえ。気にしないでいいですから。風邪なんだからとりあえず安静にしてください」

起き上がった小野寺先輩に寝転ぶように諭す。小野寺先輩は言う通りに寝転がってくれた。

「さてと……どっちがどっちの看病をします？」

「そりゃ……」

「……先輩の看病がしたいならそういえばいいじゃないですか」
「なっ!?誰もそんなこと言ってないだろ!」

言っただけでも表情で丸わかりなんですよ。と言いたいがあえて突っ込まないでおく。

「あ、あ的一条君……風君と話したい事があるから悪いけど春の看病

に行ってもらってもいいかな?」

「んなっ!」

一条先輩が絶句する。それはそうだろう。小野寺先輩がなぜ先輩ではなく俺を指名したのだから。

「……先輩、今悔しいって思ったでしょ?」

「う、うるせえ! 風、小野寺のこと頼んだぞ」

先輩は俺に小野寺先輩の事を頼んで部屋から出て行った。そして、俺は小野寺先輩と向き合う。

「さてと……体調の方はどうなんですか?」

「うーん……さつきよりはマシかな。熱も下がってるみたい」

「それは良かったです……あ、タオル一回濡らしますね」

「うん。ありがとう」

先輩のおでこにあるタオルとり、一条先輩が用意しといてくれた水につけタオルを冷やす。よくしばってから先輩のおでこに置いた。

「これでよし!」

「……何かこうしていると、この前とは逆だね」

「そうですね。この前のお返しみたい。ただ、咲のやつが大分先輩を目の敵にしていますよ」

「やっぱり……風君の妹だから仲良くしたいんだけど」

咲は一度目の敵にすると、中々その人を許そうとしない。それから仲良くなる方が難しいのだ。

「……それで話つてのは?」

「ううん。別に風君と話したい事があるんけじゃないの」

「へっ? じゃあ、どうして?」

「何ていうか、今日は風君と一緒にいたい気持ちなの。風君とおしゃべりしたかったし、風君と一緒に居たかった。だからかな……あ、別に一条君が嫌いな訳じゃないんだよ」

「そんなのわかってますよ」

内心俺はすごく嬉しかった。先輩と一緒に居たかった何て言われて喜ばないわけがない。

「でも、ちゃんと休まないとダメですよ。病人なんですから」

「わかってる」

そう言うと、先輩は目を閉じた。寝ようとしてるのかわからない。「なんかあったらすぐいつてくださいね。俺ここにいますから」
「う、うん」

(やっぱり優しいな風君は。一条君みたいな感じですがごく安心する)
先輩が目を開けてじつとこつちを見ている。俺の顔に何かついてるのだろうか。

「あの、どうかしましたか?」

「いや、その……えっと。一つお願いしていいかな?」

「はい。俺が出来る限りなら」

「じゃ、じゃあ……」

布団から手を出し、熱のせいで赤くなっている顔をさらに赤くしながら言った。

「わ、私の手、握っててくれない?」

「ふえ?」

なんでいきなり?てか、先輩の手を握るって……

「な、なんかそうしてくれる方が安心できそう。ゆっくり寝れそうな気がするの……ダメ?」

「うっ……」

熱を出して辛いのか、涙目になりながら俺をじつと見ている。先輩が風邪+涙目+可愛い!!いや、そんなの断れるわけがない。

「じゃ、じゃあ失礼して」

先輩が出してきた手をそつと握る。

ずつと、布団の中に入れていたせいとか、熱が出ているせいとか、とても手が暑くなっていた。

「あ、風君の手。冷たくて気持ちいい」

「逆に先輩の手は暑いですね」

「そ、そうかな?自分じゃよくわからなくて」

より安心できるように俺は先輩の手を両手で包み込むようにして握る。付き合ったりもしないのにこんな事していいのかな?

「……ね、ねえ。もう一ついい?」

「……え？あ、はい。何ですか？」

考え事をしていたせいで一瞬返事が遅れてしまった。小野寺は瞼を閉じそうになりながら言った。

「わ、私を……じゃなくて……でよ……」

俺に手を握られ安心したのか、先輩は瞼を閉じてスウー、スウーと寝息を立てた。最後に何て言おうとしたのか声はとても小さかったが、俺にはよく聞こえた。

「おやすみなさい、小咲さん」

私を苗字じゃなくて名前で呼んで。彼女は寝る直前にそういったのだ。実は小咲さんは甘えん坊なのかもしれない。

小咲 side

「……………あれ？」

私風君とお話しててその後どうなったんだっけ。

「わっ！もうこんな時間！」

時計を見ると7時をまわっていた。体を起こしベッドから降りようとすると左手に違和感を感じた。

「……………風君」

違和感を感じたのは風君が私の左手を両手で握ってくれたから。その風君は私の両手で握りながらぐっすり眠っていた。

「私のお願。ずっとしててくれたんだ」

寝る前に風君に両手に握るように言ったのを覚えている。もう一つ、何か言った気がしたけどそれは思い出せない。何を言ったのかな？

「それにしても……ぐっすり眠ってるね」

右手で風君の頭をそつと撫でる。

「二条君は優しいし、頼りになるし、とてもいい人。だけど、それは風君も同じ。風君だって後輩として……友達として好き」

ポツリポツリと呟くように独り言を言う。

「二条君は一人の男性として好き。だけどら最近、風君への気持ちがわからなくなってきた。私は風君を……黒崎風をどう思ってるのかな……」

風君は寝てるしきつと聞いてないよね。私は寝ている風君の頭を撫で続けた。

おまけ

「うーん……小野寺の部屋に入って様子を見るべきなのか！それともじつとしておくべきなのか！俺はどうすればいいんだー!!!」

小野寺の部屋の前で一条楽は絶叫していた。

おまけ2

「お兄ちゃん、遅い！早く帰ってきてよー!!」

「うるさいな、咲。テレビの音聞こえないから静かにして！」

なかなか帰ってこない兄を心配する妹と、その妹を注意する姉であつた。

第12話 とある日の学校へのトウコウ

「お兄ちゃん、学校一緒に行こう?」

「ん? いいぞ。一緒に行こうか」

学校に行くために家を出ようとした時に階段を走って降りてきた妹の声に反応して俺を動きを止める。

「ちよつと待っててね。すぐ用意するから!」

「なるべく早くしろよ」

はい、と返事をして居間に向かう。ちなみに、妹の学校は凡矢里中学のため途中まで通学路が一緒なのだ。

「……あれ、てか姉貴は?」

「なんか用事あるとか行つて慌てて行っちゃったよ」

「あ、そう」

いつもはクールな感じでサバサバしてるから姉貴が慌ててるところはあまり想像できなかった。

「忘れもんしてないか?」

「お兄ちゃん心配しすぎ。私もう中3なんだよ。そんなの大丈夫だよ」

「そつか。じゃあ、行くか」

「うん!」

俺は咲と一緒に出て家の鍵を閉める。そして、いつものように歩いて向かう。いつものように……………

「おい、咲」

「なーに、お兄ちゃん?」

「お前何当たり前のように腕組んで来てんだよ」

「だって、お兄ちゃんの事大好きなんだもん」

「理由になつてねえよ!!」

誰かにこんなところ見られても見ろよ。俺の学園生活が一瞬で終わってしまうだろうが。

「はあ……………」

「あれ、お兄ちゃんお疲れだね」

「本当。なんか凄くやつれてるね」

「誰のせいだと思っただよ!!……………つて風!？」

いつの間にか俺の右横で風と一緒に歩いてた。

「おはよう、風君、咲。朝から楽しそうだね」

「おはようございます、風さん！お兄ちゃんがこうやって歩く事を許可してくれたんですよ！」

「俺がいつどこでしたんだよ!!」

「えー、風君。私もいい？」

「許可すると思っただよ!!」

「じゃあ、勝手にする」

「勝手にすんな！離れろ!!」

「わーい、風さんとおそろい」

「どこで喜んでんだよ!!」

ダメだ。突っ込みすぎて疲れる。風と咲はいつもこうだ。この2人は色々何か似ている。具体的にはわからないがきつと共通点があるんだ。それは間違いない。

現在、右横で俺の腕に風。左に咲。こんな様子をもし誰かに見られたりでもしたらマジでやばい。

「……………あ」

「なににこの展開。面白そう」

とか、思ってたら通学路で何故か舞子先輩と宮本先輩に会う俺。今日マジでついてないな。

「久しぶりだなく、風。それと、咲ちゃん」

「おはようございます、舞子先輩。私はお兄ちゃん以外の男はすべて敵だと思ってるのでどうか私から10mくらい離れてください」

いきなりの舞子先輩への罵倒。あんな事を言われても舞子先輩は依然とヘラヘラしている。

「舞子先輩、宮本先輩、お久しぶりです。2人はどうして一緒に」

「それは『俺とるりちゃんは運命の赤い糸で結ばれてる』あんたは黙ってなさい!!」

ふざけた事を言おうとした舞子先輩の顔面をいきなり殴る宮本先

輩。何か2人とも変わってなくて安心した。

「さつきそこで会ったのよ。まあ、私としては今のあなたの状況の方が気になるわ」

今の状況……右に風。左に咲。

「ち、違うんですよ!!あ、宮本先輩はあったことないですよね。左にいるのが俺の『将来のお嫁さん』違うだろ!!」

「違うよ咲。風君は私の将来のお嫁さん『お前のもねえよ!』ええ……」

「あなた……そんな人がいるなんて私知らなかったわ」

「違います!こいつは俺の『妻』お前もう黙ってる!!」

黙らせようと咲の両頬を引っ張ろうとしたが、2人に両腕を組まれているため俺の腕は動かなかった。

「ふふふつ、るりちゃん。代わりに俺が教えて差し上げようか?」

「別にいいわ。あなたはとつとと学校に行きなさい」

「冷たいなく、るりちゃんは」

中学の時つてこの2人こんなに仲良く喋ってたっけ?いや、そもそも喋ってるどころとかあったっけ?

「風の左にいる子は……俺のフィアンセです!」

「もう死になさい!!」

瞬間、宮本先輩と咲のアップパーが舞子先輩の顎と鳩尾に入った。あれは確実に一発KOだな。……あ、やっと左手が自由になった。

「冗談は置いといて。宮本先輩、こいつ俺の妹の咲です」

「初めまして。風お兄ちゃんの妹の黒崎咲と言います。好きな人はお兄ちゃんです!」

自己紹介しながらまた、俺の左腕に抱きついてくる咲。てか、風はいい加減に一度離して欲しい。

「私は凡矢里高校2年の宮本るりよ」

「そういう事なので、咲は妹。風は幼馴染のスキンシップ?っただけなんで2人とは付き合ってるわけじゃありませんよ」

「……まあ、最初からわかってたけどね」

「わかってたんですか!?!」

「ええ。だってあなた……恋とかした事なさそうなもの」
「……………」

事実だから何も言い返せないけどこうはつきり言われると流石に傷つく。

「お兄ちゃんを悪く言わないであげてください!!それにお兄ちゃんはそのままでもいいんですー!」

えっ、何。今こいつは何を言おうしてるの？

「だってお兄ちゃんは……………一生私のもんですから!!」

「お前のものじゃねえよ!!」

「え……………」

「おい、なんで、そうだったの?みたいな反応してんの?当たり前だろうーが!!」

「……………あ、ごめん。そうだった。間違えたよ」

咲はえへへ、と頭をさすりながら言う。うん、間違えに気づいてくれたらそれでいいんだ。

「お兄ちゃんは風さんのものだもんね」

「ちげえよ!!」

「そうだったの?私嬉しいな」

「風もまんざらでもないみたいなの顔をするな!!」

ダメだ。咲がいると調子狂う。てか、俺と風が付き合う事に関しては何も言わないんだな、咲の奴。……………俺に彼女が出来たことないのってこいつのせいでもあるんじゃないか?

「まあ、あなたの恋愛に口を出す気はないけど一つだけ言うと……………あなた、苦労してるのね」

「そう言われると心が落ち着きます」

なんか宮本先輩に慰めてもらった。今のはだいぶ心が楽になった気がする。

「あの一、ちよつといいですか?」

風が控えめに手を挙げる。

「時間、やばいですよ」

そう言われて一瞬時間が止まった気がした。そして、携帯の時計を

見る。時間は8時25分。

「……………急げー!!!」

その瞬間俺たちは同時に走り出して学校に向かった。

結局間に合わなかったが。

第13話 サイアクな1日

「くそーなんで俺たちこんな目にあってんだよ！」

「く、黒崎君。私疲れたよ」

俺は放課後の廊下で息を切らせながら周りを見渡していた。横には走り疲れてバテた小野寺が

「いたー黒崎を見つけたぞー！」

「ちっ、見つかったか！」

数人の男子が俺を追いかけてくるのを見て俺は小野寺の手を取りその場から駆け出す。

「待てや、黒崎！」

「待てと言われて待つバカはいない！」

俺と小野寺は必死に走る。そして、物陰を見つけたのでそこに隠れることにした。

「くそ、どこに行った？」

「そう遠くは行ってないだろ」

「探せー」

男子たちは散り散りにどこかに行ったようだ。そもそも、なんで俺と小野寺がこんな目にあっているのか。それを今から説明しよう。

「朝は酷い目にあったね、風君」

「いや、それお前のせいだからな、風」

昼休み、俺はいつものように机を移動させ風と小野寺とポーラと一緒にご飯を食べようとしていた。

「お、なんだ風。またお前は男子をほっといて女子と食べるのか？」

「翔太……それは妬んでるのか？てかお前もさりげなく混じってきてるじゃねえか」

そこに翔太が椅子を持ってやってきた。俺も拒否する意味はないので翔太のために椅子をずらす。

「いいじゃん別に。林間学校のバスが一緒だった仲なんだし。なあ、小野寺」

「へっ……えつと、まあ、人数は多いほうが楽しいと思うしいんじやない？」

小野寺は男性恐怖症だ。混ぜて来るのは遠慮したいが、断るわけにもいかない。ちよつと微妙な感じなんだろう。

「まあ、わたしはどっちでもいいわ。それより、ご飯よ」

ポーラはコンビニで買ってきたと思われる袋を取り出す。中に入っていたのは数個のパンと飲み物。そして、大量のお菓子。こいつ、栄養バランス悪。

「そうだね。私もお腹すいたし」

風は鞆から弁当を取り出す。中身は色とりどりのオカズとふりかけご飯。うん、これがバランスのいい食事だ。小野寺も似たような感じだな。

「じゃあ、食べるか。いただきまーす」

俺も箸を取り弁当を開ける。今日は確か咲が作った弁当だったよな。一体どんな弁当なんだろうか。

「つつ!!……………」

俺は驚いて一度開けた弁当箱を閉じる。

「黒崎君、どうかしたの？」

「いや、なんでもない」

気のせいだ。気のせいであつてほしい。てか、絶対気のせいだ。うん、そう決まつてる。そう思いながら俺はもう一度弁当を開けた。

「……………なんだよこれー!」

気のせいだと良かったがそんな事はなかった。俺の弁当は2段弁当だ。1段目には色とりどりのおかず。それはいい。問題は2段目だ。2段目には白ご飯が入っていた。白ご飯の上に乗ってるいた海苔。この海苔が問題なのだ。妹の愛情がこれで1発でわかる。海苔で文字が書いてある。

『おにいちゃんLOVE』

「……………咲のやつめ」

「なんだ黒崎の弁当。『おにいちゃんLOVE』って。お前妹に愛されてんのか？」

「あ、ああ。ちよつとブラコン気味の妹がいてな」

「私それお姉ちゃんに聞いたよ」

小野寺は小咲さんに聞いていて知っていたようだ。てか、翔太。何隣で爆笑してんだよ。

「くそ、こんな弁当食いづらい」

だが、これを食べないと昼を乗り切れないし、咲が一生懸命作ってくれた弁当だ。

「食べないと悪いよな」

俺は白ご飯を口に運ぶ。うん、美味しい。

「いいなー、風君。こんなにも風君のことを思ってくれる妹がいるなんて」

「今日の朝にその妹と一緒に俺の腕に抱きついてきたお前が何言ってるんだよ」

「え、何。今日の朝遅れてきたと思ったらお前妹と風ちゃんに抱きつかれて遅れたの？」

しまった。こんなの翔太に言わなければよかった。

「ま、まあそれだけじゃないけど」

「ふーん、そうなのか」

「おい待て、納得しながら何メモしてんだよ」

「ん？別になんでもねえよ」

なんでもなかったら普通はそんな事はしない。そう思ったが何も突っ込まない事にした。

「ねえ、黒崎君。最近、黒崎君とお姉ちゃん。無駄に仲良くない？」

いきなりよく分からないことを聞いてくる小野寺。

「そうか？普通だぞ」

「だって、バイト中、お姉ちゃんは黒崎君の事風君って呼ぶし、黒崎君はお姉ちゃんの事小咲さんって呼ぶし」

何故か小野寺は頬を膨らませている。怒ってるのかもしれないがとても可愛いようにしか見れない。

「春、もしかして嫉妬？」

「へっ？……ち、違うよ！私は別に嫉妬なんか！」

「あー、やっぱりそうなんだ」

「違ったら違うの！もう、風ちゃんの意地悪！」

小野寺は頬を赤くして風をポカポカ叩いている。こんな小野寺も可愛いな。

「もう、本当に嫉妬とかじゃないからね！」

「わかったわかった」

大体俺が小野寺に嫉妬する理由なんてないもんな。でも、嫉妬じゃないなら何だ？

「……と、次は移動教室だから準備しないと」

俺は食べ終えた弁当を鞆の中にしまい、次の授業の準備をする。考えるのはまた今度にしよう。

「……いつか、私も黒崎君とお姉ちゃんみたいな関係に」

「ん？なんか言った？」

「ううん、なんでもない。行こ」

俺は小野寺と一緒に次の授業の教室に向かった。その時俺は知らなかった。翔太が男子たちに俺が男子たちから逃げることになった話しをしている事を。

放課後

「はあ……終わったー。でも、今日はバイトだ。早く行かないと」

確か今日は小咲さんはいなくて俺と小野寺が働く日だったな。なんか寂しいような感じた。

「なあ、黒崎。ちよつといいか?」

クラスの男子が俺に話しかけてくる。そいつの後ろには数人の男子。何だかすごく嫌な予感がする。

「な、なんか用か?」

「いやいや、ちよつとお前に聞きたいことがあってさ」

「聞きたい事?」

俺なんかこいつらに悪い事したっけ? いや、でも俺クラスでは翔太以外の男子とはあまり話さないし。

「お前は小野寺や風ちゃん、マツコイだけでなく小野寺先輩やお前の妹の咲ちゃんともイチャコラしてるそうだが、そのところどうなんだ?」

「……………はい?」

「お前、何言って」

「質問に答えろ」

なんでこいつらがその事を知ってるんだ? いや、別にイチャコラしてるわけじゃないんだけど。

「何でそんな事を?」

「翔太の奴が色々話してきた」

あいつのせいだよ!!

「で、どうなんだ?」

「いや、別にイチャコラしてるつもりはないけど」

「本当か?」

「う、うん。そのつもりはない」

男子たちは俺に詰め寄りながら聞いてくる。

「ね、ねえ、黒崎君。そろそろ行かないと間に合わないよ?」

そんなことは関係なしで小野寺は俺に話しかけてきた。でも、小野寺の言うことは確かだ。

「悪い。俺この後バイトだから行くな。行こ、小野寺」

俺は詰め寄ってきた男子たちに手を振り小野寺の手を取り教室から出ようとした。だが、それがいけなかったのだ。

「「ちよつと待てー!!」」

「まだ何か用なのか？」

後ろを振り向くと男子たちは怒りの表情を、女子はキヤーキヤー騒いでいた。

「何お前教室で小野寺と手繋いでんの？」

「えっ………あ、いやこれは」

さっさと教室を出ようとして小野寺の手を取った。それは逆に男子たちを怒らせる起爆剤となってしまうた。小野寺も顔を赤くして、るせいでそれっぽく見えてしまうのだ。

「やつぱり、お前小野寺と……」

「モテない男子の敵！」

「春ちゃん、やつぱり黒崎君とー！」

教室で男子と女子が騒いでいる。抜け出すなら今しかない。

「小野寺、行くぞー！」

「へっ、うわっ!!」

俺は教室を出て走り出した。

「おい、黒崎が小野寺を連れて逃げ出したぞー！」

「何?! 追いかけるぞー！」

男子たちも教室を出て俺たちを追いかけてきた。

「あー、最悪だ。これ間に合うのか？」

そして現在に至る。追いかけてきた男子たちをなんとか振り切つて今は物陰に2人で座り込んでいる。

「間に合わないかも。今なら誰もこないよね? お母さんに連絡しとくね」

「ああ。頼むよ」

廊下に誰もいないことを確認して、小野寺は携帯を取り出し小野寺さんに電話を。俺は男子たちが来た時にすぐ言えるように見張りをする事にした。

「あ、もしもしお母さん。ごめん、ちよつとしたようで今日の仕事遅れそう。……………うん、私も黒崎君も。……………ち、違うよ！2人でそんな事してないから！本当だからね！」

何があったのかわからないけど小野寺は電話を乱暴に切った。……………よく考えたら、このまま小野寺だけ帰らせてもいいんじゃないのか？

「お母さんに連絡したから。これで大丈夫だよ」

「ありがとう。でも、小野寺は先帰っても良かったんだぞ？これは俺の問題でもあるし」

「ダメだよ。もしあの時私が黒崎君を急かすような事がなければこんな事にはならなかったんだし、ちよつとは私のせいでもあるわけだから」

「けど、俺らが2人ともいないのはやばいだろ？」

「大丈夫だよ。あれでもお母さんはしっかりしてるし。だから、私もこっちにすることにする」

そう言つて小野寺は俺の横に座り込む。小野寺は優しいな。こんなことを起こした元凶の翔太は明日とつちめてやる。

「……………ねえ、黒崎君。こんな状況だけど一ついいかな？」

「ん？何？」

「えつと、その、ちよつと自分で言うの恥ずかしいんだけどね」

物陰に隠れてるだけだからあまり大きい声を出さないようにして話す。恥ずかしい事とはなんなんだろう？

「その、私の事を、名前で呼んで欲しいの」

「えつ？」

一瞬何を言ったのかわからなかった。いきなりすぎたから。この状況で名前を呼んで欲しいって。

「だって、なんかズルいよ。お姉ちゃんや風ちゃん、倉橋君も名前で呼んでるのに……………私だけ仲間外れにされてるみたいで」

「いや、別にそんなつもりはないんだぞ。その、俺も小野寺の事は名前
で呼びたかったし」

「本当!？」

(私の事を名前で呼びたいって一体どういうことなのかな?)

小野寺と小野寺のお母さん呼び分けるためには小野寺の事を名
前で呼んだ方が色々といいいんだよな。

「でも、なんかおかしいよね。私たち名前で呼びたかったのに呼んで
ないなんて」

「まあ、普通に名前で呼んで欲しいなんてわざわざ言う奴なんていな
いだろうからな」

それを考えたら小野寺は珍しい方の部類に入るのか。

「あははっ、それもそうだよね……えつと、風君?」

「何で疑問系なんだよ」

「だって、最初だからなんだか恥ずかしくて」

「ったく、すっかりしろよな、春」

「あっ!」

(風君に名前で呼んでもらえた。男子に初めて名前で呼んでもらえ
た。すごく嬉しい)

「春、今すっごい顔にやけてるぞ」

「えっ?嘘!？」

「ホントホント。なんか金儲けしようとしてる時みたいな顔だ」

「酷い!風君、酷いよそれ」

「ははっ、ごめんごめん」

物陰に隠れている事を忘れて俺たちは笑いあった。でも、俺と春が
もっと仲良くなれた気がしてすごく嬉しかった。

「さてと、もうここから出ても大丈夫だろ。なるべく早く行かないと
小野寺さんにも悪いし。行こうぜ」

俺たちは立ち上がりコツソリと廊下を見る。誰もいない事が確認
できたので俺たちは昇降口へと向かい、そのまま外に出て『おのぞら』
へと走った。

「やっと名前で呼んでもらえた。というか、呼び合えるように慣れた」
仕事の手伝いが終わり、私は自分の部屋のベットへと飛び込んだ。
私の顔はきつと今赤くなってると思う。

前から凧君に名前で呼んでもらいたかった。お姉ちゃんと凧君が
名前で呼び合ってるのを見て私の胸が苦しくなった。その感情が嫉
妬なのか、仲よさそうにしてる2人が羨ましかったのかわからない。
だけど、ほっておくと何だか凧君が遠くへ行ってしまふ気がしてそれ
がとても嫌だった。

「でも、もう大丈夫だよ。私も名前で呼ぶようになったんだし、これ
でお姉ちゃんにも追いつけた」

一緒にいる年数が違っても、私は凧君と同じクラス。これでお姉
ちゃんに凧君は取られない。

「……………ってあれ？なんで私凧君を所有物みたいに」

それにお姉ちゃんは一条先輩が好きだから凧君がお姉ちゃんも付
き合う事なんてないはず。

「なのに、どうして私はお姉ちゃんが凧君を取っちゃうみたいな言い
方を」

こんな気持ち初めて。この気持ちは一体なんなんだろう？

第14話 クルシイ気持ち

朝、いつものように風と一緒に学校へ向かう。だが今日はいつもと違い学校へ向かう途中で春と偶然出会い春も加えた3人で行くことになった。

「ねえ、風君。昨日の男子たちは大丈夫なのかな？」

「大丈夫だろ。そんなにずっと妬むような奴らじゃないだろうし」

確かに追いかけてきたが別に俺はそいつらを恨むつもりはない。むしろ、恨むのは翔太のやつだ。会ったら何をしてやろうか。

「うわっ、風君。怖いよ、なんか変なオーラのやつ漏れてるよ」

「おっと。ごめん、ちよつと考え事してて」

「どんな考えをしたら一体今みたいな事が」

どうやら春には俺が翔太への怒りのオーラが見えてしまっていたらしい。

「ねえ、風君」

「ん？」

「どうやって春から名前でももらえるようになったの？」

「えっ？」

「……あ、風ちゃん、これは！」

そうだ。風はまだ俺たちが名前でも呼び合い出した事を知らないんだ。まあいざればれることだろうしそんな気にすることはないけど。

「昨日、2人で逃げ回ってる時に何かあったの？」

「……どうしてお前はこんなに勘が鋭いんだよ」

「風君と春の考えてる事なら何でもわかるよ。そっかー、春が風君の事を名前で……」

風はいつものようなニコニコとした笑顔で春の顔を見る。

「な、なに？風ちゃん」

「ううん。春ばっかり風君とイチャイチャしてずるいなー、って思ってた」

「い、イチャイチャはしてないよ！」

確かにイチャイチャはしてない。でも周りからはそう見えてしま

うのかな？

「だから、私も凧君とイチヤイチャするの」

そう言って凧は昨日の朝のように俺の腕に抱きついてくる。またこれか。

「ふ、凧ちゃん!?何してるの!」

「凧君へのスキンシップ。春もやる?」

「やらないよ!というか、凧君も凧ちゃんから離れて!」

「そうしたいのは山々なんだけど、こいつ俺が腕に力が入らないように抱きついてくるから剥がせなくて」

それに凧にはあまり乱暴な事をしたくない。こんな事をしてくるといつてもたった1人の幼馴染だし。

(でも、この様子って……凧ちゃんでもしかして凧君の事?)

「ねえ、凧ちゃん」

「何?」

いつまでたつても離れないので仕方なくそのまま歩き出す事にした。そして、歩きながら春は凧に聞いた。

「凧ちゃんって凧君の事好きなの?」

「いきなり何聞いてんの!」

「好きだよ」

「しかも即答!」

即答なのは驚いたが、この好きはどういう好きなのかが全くわからない。幼馴染としてなのか、恋愛としての意味なのか。ただ、遊びで言ってるのか。どれが本当なんなのか。

「そうなんだ。凧ちゃんは凧君の事好きなんだね」

凧が俺の事を好きといった途端、春はいきなりしよんぼりしだした。

「あれ?どうかしたのか、春」

「何でもないよ」

「いや、でも」

「何でもないの!!」

春はいきなり俺に怒鳴り、早足で先に行ってしまった。

「……何だ?」

「凧君って本当に鈍いよね」

「えっ?何のことだよ?」

「ううん。何でもない。昨日みたいに遅刻したらダメだし早く行こ」

「元はと言えば誰のせいだと」

風もようやく俺の腕を離した。

「……そういえばさ。俺たちが高校に入ってから風は簡単に俺の事を好きとか言ってるけど、いいのか?」

「いいのかってどういう事?」

「だからさ、今の風は好きって言葉を人をからかうために使ってるように見えるんだよ。だから、それでいいのか?って事だよ」

風は結構な回数俺に好きと言ってきている。その大半が俺や春といった他の人物をからかうために使ってるように思える。

「……そうだね。確かにさっきのは春をからかうために好きって言ったかもしれない」

「だよな。だったら」

「でも、凧君は私が遊びで好きって言葉を使ってるように見えるのかな?」

風は背伸びをして俺の顔がくつききそうになるくらいにまで顔を近づける。

「ちよ、風!」

「どうなの?」

「……少なくとも俺はお遊びで言ってるように見えるんだけど、そうなのか?」

もしこれで風がNOと答えれば風は遊びではなく真剣に言っていた事になる。

「……どうでしょう?」

「はあ?」

「それは凧君が本当に気づいたときに教えるよ。今の様子じゃ全然わかってないみたいだし」

クスツと笑い、風は俺から離れる。

「わかってないってどういう?」

「それも自分で考えるの。早く行こ、また学校間に合わなくなっちゃうから」

「あ、ああ」

今回もまた風が何を考えてるのかわからずじまいだった。そして俺は一つ決意した。こいつの本当に考えてる事を暴く事を。

春side

「何で私あそこで怒っちゃったんだろう」

怒って先に行っちゃったけど、後ろから2人が追いかけて来ないので今は来た道を逆走している。

「はあ、私が凧君にどう思ってるのかわからない。この気持ちってなんなの?.....っあれ?」

2人を見つけたけど私は咄嗟に電柱の陰に隠れた。

「風ちゃん.....凧君とあんなに顔近づけて何してるの?」

何故なら、風ちゃんが背伸びして。まるで風ちゃんが凧君に.....キスしてるように見えたから。

「嘘.....そんな事ないよね?だって凧君は風ちゃんの事幼馴染としか見てないって言ってたし」

でも、もし2人が本当にキスしていたなら.....2人は両思いって事。流石の風ちゃんも遊びではキスしない筈だもん。だけど.....

「やだ。なんか胸が苦しい」

なんなのこの気持ち。名前で呼んでもらえるようになったのに。凧君が遠くに行ってしまうような。そんな感情が私の中を駆け巡った。

第15話 オフザケ?

今日の朝、春や風と色々あったけど普通に過ごす事できた。いや、できたと思うような気がする。俺と風はいつも通りだった。だが、春の態度がまったく違うかった。例えば……

「春ー、そのプリントとって」

「あ、うん………はい、風ちゃん」

「………何で私が?」

「いや、なんとなく」

俺が春からプリントを受け取ろうとしたら、直接渡せばいいものを何故か風に経由して渡してきたり。

「春、その唐揚げ美味そうだな。俺のハンバーグと交換しない?」

「……私のより風ちゃんの方が美味しそうだよ?」

これもおかしい。いつもならいいよー、ってくれるのに。

「なあ、風。お前いつから小野寺の事を下の名前で呼ぶようになったんだよ? やつぱり、お前らはお似合いだな」

「なっ!? 翔太、ふざけた事を言うなよ! なあ、春?」

「そ、そうだよ! 私なんかより風ちゃんの方がお似合いだよ!」

これも変だ。普通にそんなわけないでしょ、とさえいいところをなぜ俺と風がお似合いだということになるんだろう。

とにかく、朝の事が原因なのか春がおかしい。だけど、今日あったどれもが俺と風がお似合いみたいな感じになっている……あいつの中で何があつたんだろう?」

「ふむ……よくわからないな」

「何がよくわからないの?」

そして今はバイト中。春は買い出しに行っていて、俺と小咲さんの2人でレジの前で立っている。だけど、客が来なくて少し暇だ。

「こっちの話ですよ」

「………もしかして春の事?」

流星は姉妹。やつぱり妹の様子がおかしいこともわかるのかな?

「まあ、そうですね。小咲さんも春の様子がおかしいと思いますか?」

「うん。朝の時とは全然違うから少し心配で。今日何かあったの？」

「まあ、それなりに」

「私には話せない事？」

「そういうわけじゃないんですが、ちよつと……」

「……わかった。もう何も聞かないから。もし話せる時が来たら話してね」

俺の気持ちを理解してくれたのか、小咲さんは俺に優しく微笑んだ。いつも思うがこの人本当に優しいな……一条先輩も酷な人だよ。早くこの人の気持ちに気づいてあげろよな。

「小咲ー、凧君、ちよつといいかな？」

「小野寺さん？なんですか？」

「これを二人でキツチンまで運んで欲しいの。いいかな？」

小野寺さんは俺たちの目の前にいくつものダンボールを置いてくる。

「わかりました」

「じゃあお願いね。私は今からちよつと車で出るからあとよろしく」

そう言つて、小野寺さんは車でどこかに行つてしまった。

「じゃあ、これ運びますか？」

「だね。よいしょつと」

まず比較的軽そうなダンボールから運んでいく。1人だったら大変だったかもしれないけど小咲さんも一緒だったから早く終わりそうさ。

「ふう……さて後は重そうなやつ1つだけだな」

暑さのせいでする汗をタオルで拭い最後のダンボールを運ぶためにレジの方へ戻る。すると、そこでは……

「んっ……えい……えい……凧君、これ重たいよ……」

大きくて重たそうなダンボールを一人で運ぼうと力を入れている小咲さんの姿が。やばい、超可愛い。理性飛びそうさ。

「……小咲さん。それ重たそうですから俺が運びますよ」

顔を赤くなるのを感じながら、俺がダンボールを抱え持つ。

「うん……ごめんね。ありがとう、凧君」

「いえいえ……よいしょと……ととつ!？」

持ってみると予想以上にダンボールは重たくて俺はバランスを崩してしまう。

「うおっ……とっ!？」

「危ないっ!？」

ドシーンッ!

重さに耐えきれなかった俺はそのまま地面に倒れてしまう。それを助けようとした小咲さんも俺と抱えていたダンボールの重さを支えきれず、結果小咲さんも倒れてしまった。

「痛てて……風君大丈夫?？」

「は、はい。なんと……か?？」

倒れた勢いでぶつけたところをさすりながら起き上がろうとする
と、俺の上には小咲さんが。

「……………」

「……………」

数秒の間、お互いを見つめ合う。この時の小咲さんは何を考えていたのかわからない。俺は俺が風邪をひいて小咲さんが見舞いに来た時の事を思い出していた。

「……す、すいません!？」

「い、いや、今のは支えきれなかった私が悪いから。すぐどこからちよつと待って!？」

そうしてもらえるとありがたい。こんなところをもしお客さんに見られたりしたら。風とかならもつとやばい……………」

「お、お姉ちゃん?？」

いきなり声があったのでそつちを向くとそこには右手に袋を持って棒立ちしている春が。どうやら買い物から戻ってきたようだ。

「は、春……これはその風君がダンボール運ぼうとしたら倒れちゃつてそれで私も一緒に倒れちゃって!？」

小咲さん、説明が意味わからないです!!

「つっ!!……………」

春は袋をその場に落として、走って店を出て行った。

「春!!」

「俺が春を追いかけますから、小咲さんは散らばったダンボールの身をー!」

「う、うん。春をお願い!」

「了解です!」

急いで外に出て左右を見る。春はちょうど曲がり角を右に曲がった所だった。

「春!」

春が走って行った方に俺も走って向かった。

「……………凧君?」

「くそ、どこに行ったんだ春のやつ」

しばらく走ったが、途中で見失ってしまった。

「はあ、大体何で春もあんなタイミングで帰って来るんだ?ただでさえ顔合わせにくいのに」

どうしよう。このままじゃ何も話ができない。

「ん?……………あれは?」

「ねえ、ブラックタイガー。あれ買ってちようだい」

「ダメだ。お前は今日お菓子食いすぎだ。それにもうすぐ晩ご飯だ」

「ちえ。じゃあ今日はハンバーグね」

買い物しようとしているポーラと鶴さんがいた。あの2人なら何かを知ってるかも。

「ポーラ!」

「ん?……………げえ、なんであんたがここに」

げえ、とか言うなよ。なんか傷つくじゃねえか。

「別にいいだろ。それより、春を見なかった？」

「あの子ならさつきすごい勢いで公園の方に走って行ったわよ。なんかあったの？今日のあんた達ちよつとおかしかったし

公園か。できればそこに誰もいないことを願おう。

「いや、何でもないよ。情報ありがとう！」

「今度、ポテチ奢ってもらおうよ」

「任せろ！」

鵜さんとポーラに手を振って、走って公園の方に向かった。ちゃんと今日の事を謝らないと……

「ポーラちゃん、鵜さんちよつといいですか？」

春side

「はあ……なんで逃げ出しちゃったんだろ」

帰ってきた瞬間、お姉ちゃんと凧君があんな状態だったからいきなり逃げ出しちゃった。今日の朝の事もあったし余計になんか……

「春!!」

いきなり名前を呼ばれそっちの方を向くと、息を切らした凧君が立っていた。

「やつと見つけた……探したぞ」

「……ごめん。でも、帰ってきたらあんな状態になっていた凧君も悪いと思うよ」

「そ、それを言われると少し痛いな」

恥ずかしそうに頬を赤らめる凧君。あの時二人に何があったのかな？

「……春、今日の朝は……その、ごめん」

「い、いいよ。私もまさか2人があんな関係って知らなかったし」

(あんな関係ってなんだ?)

「い、いや。あれはその……ほら、風のいつものおふぎけって言うか
ゃ」

おふぎけ?あれがおふぎけって言うの?

「お遊びって言うのか?」

お遊び!?

「まあ、風は中学校で俺と時々あった時もあんな感じな事してきたし」
中学校から凧君と風ちゃんはそんな事してきたの!?!なのに、お姉
ちゃんと仲良くして、拳句あんな事を?

「だから、春は今日の事は気にしなくてもいいんだよ。俺も少し悪い
所があったけど……とにかく俺と風はそんな関係じゃ『パシンツ!』
……え?」

我慢しようと思ったけど、耐えきれなかった。親友の風ちゃんの気
持ちがこんな風にあしらわれたせいなのか、それとも単に凧君にイラ
ついたのかわからない。だけど……

「凧君が………凧君がそんな酷い人だなんて思わなかった!!」

涙を流しながら、私にビンタされて驚いて棒立ちしている凧君を
ほってさっさきのように走り出した。

第16話 完璧者にソウダン

いきなりだ。いきなりだった。最初は何が起きたのかわからなかった。気付いた時には、春が涙目になりながら俺を頬をビンタしていた。ビンタされた頬がじんじんと痛む。

「凧君が……………凧君がそんな酷い人だなんて思わなかった!!」

そう言うとき春はまたどこかに走って行ってしまった。だが、今度は春を追いかけようという気になれなかった。今追いかけてもまた同じ事が起きそうだったから。

「……………くそ、なんなんだ?」

「凧君」

聞き覚えのある声が後ろから聞こえる。振り向くと、俺を心配そうに見てる凧が立っていた。

「今の……………見てたのか?」

「うん。なんかすごい大変そうだったね」

「その原因を作った1人がそんな事言うなよ」

苦笑いしながら凧の方へ向く。

「でも、私見たよ。すごい勢いで店から出て行っちゃった春とそれを必死に追いかける凧君。店で何かあったの?」

「…………俺がダンボール運ぼうもしたんだけど、それが予想以上に重たくて俺が倒れそうになったんだ。それをかばおうとした小咲さんが俺を支えようとしたんだけど結局無理で2人一緒に倒れて」

「その状態をタイミング悪く帰ってきた春に見られたのか。それは春が怒るに決まってるよ」

「はあ、とため息をつく凧。確かに自身の姉があんな状態になっているのを見たら誰だって怒るだろう。」

「でも、春が怒ってるのはそれじゃなかったっぽい。俺と凧の事であんな関係とか言ってたんだ」

「あんな関係?」

「凧は顎に手を当てて考える。」

「何の関係?」

「わかんねえ。これを解決しないと春とは仲直りできなさそうなんだ。でも、あんな春と俺は面と向かって話し合える気がしないし……」

「私が春と話に言っつて、火に油を注ぐような事になっちゃっても大変だし」

うーむ、と2人で考える。だけど、良い案は何も思い浮かばない。

「とりあえず、そういう話が得意そうな人に話聞いてみようよ」

「そんな奴いたっけ？」

「うん。それも風君にとつても身近な所に？」

「で、これはどういう事？私一応受験生なんだけど。てか、風は久しぶりだね。正月以来？」

「うん。理沙さんお久しぶり〜」

俺の姉である理沙は言う。風の言っていたそういう話が得意そうな人というのは姉貴の事だった。確かに姉貴ならなんとかしてくれるかも。

「お兄ちゃん、右頬どうしたの!? 凄く赤くなってる。待ってて、すぐに氷水持つてくるから!」

妹の咲は帰ってきた俺の顔を見てすぐに氷水を取りに行った。そこまで騒ぐことじゃないんだけど。

俺の姉、黒崎理沙は四狩女学院に通う3年生で生徒会会長を務めている超エリートだ。その実力は大したもので友達や生徒、先生の悩みまでもクールに瞬時に解決するというまさにこの周辺の学校最強の生徒会長と言っても過言ではないものだ。その上、勉強や運動もでき

て、男子にもモテる。まさに完璧だ。何故、姉はこんな素晴らしいのに俺と咲はこんな平凡なのだろうか。

「はいお兄ちゃん、氷水。風さんは紅茶でよかったですか？」

「うん、ありがとう。流石は咲、気がきくね。咲はいい旦那のお嫁になるよ」

「本当ですか!? やったー!!」

「ちよつと待て。なんで俺限定なんだ。それ以前に俺たち兄妹だぞ！」

「どんな困難だって、それさえも貫く愛さえあれば人は……うん、お兄ちゃんが大好きな妹は何でもできるんだよ！」

「まず、ここまで兄に依存している妹はそういない」

迷惑と思う時があるが怒る気もしない。だって、咲はとてもかわいいから。

「そんな事ないよ。妹や姉は兄や弟を愛するものだよ。ね、お姉ちゃん？」

「何でそこで私に振るんだ。それより、私に話して何？」

「あ、そうだった。実は……」

今日の朝から会った出来事を一通り簡単に話した。風が春の事からかかってそれで春が怒ったこと。その後の春の様子がおかしかった事。今日のバイトでの出来事。

「………て事なんだ。俺たち何で春が怒ってるかわからなくてさ。姉貴はどう思う？」

「いや、どう思うとか言われてもな」

姉貴は一瞬風の方をにらんだ。風はいつもと変わらずニコニコしている。

「咲はどう思う？」

「私としては、お兄ちゃんのバイト先が小野寺先輩たちだったって事に今少し怒りがあるんだけど」

「しまった。こいつに振るのは間違いだった」

そういえば俺も咲と姉貴にバイト先を言っとくのを忘れてた。こうなると咲は少しめんどくさい。

「しかも、お兄ちゃんをビンタするなんて……………小野寺先輩、よくも私のお兄ちゃんに」

「咲、今度お前の好きなところ連れてってやるから落ち着け」

「ホント!?約束だからね!!」

俺の腕に抱きついてくる咲。さっきの怒りが嘘のように、むしろさっきよりテンションが上がっているようだ。そして、咲はそのまま俺の膝の上に。

「話が脱線したな。姉貴、どう思う?」

「いや、話を聞く限りその春って子があんな関係ってというのは一つしかないだろう?」

「わかったのか?」

「当たり前だろ。まず、春って子がお前らに抱いているのは嫉妬。仲良くしてるお前らにヤキモチ焼いてんだよ」

「嫉妬?」

最近俺と春は結構仲良くしてたのに、それを奪うように風があんな事をしてきたから怒ったということか。

「で、二つ目。お前の言う通りお前が春ってこの姉に押し倒されてるのを見て怒ってるのは確かだが、問題はそこじゃない。問題はその後だ」

「俺が公園で春と話した時か?」

姉貴はコクリと無言で頷く。

「先に解決しておく事は、春って子が言ったあんな関係だ」

「そう。それがわかれば解決すると思うんだよ」

「お兄ちゃんって実は鈍感なんだね。私でもわかったのに」

「えっ?まじで?」

姉貴にはともかく咲にも負けたとなると少しショックがある。なんか悔しい。

「春って子はお前と風の事を付き合ってるって思ってるんだよ」

「……………はあ?」

俺が?俺の隣にいる風と?付き合ってる?」

「いやいやいやいや、意味わかんないんだけど」

「意味わかんないのはお前だ。何でそれに気づかないんだよ」

「いや、確かに朝に風が俺の腕に抱きついてきたけど、それだけだぞ」

「でも、風はお前の事好きとか言っただろ？」

「言ったねー。事実風君の事は好きだよ」

「私もお兄ちゃんの事大好きだよ」

「2人はちよつと黙ってて」

余計な事を言う風と咲に怒る。また話が脱線したらめんどくさいから。

「でも、そんなわけ……………」

「ないと思うか？私はそのとは思わない。てか、そう思うとお前の今日の出来事に全部合点がいくんだ。学校の時に何かと風にこじつけるのも、今日お前が公園でビンタされた事も。春って子と風は親友なんだろう？その風と付き合ってるお前が春って子の目の前でお遊びとか言ったらそりゃ怒るだろ。向こうの勘違いとはいえ」

「……………確かに」

「つまりあれだ。お前と春って子は2人揃って何か勘違いしてたんだよ。だから、明日お前が春って子と話し合ってこい。それで解決だ」

姉貴はこれで話は終わりだ、と言って姉貴の目の前に置いてあるコーヒーを一気飲みした。

「……………そうだな。ちゃんと話し合わないと行けないよな」

「当たり前だろ。ったく、面倒な事に時間食わせやがって。それぐらい自分で解決しろよな」

「そういつつも、俺の相談にのってくれた姉貴。なんだかんだいつでも姉貴は優しい。」

「悪かったよ。今度何か奢るから」

「じゃあ、服な。それも結構高いやつ」

「お、俺の所持金を持つ範囲で」

「じゃあ私はお兄ちゃんの彼女になって、カップル限定スイーツを食べに行く」

「お前と行くくらいなら風と一緒に行く事にするよ」

「本当？じゃあ、約束だからね」

しまった。なんで俺はこんなしょうもないミスばかりしてしまうんだ。なんか自分が馬鹿らしくなってきた。

「むう……でも、風さんなら別にいつか」

「咲の分まで風君と楽しんでくるからね」

「お前らの真似事カツプルなんてどうでもいい。風、お腹すいたから早く夜ご飯作ってきて」

「へいへい。ったく、人使い荒いな……」

俺は立ち上がり台所へと向かった。明日ちゃんと春と話し合わないと。で、ちゃんと仲直りする。それが俺の明日の目標。

「で、風。お前どういう事だ？」

「どういう事って？」

風が台所に向かったのを確認した理沙はさつきとは違う真剣な顔で風に尋ねる。

「風さん、小野寺先輩の思うあんな関係っていうの気づいてたでしょ？」

咲と理沙は気づいていた。風はわざと理沙に解決してもらおうとしていた事を。

「……私も春とは仲良くしていたので。中学からの親友だから」

「だとしても、お前が解決する事も出来ただろ？」

「万が一、私が言ってる春との関係が壊れたら嫌だったし」

「これで風と春って子の関係が進展してもか？」

理沙と咲はこう考えている。これで風と春はきつと仲直りできる。だが、それで2人はより仲良くなる可能性がでてくる。それはいいことだが、理沙と咲の気持ちは風の隣はいつだって風がいて欲しいとい

う事。

「いいんだよ。別に私はそれでも」

「……風さん、お兄ちゃんの事、いつも好きって言ってるけど、本当はどうなの？恋愛なのかな、遊びで言ってるのか」

「それは私に聞くんじゃないよ、理沙さんに聞く事だと思うな？」

「だって、お姉ちゃんは教えてくれないし」

「当たり前だろ。人の気持ちはそんな簡単に教えていいもんじゃない」

咲と理沙は風を心配そうに見る。でも、風はいつも通りの表情だ。悲しんでるのか喜んでるのかそれすらわからない表情。

「私は今のままが一番好きだから。一番の友達だけど、それ以上の関係ではない今の関係が好きだからこれでいいんだよ」

「……ま、お前がそう言うなら私は何も言わないけど」

「風さんには私達がついてるから。いつでも相談にのるからね」

「うん。ありがとう、理沙さん、咲」

第17話 タイヘンな事

姉貴に春の事を相談した翌日。俺は朝早めに出て、『おのでら』へと向かった。理由は昨日のバイトの事を謝らないといけないからだ。メールで謝る事もできたが、それでは何か申し訳ないので直接謝る事にした。

そんなこんなで『おのでら』に着いた。俺と春の家はそこまで離れていない。歩いて5・6分くらいだろうか？

店の前では朝早いというのに小野寺さんが店の準備をしていた。

「あの、小野寺さん」

「ん？おお、凧君。昨日はどうしたの？帰ってきたら小咲は凄い深刻そうな顔してるし、春はご飯になつても部屋から出てこないし」

「まあ、その……色々あります。昨日はすいませんでした」

うまく言葉では説明できない。というかしたら、小野寺さんに殺されてしまうかもしれない。

「いいよいよ。まあ、何があつたか聞かないでおくけど、ゴタゴタはなるべく早く解決してね。気まずい雰囲気になるのはこっちも辛いんだから」

「はい。本当にすいません……」

バイトをほつたらかしたのに、小野寺さんは優しく肩をポンポン叩いてくる。この人は本当はとてもいい人なんじゃ。

「あ……………」

店のドアが開く音がしてそちらを向くと、ちょうど学校に登校しようとしていた小咲さんと春が立っていた。

「お…………おは」

おはよう、と言おうとしたが春は俺を無視して学校の方に歩いていく。もし、ここで何も言わなかつたら絶対春と仲直りすることなんて無理だ。そう思った俺は歩いていく春に向かって言った。

「放課後！屋上で待つてるから……………だから……………もし俺がまだ春と話し合えることがあれば……………来て欲しい……………」

そう言うと、春は一瞬足をピタリと止め、数秒後また歩き出した。

「……風君」

「すいません、小野寺さん。いきなり悪いんですが何日間バイト休んでもいいですか？今日からしばらく学校が閉まるギリギリまで春の事を待ってみようと思います」

小咲さんが心配そうな顔をして俺を見る中、俺は再度小野寺さんに頭を下げて頼んだ。

「いいよー」

「軽っ!!？」

「今の風君と春を一緒に仕事させてもギクシヤクして余計めんどくさいだけだしね。自分が納得いくように好きにしたらいいよ」

この人……かなりいい加減な人か思ってたけど実はとてもいい人？

「でも、春と仲直りしてバイト戻ってきたら覚えときなさい。今までの倍は働いてもらうから」

「は、はいです」

「ん。それより、学校あるんでしょ？早く行きなさい」

「わ、わかりました。色々ご迷惑かけてすいません」

「いいよいいよ。風君も高1なんだししっかり青春しなさいな。なんなら春の婿になってもいいよ」

「なっ!!？」

お、俺が春の夫？今はちよつと関係が崩れてるけど、もし仲直りしてそんな事になったら……

『あ、風君。おかえりなさい。ご飯にする？お風呂にする？それとも……』

お玉を片手にエプロンを着た春が帰ってきた俺を迎えてこんな事を……

「ありだな……」

「風君!？」

「それとも、小咲にする？なんなら結婚はできないけど、二人セットって言うのもありなんじゃない？」

「二人セット……ですって?？」

確かに、春と小咲さん二人と結婚するのは不可能だ。だが、結婚せずとも二人と暮らす事はできるはずだ。もしそうなれば……

『あ、風君おかえり。ごはんできてるからお姉ちゃんも三人で食べよ』
『今日寝る時は三人で寝ようね。も、もちろん風君は真ん中だよ』

エプロンを着た春と、頬を赤らめながらとんでも無い事を言う小咲さん。やばい、想像するだけでも理性が崩壊しそうだ。

「二人セットで!!」

「風君も何言ってるの！早く学校行くよ！」

俺の腕を引いて歩き出す小咲さん。だが、顔はすごく真っ赤になっていた。

「あれ、小咲。もしかして照れてるの？あんたには一条君っていう夫が……」

「い、一条君とはそんな関係じゃないもん！」

涙目になりながら小野寺さんに叫ぶ。小野寺さんはおほほほ、とセレブのおばさんのような笑い方をしながら店の中へ入っていった。

「もう……お母さんは」

「賑やかなお母さんですね」

「賑やか過ぎて困っちゃう」

でもいいな。あそこまでお母さんと仲良くしてる小咲さんが羨ましい。

「そ、そんな事より。風君、春の事を」

「わかってます。必ずあいつと仲直りしますから」

「うん……お願いね」

その後は小咲さんと仲良く学校へ登校した。途中で一条先輩に会って、とてつもなくあたふたしていたけど気にすることはないな。

1週間後、放課後

あれから1週間も経った。初日は男子やら女子やらに色々聞かれて大変だった。いつも仲良くしている、翔太いわく、カップルのような関係の春と俺が今日は一切喋ってなかった事の原因を聞かれた。春も同じようだったが、春はただ別に、と言いつつ返すだけだった。

「おい、風。本当にどうしたんだ？」

「こつちにも色々あるんだよ」

「……まあ、お前が話せないならそれでいいけど、早く解決しろよ？ なんか教室の空気が重たいから」

「おう。悪いな、迷惑かけて」

「それはクラスのみんなに言っちゃれ」

今日の授業の教材を片付けながら俺は翔太と会話する。翔太は「ああ、とため息をついた。

「それより、今日どっか行かね？」

「悪い。今日も無理だ」

「そうか」

「春との仲直りのためなんだ。ごめん」

「……………そっか。じゃあ頑張れ」

俺の肩に手を置き応援してくれる翔太。なんだかんだ言っても、こいつは俺の事を応援してくれる。

「おう、サンキューな。仲直りしたら春とポーラと風を誘って、何なら小咲さんも誘ってカラオケでも行こうぜ」

「言ったな。約束だぞ！」

そう言っつて翔太は拳を突き出す。それを俺は笑って突き返し、拳同士が合わさった。

「さてと……………行きますか」

春がきつときてくれる事を信じて俺は屋上へと足を運んだ。

春side

「はあ……………もう大変だったな」

凧君は屋上で待つてるって言ったけど、私はそれを無視して今は帰路についてる。あれから1週間経ったのに。

「何でこんなことになっちゃったんだろ」

ううん、そんなのわかってる。私のせいだ。私が凧君に怒ったり、叩いたりしなければこんな事にはならなかった。でも、許せなかった。凧ちゃんがいるのに、お姉ちゃんとはイチャイチャ仲良くしてるし、凧ちゃんとの付き合いをお遊びなんて言う凧君が許せなかった。

「……………凧君、まだ屋上にいるのかな？」

でも、これで見に行ったらなんだか負けた感じになってやだな。でも……………

「この一週間、物凄くつまらなかったな」

私はこの一週間、凧君とも凧ちゃんとも喋ってない。ポーラさんと少し話すくらい。

「凧君と凧ちゃんがいたから今まで楽しかったんだな」

このまま仲直りできなかつたら面白くない日々が続くだけだよ。

「でも、私にできるのかな？」

「ねえ、そのあんだ。ちよつといい？」

いきなり後ろから声をかけられ振り向くと、サングラスとマスクをした人が立っていた。なにこの人、すごく怖い…………

「あ、あのどちら様で」

「あんだにちよつと用があるんだ」

春side out

風side

「今日も来なかったか」

屋上で下校時間ギリギリまで待ったけど、結局春は来なかった。これで一週間。もう春は俺の事をどうでもいいと思っただろうか？

「……………仲直りしたいな」

涙が出そうになるのをぐっと堪えて俺は屋上から出ようとする。それと同時に俺の携帯が鳴り出した。

「……………電話か？」

携帯を開くと、小咲さんの名前が。何かあったのかな？

「もしもし」

『風君!?!た、大変なの!!』

明らかに小咲さんの様子がおかしい事に気づいた。

「小咲さん?..落ち着いてください」

『春が……………今日お仕事入ってるはずの春がまだ帰ってきてないの!!』

その言葉を聞いた瞬間、屋上の扉を開けて勢いよく駆け出した。

第18話 ツナガル思い

「小咲さん、それどういうことですか!!」

学校の廊下を走りながら携帯越しに小咲さんに尋ねる。途中で先生に注意された気がしたがそれは無視だ。

『わかんないの。春ならお仕事休むなら一言何か言ってくれると思うの。だけど、連絡もないし、お仕事来ないし。凧君なら何か知ってるかなって思っただけだよ』

「俺はいつものように屋上で待ってただけで。春はこつちに来ませんでしたよ」

『そう……………どうしよう、春に何かあったら私……………』

電話越しでもわかる小咲さんの心配そうな声。おそらく今ものすごく悲しそうな顔をしているだろう。俺は小咲さんがそんな顔にしないように守らないといけないと思ひ、足を止め小咲さんに言った。「大丈夫です。春は何があつたとしても俺が助けますから! だから、そんな声しないでください!」

『凧君……………』

「とりあえず、春を探すために一条先輩を頼りましょう。あの人なら家にいるヤクザと一緒に探してくれるはずですから」

『う、うん……………』

「じゃあ、電話切りますね!」

一言いって電話を切る。そして、靴を履き替えて外に出ようとする。そこで俺の動きはピタリと止まった。

「……………なんだこれ?」

俺の靴箱の中に一枚の手紙が入っていた。ラブレターか何かかと思つたがそれにしては普通すぎる。ただ、白い封に簡単なシール。

「とりあえず開けてみるか」

春の行方が分からない今こんなことをしてる場合ではなかったが、何故か開けない気がした。

「……………つっ!!」

手紙の内容を読んだ俺は手紙をグシャと握ってまた走り出した。

手紙にはこう書いてあった。

『小野寺春は〇〇山の小屋にいる。返して欲しければ日が落ちるまでここに来い』

「クソ野郎!!犯人絶対ぶっ潰してやる!!」

日が落ちるまでそんなに時間は無い。急いで行かないと春がやばい。そう思った俺はさつきよりも早く、全力で山の方へと駆けた。

「はぁ……はぁ……」

山の方に来るまで俺は何をしただろう。信号無視はした。誰かにぶつかってその人を転ばせた。猫の尻尾をふんずけた。カップルがいちやついてるところを全力で邪魔……駆け抜けた。舞子先輩を突き飛ばした。だが、そんなの知らない。こっちは非常事態だ。人の命がかかっているかもしれないんだ。

「春。無事でいてくれよ……」

山の中を全力で駆ける。息も荒いし、足もガクガク。正直限界だ。でも泊まるわけには行かない。

「うわっ!!」

木の根っこに足がかかって前のめりに転げる。走ってる勢いもあつたせいですがいい勢いで転んだ。

「……………いつて」

肘と膝から血が出てる。手も擦り切れている。多分全身、土だらけだ。それでも止まれない。日没までもう時間がないから。

「はぁ……はぁ……」

なんでこんな事になってるのかな？俺はただ春と仲直りしたかっただけなのに。俺たちが喧嘩しなければこんな事にはならなかっただろうな。春と話さない学校の日々なんて面白くなって早く仲直りしたかった。

無事解決したら咲に美味しい料理作ってもらおうように頼もう。そ

れ以前にこんな状態の俺を見たら気が気じゃなくなるかな？

「はあ…はあ……着いた」

日没するギリギリに小屋の前に辿り着いた。小屋のドアは閉まっている。俺はドアに手をかける。本当に春はいるのだろうか。それ以前に相手がもし拳銃とか持ってたらどうしよう。そんな疑問を抱えながらゆつくりとドアを開けた。

「……………春？」

小屋の中は静かだ。古くさい木の臭いに埃が目に見えるほど舞っている。その中の周りを見渡すと誰もいない。小屋の中心に立っている人物を除いて。

「凧君……………」

「春……………なのか？」

春は黙って頷く。それを見た俺は春にゆつくりと近づく。俺が近づくと同時に春は一步後ずさった。それに構わず俺は春に近づいていく。

「凧君、その怪我……………」

春が俺の怪我に気づいて驚いている。だが俺はその言葉を見無視して思いつきり春を

抱きしめた。

W i n d o u t

「凧………君？」

突然の事で春の頭の中が真っ白になる。いきなり凧は春を引き寄せて思いつきり抱きしめたのだから。そして、やっといきなり抱きしめられた事に気づいた春は凧から離れようとする。

「いや……離して！」

凧の体から離れようとするが凧も男。春の力ではビクともしない。

「凧君！離し『良かった』……え？」

「春が無事で本当に良かった。もし春の身に何かあったら俺……」

「凧君……」

「もうしばらくこうさせてくれ」

そう言うと凧は春を抱きしめる力を弱めた。今なら春も凧から逃れる事が出来るのにそれをしようとしな。春もしばらく凧に身をよだねる事にしたのだ。

1分くらい経つと凧は春の体を離れた。今してた事を思い出すと凧も春も顔が真っ赤になっていく。

「その……ごめん。いきなり」

「い、いいよ……私も心配かけちゃったみたいだし」

(それに嬉しかった……やだ、なんで私嬉しいとか思ってるの?)

「……………春。今からする俺の話を聞いてくれないか?」

「えっ?」

顔を真っ赤にして頭をブンブン振る春を無視して凧は話しかけた。その顔は何かを決めたような顔。本気表情だ。春はそんな凧の顔を見てコクリと黙って頷いた。

「……凧は俺が幼稚園の頃からの付き合いだ。俺が知ってる友達の中でも一番長い付き合いだ。凧は昔から変わらない。幼稚園の時も小学校の時も、時々会うくらいしかなかったけど中学校の時も。困ってる俺を見て面白がってる迷惑な奴だ」

「うん、私もそうだもん。よく凧ちゃんにからかわれる」

「そうだろうな。小学校の時は下校の時に手をつないで歩いたり、二人でどこかに遊びに行ったり、遊びだと思っけど頬にキスされたりもした。その度に俺は顔を赤くして、凧はあはは、と笑っていた。今と変わらない凧だ」

「つつ………」

春は自分の手をギュッと握って拳を作る。凧はそれに気づいたが無視して話を続ける。

「中学校の時も時々会ったら俺を見かけたりすると抱きついたりしてきた。その度に周囲の目を集めてとても恥ずかしくなった。でも、凧はいつものように笑っていた。その後は大抵2人で遊びに行ったりしたかな?」

「……………ねえ、これなんの話なの?そんな話なんか私聞きたくない」

春はうつむいてつぶやく。だが、それも凧は無視して話を続ける。「高校になったらスキンシップが激しくなった。腕に抱きついてきたりするのは当たり前。咲……俺の妹と一緒にからかってくる。だけど、それは俺は嫌じゃない。だって俺は……………」

「やめて!!その続きは聞きたくない!聞きたくないよ!!」

「俺は……………俺はそんな事をしてくる凧が……幼馴染として大好きだから」

「いや……………え?」

春は風の話聞いて泣きそうになったがある部分が気になって泣く事はなかった。

「……………幼馴染?」

「ああ。どんな事があってもあいつは俺の一生の友達だ。前にも言ったが俺はあいつの事を友達として……………親友として……………最高の幼馴染として見てる。いや、俺はあいつをそういう目でしか見れないんだ」
万が一あいつのスキンシップがもう少しマシだったらどうなつたかはわからないけど、とその後風は呟いた。だが、春はその言葉は聞こえていなかった。春は拳を握りしめて言った。

「……………すなんか……………の」

「え?」

「だったらどうして風ちゃんとキスしたの!!!」

「……………はあ?」

いきなりの事で風は素っ頓狂な声を上げた。

「私知ってるんだよ!私があ朝怒って先行っちゃったけど、2人が心配なつて戻つてたの。そしたら、風君と風ちゃんがキスしてるとこ私見たんだから!」

「ちよつと待て。俺風とキスしてないぞ!」

「嘘!あれは絶対キスだった!風君はそう言ったけど本当は私の見えないところでイチヤイチヤしてるんですよ!それなのにお姉ちゃんともあんな事して、私をだ、抱きしめたりして!風君なんてただの女たらしだよ!!」

耳を真っ赤にしながら春は風に自分の思いを伝える。だが、風は何の事を言ってるのかわからなかった。小咲と春の事ではない。風の事だ。

(俺が……………風とキスした?)

風にはそんな覚えがない。いや、まず朝にそんな事をするわけがない。それも道のど真ん中で。そう思った風はあの時の事を全力で思い出そうとする。あの時春が先に行つてから何があったかを。

『風ちゃんって風君の事好きなの?』

『風君って本当に鈍いよね』

『いいのかってどういう事?』

『……………そうだね。確かにさっきのは春をからかうために好きって言ったかもしれない』

『だよな? だったら』

『でも、凧君は私が遊びで好きって言葉を使ってるように見えるかな?』

「……………もしかしてあの時か?」

「何を?」

「春。お前は盛大な勘違いをしている」

「えっ?」

「お前が見たのはキスじゃなくて、キスしたように見えただけだ。俺は風とキスしてない」

「う……………嘘! 絶対あれはキスだった!!」

「いや、違う。俺たちはキスしてない」

凧と春は反論し合う。凧としてはこの前のビンタはこの誤解が生んだのだ。ここはどうやって誤解を解いておきたい。

「うーん……………どう説明すれば」

「だったら私が協力するよ」

「おお、助かるよ風……………つて風!!?」

「ヤッホー、凧君」

いつの間にか隣に立っていた風に飛びのいて驚く凧。それはそうだろう。いるわけがないと思つてた人物がここに立っているんだから。

「だが、ちようど良かった。お前あの時の事覚えてるよな。ここで実践するぞ」

「ええー、あの時の事って……………凧君あの時私に何したと」

「元はといえばあれはお前のせいだ! 責任とれ!!」

「はーい」

春に見やすいように二人はあの時のように立つ。そして、風は背伸びをして凧と風の顔がくっつくくらいに近づける。

「春、あの時俺たちはこんな状況だったんだ。だから、俺は風とキスしてない。お前の勘違いだ」

「嘘………じゃあ、私はもしかして本当に盛大な勘違いをしてただけ？」

「だから、そう言っただろう？……まあ今回の事は俺にも風にも悪いところがあるけど」

「うん。ごめんね、春」

風と風は並んで春の前に立って頭を下げ謝る。

「風君……風ちゃん」

「……春？」

風と風が頭をあげると春はプルプルと震えていた。どうしたのかと思いうつむいている顔を覗こうとすると春は風の胸に飛び込んだ。「ごめんなさい、二人とも。私が悪かったの。なのに、2人に強く当たって。この一週間2人と喋れなくて何も楽しくなかったのに……なのに、私が意地はって話に行こうとしなくて。だから、ごめん。ごめんなさい………」

涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら二人に謝る春。そんな春を見て風は春の頭をポンポンと撫でた。

「いいよ。俺たちも悪かったんだ。俺も屋上で待つなんかめんどくさいことせずに、自分から話しかけに行ったらこんな事にはならなかったんだから」

「そうだよー。私も春の前では極力スキンシップはしない事にする」

「おい、その言い方だと春がいない前ではスキンシップするって事か？」

「さあ？どうでしょう？」

春をあやししながら風へのちよつかいを忘れない。いつも通りの風だ。

「でも、こんな面倒くさいこと一体誰が？」

「私たちだよ」

風は小咲の電話の事を思い出してボソツと呟いた。その言葉とともに現れたのは風の姉妹、理沙と咲。そして、春の姉、小咲。咲は風に頭を撫でられる春を感じ見て怒りを覚え、小咲はほんの少し涙目になっっていた。

「あ、姉貴!?!それに咲に小咲さんまで!」

突然の登場に驚く風。

「風に頼まれたんだよ。一週間もあの調子だから2人をどうにか仲直りさせてあげてって。教室の空気重たいし、2人喋らないから私も基本一人だつて、風が少し怒ってたぞ」

「風が?」

風が横を見るとまだ泣いている春をあやししながら風の方を向いていた。

「面倒くさいがお前の大事な幼馴染の頼みだ。仕方ねえから引き受けたよ。もちろん、風やその小咲ちゃんにも手伝ってもらってな」

「ごめんね風君。風君のいない『おのでら』は楽しくなくて。私も話聞いてすぐに引き受けちゃった」

「私はお兄ちゃんの手紙を入れに行つたの。それよりお兄ちゃん。いつまで小野寺先輩の頭撫でてるの?」

「へっ?ああ、悪いな」

風が春の頭を撫でるのを止めると、春は風の方を向いて涙目で見つめてきた。それを見た風は春が何を言いたいのかわかった。

「……了解」

妹の頼みを無視して風は春の頭を撫で続けた。

「お兄ちゃん!?!お兄ちゃんに頭を撫でられるのは私の特権なんだよ!」

「いや、お前の特権じゃないし。まあ、後でたくさん構ってやるから我慢しろ」

「本当!?!約束だよ」

本当に軽い妹だ。そう思い苦笑しながら風は理沙の方へ向いた。

「悪かったな姉貴。迷惑かけて」

「なんだよ、感謝とかすんなよ気持ち悪い。……勘違いすんなよ!これは風の頼みだから聞いてやったんだからな!」

「ああ……わかってるよ」

弱冠ツンデレ混じりな姉。こんな姉もかわいいなあ、と風はこの時思っていた。

「凧君」

「ん？春、やっと泣き止んだか」

泣き止んだ春は凧から離れて凧の方へと向く。

「あの時のビンタも謝らないとって」

「ん？ああ、別にいいよ。あれは春もわざとじゃないんだし」

「でも！」

「……だったら、今度の日曜日。俺と一緒に遊びに行くぞ。仲直りの証にどっか行こう。春の好きな所でいいから」

「えっ？」

「……………」

「イチャつくなら他でしろ」

「お兄ちゃん……私のお兄ちゃんが」

「よかったね春。デートのお誘いだよ」

「で、デート!？」

「ち、違いますよ小咲さん。俺別にそんなつもりで言ったわけじゃ」

珍しい小咲のからかうような言葉。その言葉に凧と春は顔を真っ赤にする。

「デートか…………」

顔を赤くして凧や理沙に反論する凧を見る。そして、春は自分の胸に手を当てた。

（凧ちゃんと凧君が付き合ってるって思ったから私無理だって思ったけど、付き合っていないんだもんね。だったらいいよね）

この時小野寺春は理解した。自分が何故凧とイチャイチャする凧を見て腹が立ったのか。何故、小咲と仲良くする凧を見て嫌な気分になったのか。何故、自分がこうも黒崎凧の事を意識してしまうのか。そんなのもうわかりきっていたことだ。でも、わからないふりをしていただけだ。何故なら、小野寺春は黒崎凧の事を

好きになってしまったのだから。

「春？」

「……ううん。そのお誘い受けるよ。だから、しっかりとエスコートしてよね、凧君……ううん、凧！」

初の男子友達を初めて呼び捨てで呼んだ。今の春の気持ちは温かい気持ちでいっぱいだ。

第19話 向かいのケーキヤ

ある日のバイトの日の事。それは突然起こった。

「……春、小咲さん。今日一段と少くないっすか？」

「最近そうなの。真向かいに新しいケーキ屋さんができちゃって」

「お客さん取られた、ってお母さんカンカンに怒ってるんだよ」

せつかくのバイトの日でしか春と小咲さんと3人一緒に入ってる珍しい日なのに、店には人が入ってこない。嬉しいような悲しいような感じだ。

「何のんきな事言ってるのよ、二人とも。これは戦争なのよ？うちの目の前にケーキ屋をたてるなんていい度胸してるじゃない」

店の奥から小野寺さんがズカズカと歩いてくる。その顔を軽く怒りに満ちているような顔だった。

「3人とも来な。どんな奴がいるのか面を拝んでやる」

「ええ!? いいんですかそれ？」

「そうだよ。こういう時お母さん絶対揉めるんだから」

「大丈夫大丈夫。ちよつと様子見るだけだから」

俺と春が店の方へと歩く小野寺さんを止めようとするが全く止まる事はなく店の扉を開けた。

「たのもー!」

「あ……………ども」

「「え?」」

そこにはなぜかケーキを持ってこちらを向いている一条先輩が。俺と春と小咲さんの考えがシンクロした瞬間だった。

なんで先輩（一条君）がここにいるの?と。

「先輩、あなたもしかして……俺たちの事を裏切ったんですか?」

「違う! 誤解させるような事を言うな、凧! これは……」

事情説明中。どうやら一条先輩の組の一人が念願叶ってケーキ屋を開く事が出来たらしい。けれど、開店直後は人手が足りなくて困っているというので一条先輩が手伝ってる。そのケーキ屋というのがうちの店の真向かいだったと。

「という経緯があるので、決してお母さんの敵になろうとしたわけではないので」

話しを聞いている限り一条先輩に悪い事はひとつもない。だけどこれは俺の見解だ。小野寺さんからしたらそんなのはどうでもいい。敵になったのは変わらない。

「……………帰るよ、三人とも」

「え……………でも」

小野寺さんは店を出ようとした瞬間、一条先輩の方へ向いて中指を立てて睨んだ。その形相はこう言ってるように見えた。

『二度とうちの敷居をまたぐんじゃねえ!!』

そうして俺たちは店を出た。

「で、小野寺さんはどこに?」

「なんか変装してケーキ屋に行っちゃった……………大福持って」

……………あの人何を考えてるんだ? 風以上に何を考えてるのかわからない。

「ねえ、風。一条先輩に対抗して風がどうにかする事できないの?」

「そう言われても……………俺あの人並みに料理できないし」

「だよね……………」

「まあ、真向かいにこの店がある事を知ってるんだ。一条先輩ならきつとこつちに人が来るようになってくるとかしてくれるかもしれない」

「うわっ、人に頼ろうとしてる風。なんかすごいダサイよ」

「……………春、お前はそんな酷い奴だったのか? 俺に対してダサイなんて」

喧嘩して仲直りして以来、春は俺に遠慮というものがなくなり、俺との距離が近くなった気がした。なんとというか男子と会話してるよ

うな感じだ。春は女子だけど。

「だって……ねえ、お姉ちゃん？」

「うん。まあ、一条君の力を本当にすごいのは知ってるんだけど……こういう状況の時は男の子にどうにかしてほしいって思っちゃうかな？」

「でしょ？ 私も協力するから、凧も何か考えてよ」

そんなこと言われても困るんだけど。やる前から負けを認めてたら意味ないから頑張るけど。

「まあ、なんにせよ明日になって様子を見てみるか」

次の日

うちの店、人一人来ない。

ケーキ屋、とんでもない行列。

「これ、どうしろっていの？」

「なんか一条君が作った新作ケーキがすごい売れちやつてるみたいで」

「なんであの人格的にうちの店の敵になってるんですか」

「こんなの勝ち目あるわけないでしょ。」

「あのガキやつてくれるわね。こうなりやうちも黙ってないわよ！小咲、春！」

「「え!?!」」

「あんた達はこれ着て接客！凧も一緒にいてあげなさい！中はうちに任せなさい」

そう言っつて小野寺さんが出して服はいつもの服より生地が少ない服だった。

「こ、これ着て接客するの!?!」

「そうよ。いいからさっさと着替えて行つて来なさい！」

「うう……はい」

怒った小野寺さん、すごい怖いな。春と小咲さんが萎縮してるよ。俺じゃ耐えられないよ。

「き、着替えてきたよ」

着替えてきた二人はミニスカートにへそだしの服といういつもの数倍は大胆な服装にチェンジした。こんな姿の二人を見れる俺。こんなことを言うのは悪いが言わせてもらおう。小野寺さん、ありがとうございます！

「じ、じつと見ないでよ、凧」

「うん。流石にこれは恥ずかしいから」

「す、すいません……でも」

二人ともすごくかわいい。何て事を言う勇氣は俺には出なかった「ちなみにこれで売り上げ落ちたらさらに服の生地減らすからね」

鬼だ！ここに実の娘2人に横暴をする鬼がいる！！

「さあ、いつてらっしやい！凧は二人に色目つく人から守るボディガードよ！」

「わ、わかりました」

小野寺さんのあまりのやる気に断るわけにもいかなく俺たち3人は外に出て接客をする事に。

「ど……どうぞ見ていって下さ〜い」

「な、夏の新作和菓子で〜す」

恥ずかしながらも必死にチラシ配りを頑張る二人。やばい。今の状況をものすごいほどカメラに収めたい。くそー、こんな時に舞妓先輩がいてくれたら……

「お、小野寺どうしたんだよその格好？」

「……わっ！一条君!？」

そんな格好でチラシを配ってる二人を見に来たのか、ケーキ屋から一条先輩が出てきた。まあ、あの二人はいいとして

「よ、良かったら……どうぞ」

苦手なはずの男性の人にもチラシを配る春。

「春、男性が苦手なら無茶しなくてもいいんだぞ？俺や小咲さんに任せてお前は女性客中心に配れば」

「ありがと。でも大丈夫だから」

「まあ春がいいならそれでいいけど」

「……………そ、そんなに私の事が心配なら……………風が私のそばにいて？そしたら私頑張るから！」

暑いせいか頬が赤くなってる&上目遣いでそんな事頼んでくる春。そんなの……………断れるわけがない!!!

「わ、わかった……………」

「ホント!?ありがとう風!」

まあ、春の元気が出たならそれでいいだろ。なんかすごい勢いでチラシ配ってるし。

「……………いいなく、春」

次の日

あれだけチラシ配りをしたというのにうちは全く客が入って来ず、向こうは大盛況。

「で、何をしたんですか一条先輩」

理由を聞くために一条先輩に電話をすると、焦ったような感じが出てきた。

『違うんだ！俺はただ昨日のケーキと違う新作の洋風のケーキを作ったらなんかバカみたいに売れて…………』

言い訳するならもうちよつとマシな事をして欲しいのだけど。

「あなたのせいで小咲さんと春が大変な目に合うんですけど」

『大変な事?』

「……………明日から二人が水着で客引きです」

『何イイイイイイイイ!!?!?』

電話越しに叫び声が聞こえてくる。すごい耳が痛い……てかうるさい。

『み、水着……小野寺の水着』

「……今みたいとか思ったでしょ」

『お、思ってたねえよ!!』

絶対思ったぞこの人。嘘が下手だな、一条先輩は。

「とにかくあなたのせいなんですからなんとかしてください」

『そんな事言われても………いや、風。小野寺に代わってくれ。一つ思いついた事がある』

あれから一条先輩がレシピを考えてそれを俺と春が手伝い、小咲さんの神がかった成形をした和菓子が予想以上の盛況ぶりで、ケーキ屋もこつちも前よりお客さんが増えて持ち直した。小野寺さんはそれについて、拗ねていたけど。

「一件落着だな」

「そうだね。風もここ数日間お疲れ様。はいこれ、飲み物ね」

「サンキュー」

春から飲み物をもらいそれを飲んで一息つく。

「小咲さんは？」

「お姉ちゃんならお母さんの機嫌とりに行ったよ。一条先輩に助けてもらったのすごい拗ねてるみたい」

「あはは……小野寺さんらしいや」

今頃、誰があんな奴が作ったものを!!とか言ってるんだろな。

「………ねえ、風は将来何をしたいとか決まってる?」

「将来? うーん………なにも決まってるのかな? どうして?」

「ううん、なんでもない。聞いてみただけ!」

「ならいいけど……」

(一条先輩の手伝いとはいえ、風と一緒に和菓子作るの楽しかったな

……もし、風が将来の夢が決まっていなかったら

「私と一緒に……ずっと働いたら……」

「なんか言ったか？」

「……なんでもないよ！私達もお母さんの機嫌直すの手伝いに行こう！」

「お、おう」

春の奴……ずっと一緒に働けたらいいって……どうゆうことだ？俺にはよくわかんないぞ。

第20話 タナバタ大会

「そういうえば、明日俺の学校で七夕大会やるんだよな。どうでもいいけど」

家で三人で飯を食つてるときに話のネタが何かないかと思いついたことをふと呟く。

「七夕大会!? って事はお兄ちゃん、短冊にお願い書くの?」

「まあ、そりやそうだけど…どうかしたか?」

「お兄ちゃん! 明日短冊には、妹と生涯一生愛し続けることができませうように、って書いてね!」

「誰が書くかそんな事!!」

怒るお兄ちゃんも素敵、と意味わからないが喜ぶ妹とため息をつく姉。いつも通りの光景だ。

「でも、七夕大会ね……風、その短冊のお願い事当たりやすいと思うから慎重に書きな」

「ん?なんで?」

「うちの街の神社の神主さんがその笹を用意してんのよ。神主さん、なんかすごい力を持つてるらしいからきつとそのお願いも何かあると思うよ」

「へえ、そうなのか……」

てか、なんで姉貴はそんな事を知ってるんだ? 我が姉ながらよくわからない……

「まあお願いは勝手だけど、風と付き合えますように、とか書いとけば?」

「ぶふっ!!んな事書くか!!」

「だいたいなんで俺が風と付き合えますようになんて……」

「なんなら、私でもいいよ?」

「それはないから心配すんな」

「むう、お兄ちゃんのケチ」

そんな事で拗ねられても困るんだけど、てかケチとかおかしくね? 俺たち兄妹だぞ。

「まつ、なんにせよお願いは考えて書くんだな」

「う、うん。情報ありがと」

お願い……………なににしよつかな。もし叶うなら、春や小咲さんと
もつと仲良く……………って、春はともかくどうして小咲さんまで！てか、
春もどうしてこんなに……………

次の日

「お願い……………何書こうかな」

「春、お願い書いた？」

「風ちゃん、それがなんか思いつかなくて……………」

風はともかく春もお願い事に悩んでるみたいだ。俺も早く書いて
短冊を付けに行かないと……………

「……………やつぱ、これしかないか」

俺の願いなんで一つしかない。これしかないんだ。

「早く書かないと吊るすのが遅くなっちゃうよ？」

「うん。ちなみに風ちゃんはなんて書いたの？」

「私？私は風君とデートできますように、って」

「え!？」

「ぶふっ!」

いきなりの発言に俺や春だけではなくクラスにいるみんながこつ
ちの方を向いた。

「ちよ、風ちゃん!？」

「おい待て！お前まじか!？」

「うん。ほらー」

「そんなわけ……………ってまじで書いてる!!お前何してんの！何して
んの!!」

風の書いた短冊を見ると本当にそう書いていた。てか、これを他の
人に見られると考えたら……………

「だって、短冊だから何書いてもいいかなって思ってた」

「待て。それは短冊として吊るすんだ。つまり、他の人に見られる。そんなの俺はやだぞ!」

「私は気にしないよ?」

「俺が気にするんだよ!!デートなら今度するからその短冊はやめてくれ!!」

「じゃあ、パフエとかもおごってね」

「奢る!奢るから!」

「約束だよ?じゃあ、こっちの春と凧君とずっと仲良くできますように、って短冊にするね」

「え?」

そう言つて凧はポケットから一枚の短冊を取り出す。つまり、凧はもともと二枚の短冊を用意していた。

「……………はかったな、凧」

「なんの事かな?」

「しらばつくれやがって……………まあいいや。それより、春はどんなお願いに……………春?」

春の方を見ると、頬を膨らませながら俺を睨んでいた。

「な、なんだよ?」

「なんでもない!」

なんで怒ってるんだ、春のやつ……………俺なんか悪い事したっけ?

「それより、凧はどんなお願いにしたの?まさか凧も凧ちゃんどデート、とか?」

「そんなこと書くか!!俺はまあ……………たいした事は書いてない」

見られてもいいけど、あんまり見られたくない。少し恥ずかしい事を書いた。

「じゃあいいけど……………よし、書けた!ポーラさんも一緒に短冊付けに行こうよ!」

「……………ふん。仕方ないわね」

ポーラも席を立ち四人で短冊を付けに行く事に。……………そういえば、ポーラのお願ひ事ってなんだろう。すごく気になる。

「あれ、お姉ちゃん！お姉ちゃんも短冊付けに来たの？」

「春ー！それに凧君も」

「こんにちは。小咲さんはお願いどんな事書いたんですか？」

「わ、私は世界平和かな……」

優しさの究極形ですね。流石小咲さん。

「凧君は？」

「俺は大した事じゃないですよ」

「またごまかす……そういえばポーラさんはなんて書いたの？」

俺が気になってる事を春は普通に聞いてくれた。ありがとう春！

「フツ、私はちようど新しい銃が欲しくてね。この前最新モデルの……」

ポーラが説明してるときに何かが落ちた。

「ポーラ、ほれ落ちたぞ……」

『おっぱいを大きくしてほしい』

……どうやらこれがポーラのお願いだったようだ。なんというか、ドンマイ。

「み、見んな！あっちいけ!!」

「わ、悪かった！悪かったから銃は構えるな！危ないから」

涙を流しながら俺の方に銃を構えるポーラ。本当に危ないからやめてくれ……

「さて、どこに付けるか」

できれば誰にも見られたくない。

「……と、これは一条先輩の。これの隣でいつか。にしても、先輩……このお願いは……」

『飼育小屋の連中に死ぬほどなつかれますように!!』

なんというか、先輩らしいお願いだ。まあ、俺も人の事言えないけ

ど。

「風、教室戻ろー」

「あ、うん。って、ポーラまだ落ち込んでるのか?」

「う、うっさいわね。同情なんかいらないわよ!」

「いや同情って……まあ一つ言うなら、お前は胸なんかなくても十分可愛いんだから。自信持ってもいいと思うぞ」

「んなっ!!」

途端、ポーラが顔を真っ赤にして動揺しだした。あれ?俺励まそうとしていったんだけど……何かやばかったかな?

「……この鈍感」

「えっ!?なんで春と風がそんな荒っぽい口調に!!」

「あんたにそんな事言われなくてもわかってんのよ、このアホー!!」

「なんで励ましたのに怒ってんだよ!もうわけわかんねえ!」

「……もしかして黒崎君って一条君なみに鈍感なのかしら?」

俺たち四人の会話を遠くから見ている宮本先輩がそういったように聞こえた。

「にしても、俺のお願い叶うといいんだけど……」

放課後、家の手伝いで先に帰った春と、その春と一緒に帰った風。俺は一人で短冊の前まで来ていた。

「……あれ?あそこにいるのって……」

笹の前に立って短冊をつけようとしてる人がいる。

「小咲さん?何してるんですか?」

「うわっ!!え、風君?」

いきなり後ろから声をかけてびっくりしたのか、小咲さんは身体をビクつかせたあとにこっちに向いた。

「どうしたんですか?短冊は一人一枚ですよ?」

「知ってるよ。お願い事を変えたの。でも、凧君には秘密だよ」

「別にいいですけど……」

「なんだろう、すごく気になる。」

「にしても、凧君のお願い……凧君らしいね」

「見たんですか!?!」

「たまたま見ちゃっただけだよ。まあ、日頃の凧君からしたら、咲ちゃんに自立してほしいのはわかるんだけどね」

「そう。俺が短冊に書いた願い。それは、妹が俺から自立してくれませうように、だ。いい加減に兄にベツタリなのはやめてほしい。咲の今後の事を考えたら。」

「というか、俺のお願い見たのなら小咲さんのも見せてくださいよ！不公平です」

「だめ。私も見る気なかつたんだもん。わざとなら見せてあげても良かったけど」

「ちえ……」

「こうなつたら小咲さんがどこかに行った瞬間俺が見るしか……」

「凧君、これも何かの縁だし一緒に帰ろ。このあと用事とかないのね？」

「この作戦はどうやらダメなようだ。仕方ない、諦めるしかないな。」

「いいですよ。一緒に帰りましょう」

「うん。じゃあ待ってて。教室から鞆取ってくるから!」

「あ、そんなに急がなくてもいいですよ!…って、もう走って………ん？」

走って行った際に小咲さんが何か落としていった。ポォラにしろ、小咲さんにしろなんでこんなにかかを落としていくんだ？

「しかもまた短冊だし………え？」

短冊がどこかに飛ばされて誰かに見られたらダメと思いそれを拾った。だが、それを見て俺は驚いた。何故なら……

『凧君ともっと仲良くなれますように』

「そう書かれていたから……一条先輩ならともかく……俺？」

おまけ

「ただいまー」

「……………あれ？家に帰ったらいつも咲が俺の胸に飛び込んでくるのに今日は来ない？」

「姉貴ー。咲ー。いるー？」

「いるぞー。おかえり、凧」

「……………」

いつも俺が帰ってきたら、テンション高い咲がテンション低い。何かあったのか？

「お兄ちゃん……………ううん、凧兄さん、私決めた」

「えっ？」

「私、凧兄さんから自立します!!」

「……………はあああ??」

「このままじゃいけないと思うから。じゃあ私勉強してくる。ごはんできたら呼んでね」

そういつて咲は自分の部屋へと向かっていった。

「……………あいつどしたの？」

「知らね。お前の七夕のお願いが効いたんじゃないか？」

……………神主さん、恐るべし!!

第21話 夏のオマツリで

「お疲れ様でしたー!」

ある暑い夏の日。期末テストを終え、夏休みという時期でも俺は小咲さんの家でバイトをしていた。今はそれを終えたところだった。

「あの、凧君」

「は、はい?なんですか?」

七夕大会を終えてから俺は小咲さんと若干ギクシャクしていた。なんで小咲さんがあの短冊を持っていたのか聞けてないからだ。この前春にも、お姉ちゃんとか何かあったの?と心配されたところだ。「あ、あのね。今度の花火大会の事なんだけど。私、クラスのみんなと行くんだけど、凧君もどうかな?」

「花火大会ですか?確かに俺も春とか風やポーラや翔太を誘って行くうと思っただけです。そっちに混ぜてもいいんですか?」

「うん。千棘ちゃんとか春がきてほしいって思ってるくらいだし」

桐崎さんは春に対しては若干……というか大分LOVE成分が入ってるからな。

「わかりました。他のみんなにも声かけてみます」

「うん、よろしくね」

「はい。それでは」

小咲さんに手を振って俺は店を出た。にしても、小咲さんとのモヤモヤをどうにか解決しないと。というか、俺は春にしろ小咲さんにしろなんでこんなに面倒な事にまき込まれるんだ。

「まあそれは置いて。翔太とかに連絡しないと……」

俺は携帯を取り出し、翔太に電話する。

『……もしもし』

「あ、翔太か?あのさ今度の花火大会の事なんだけど、小咲……小野寺先輩に花火大会一緒に来ないかって『行く!!!』早いな!!」

『だって、小野寺先輩が誘うって事は小野寺先輩の友達みんな来るんだろ?俺仲良くなりてえもん』

「いや、まあ来るならそれでいいんだ。場所や時間はまた電話するよ」

『了解。サンキューな風。持つべきものはやっぱり友だぜ!』

「あ、ありがと。まあそういう事だから」

俺は翔太との電話を切った。相変わらずのやつだな。どうせ二学期始まったらその事をみんなに自慢するに違いない。

「風は……家帰るときについてに寄ったらいいか」

花火大会当日

俺は風と一緒に小咲さんの家に向かっていた。小咲さんと春と合流して四人で待ち合わせ場所に向かうからだ。

「ねえ、風君。私の浴衣にあってるかな?」

「んー?うん。似合ってるぞ、かわいい」

「ならよかつた」

普通に思ったことを言うとは何か風は春の方へ向いてドヤ顔をした。よく意味はわかんないけど。

「なんだこれ……」

俺と風と小野寺姉妹で待ち合わせ場所に着いたが、着いた第一声がこれだった。

「翔太君、この写真はどうかね?なかなかいいものだろう?」

「最高つすね!でも、俺も負けてないつすよ。これなんかどうですか、舞子先輩!」

何故か舞子先輩と翔太の二人がお互いに撮った写真を見せ合っていた。てか翔太のやつ、隠し撮りなんかしてたのか?

「ふおおっ!!最高だ!よろしい、君を俺の弟子に認めよう!」

「あざっす、集師匠!」

「なんか師弟関係生まれた!!!」

「あ、風!なんだよ、お前。こんなにすごい先輩がいるなら先に教えていてくれよ」

「そうだぞ風。こんな後輩がいるならどうして俺に真つ先に教えないんだ」

「どれだけ意気投合してるんですか、舞子先輩。まあ、仲良くなれてよかったですけど」

お互いに肩を組んで笑いあっている。あつて数分も経たないうちにここまで仲良くなるなんて思ってもなかった？

「ねえ、風！あっちにたこ焼き売ってるの！あっち行こ!!」

「え、おい春！待ってっ！」

人がたくさんいる中、春は俺の腕を引いて屋台の方へと向かっていった。

「いやー、集師匠」

「言いたいことはわかる。だから何も言うな、翔太君」

「何バカなこと言ってるの？ 私たちも行くわよ」

後ろで舞子先輩と翔太が宮本先輩に急かされるのを聞きながら俺は屋台に向かった。

「風ー、次はあっち行こー！」

「おい、待てよ春。あんま急ぐとこけるぞ！………はあ」

「ごめんね、風君。春が迷惑かけちゃって」

「別に良いですよ。こういうの慣れてますし。とんでもない妹がいるんで」

「あはは、それもそうだね……」

『お兄ちゃん、次はあっちだよ！あ、わたあめもある！チョコバナナも！』

凄いい儘で甘えん坊な妹の姿が目には浮かぶ。あれと比べれば春なんて……

「ただね風君。春つてとんでもない方向音痴なの」
「へっ?」

「だからちよつと目を離したらすぐどこかに……つてもういない!!」
「えっ!?!」

先を歩いて行つた春がふと目を離したスキにどこかにいなくなつていた。

「春ー!どこいったんだー!」

「春ー!返事してー!」

俺と小咲さんが春の名前を大声で呼ぶが反応は全くない。

「はあ、なんでこんな短時間でどっかにいなくなれるんだ。あいつ咲並みに大変なんじゃないんですか?」

「あはは……とりあえず携帯で電話かけてみるね?」

「お願いします」

小咲さんは携帯を取り出して耳に携帯を当てる。………待てよ。今春がどっか行つたつて事は今俺たち二人きりなんじゃ。後からついてきてた風たちも気づいたらいなくなつてたし。てことは今これはたから見たら……

「デート!?!」

「え、何!?!どうかしたの?」

「い、いえなんでも……」

いや待て落ち着け黒崎風。これはデートじゃない。ただの先輩と後輩が一緒にいるだけだ。そうだ。小咲さんには一条先輩がいるし、俺もそういう感情を持つてるわけじゃない。でもこんなに可愛い先輩と二人きりでいられるなんて……

「ねえ、風君」

でもよく考えたら俺つて小咲さんと二人でいる時間結構多いかも。お互いに風邪ひいた時もそうだし。

「あの、風君?」

そういえば俺つて小咲さんの事お姫様抱っこしてるんだつた。ざまあみろ一条先輩。俺はあなたより小咲さんとの関係は進行してるんだよ!つて今はそんな事を考えてる場合じゃ。

「凧君!!」

「は、はい!!」

「どうしたの? さっきから声かけてるのに返事しなかったけど……もしかしてこの暑さがきつかった?」

「い、いえ。大丈夫です」

「そう? しんどくなったらいつでも言っただけ。私凧君が倒れたりしたらやだもん」

や、やばい。小咲さんエンジェルだ。マイエンジェル小咲さん。

「あ、春に電話、どうになりました?」

「それが出なかったの。携帯置いてきちやったのかな?」

「マジですか……じゃあ探しに行きますか」

そう言っただけは小咲さんに手を出す。

「えっ?」

「いや、こんだけ人が多かったら俺たちがはぐれちゃうかもしれないですし、三人バラバラになった方が面倒なんで手を繋ごうかと……あ、決してそういう気持ちがあるのではなくて!!」

「う、うん。わかってる! 私もいきなりでびっくりしただけだから!」

あー、なんでこうなっちゃうんだろ。普通に歩けばよかったのに。俺ただでさえ今小咲の短冊の事で悩んでるのに……

「で、でも迷子になったら確かに危ないもんね。だったら、お願いしてもいいかな?」

「え……いや、はい! 喜んで!」

「喜んで?」

「いえ、なんでも!! じゃあ、失礼します」

つい本音が出ちゃったけど、これで俺たちが離れる事はないだろう。俺は小咲さんの手を握って歩き始めた。

(ど、どうしよう。勢いで手繋いじゃったけど、これじゃまるでデートみたい……私男の子と真面目に手繋いでのがあんまりないのに。でも、凧君の手、一条君の手の感触とは少し違うな。私より年下なのに頼りになるっていうか)

やばい。小咲さんの手、スゲエスベスベだ。柔らかい。小咲さんが

風邪ひいた時に一回握ってるからって思ったけどあの時とは全然違う。なんという緊張する！

「……………こ、小咲さん！」

「な、なに、風君!？」

「え、えつと……………あ、あそこにチョコバナナ売ってますよ！食べませんか？」

「そ、そうだね！美味しそうだし食べたいな〜」

「じゃ、じゃあ行きますか」

なんだこの付き合いたてホヤホヤカップルみたいな現状は！緊張しすぎて何も言えねえよ！てかこれ他の人にもそう思われるんじゃないか？

「す、すみません。チョコバナナ一つ下さい」

「あいよ。200円ね」

「はい。……………じゃあこれで」

「200円丁度な。なんだあんたら恋人同士か？」

案の定勘違いされた！

「ち、違います。俺たち恋人同士じゃありません！」

「そうなのか？俺はてつきり付き合ってるもんかと……………まあいいや。こんだけ人が多いんだ。男がしつかり女を守るってもんだ。頑張れよ、ボウズ！」

ガツハツハ、と笑って俺の肩をポンポン叩くチョコバナナ屋のおじちゃん。なんだかテンション高い人だなこの人。

「はい。チョコバナナありがとうございます！ございました」

「おう！しつかりな！」

俺はチョコバナナを小咲さんに渡してまた歩き始めた。

「チョコバナナ代、後で返すね」

「いいですよそんなの。これは俺の奢りです！」

「でも……………」

「小咲さんや春にはいつもお世話になってるのでそのお礼って事でダメですか？」

「……………それ言ったら私だって風君にいつもお世話に。命を二度も救わ

れてるのに」

流石優しさの塊小咲さんだ。こんな事では引き下がらない。だが俺も男だ。ここは引かない！

「いいですよ！とにかくこれは俺の奢りです！さあ。春を探しに行きましょー！」

「う、うん。わかった」

渋々という感じで頷いた小咲さん。別にそんなに気にしなくていいのに。

「でも、良かった。凧君と一緒に入れて」

「えっ？」

「最近、凧君はいつも春と一緒にいるからなんか私が一人で少し寂しかったんだ。だけど、今日は春が迷子になっちゃったから凧君と一緒にいれる。それが凄く嬉しいの」

別に俺はそんなつもりじゃないですよ。春は同じクラスの友達だから一緒にいる機会が多かったです。って言いたかった。けど、次に発した言葉に俺自身も驚いた。

「だから、あの短冊にもっと俺と仲良くなれますようにって書いたんですか？」

「え……………」

「俺見ちゃったんです。小咲さんが飾った短冊の他に小咲さんが持ってた短冊を」

「嘘。どうして」

「落としていったんですよ。拾って渡そうとしたんですけど、その短冊を見て驚いて。」

でも俺少し疑問です。一条先輩ならともかく、なんで俺なんですか？小咲さんは一条先輩が好きなんですよ？なのにどうして……………」

短冊を拾って少し考えた後にずっと疑問に思っていた事。それをやっと口に出れた。それは良かったが何もこんな時にと少し自分を呪った。

「……………確かに私は一条君の事は好き。中学生の頃からの恋だもん。これは揺るがないよ。でもね、最近凧君の事を考えると、凧君とも

もつと仲良くなりたいてって思う自分もいるの」

俺と仲良く?もう充分仲良くできてると思うんだけど。

「なんていうか、凧君に二度も命を救われて凧君と一緒にいるうちにすごい意識しちやっつて。春と一緒にいる凧君を羨ましくなったりして。短冊書くときも凧君の事考えてたら自然にああ書いちゃっつて……」

「それで誰かに見られるのは困るから自分で持ってたって事なんですか?」

顔を赤くしながら無言でコクリと頷く小咲さん。それならそれでもいいんだけど。

「つまり小咲さんは一条先輩の事は好きだけど、俺の事も意識しちやっつてるって考えてもいいんですか?」

「うえっ!?!」

しまった。とんでもない地雷を踏んじまった。俺の事を意識してるんですか?なんて俺の事も好きなんですか?って聞いているようなもんじゃねえか!俺のバカ!

「ち、違うよ!一条君は好き!凧君は……その……もつと仲良くなりたいてっただけで好きとかそういうのは……」

「で、ですよね。俺の事を好きになる女子なんてそういないし!」

(凧君ってやっぱり鈍感だったんだ。でも私も本当のところはどうなのか自分じゃもうわからない……るりちゃんに相談しようかな)

「そ、それじゃあ短冊の事もわかったわけですし行きますか?」

「そうだね……っつてあれ?」

「どうかしましたか?」

「草履の鼻緒切れちゃった」

「……嘘でしょ!?!」

「どうしよう……っつて1年前にも確かこんな感じの事が起きたような……」

1年前?あ、俺受験勉強で祭り行ってないんだった。話聞いた事だと草履の鼻緒が切れて一条先輩におんぶしてもらったとか。

「とりあえずここで止まってても仕方ないですし、俺がおんぶします

よ」

「えっ!?でも……」

「嫌なんですか?じゃあこのままここで止まって人様に迷惑かけますか?」

「うっ………風君のいじわる」

「そうですね。俺はいじわるなんです。さ、早く」

「………わかった」

小咲さんが俺の背中に乗ったのを確認して俺は立ち上がり歩き始める。てか、最初の予定の春を探すのをすっかり忘れてる……まあいつか。

風side out

小咲side

風君の背中、すごく安心するな……しかもこの感じ初めてじゃない。

「そういえば、この前助けたときも中学の時も俺こんな風にして小咲さんをおんぶしたんですよ」

「そうなの?」

だから知ってたんだ。この感じを。意識はなくてもそういうものってやっぱりわかるものなんだ。というかさっきから胸のドキドキが止まらない。どうして………おんぶしてもらってるだけなのに。

「小咲さん?どうかしましたか?」

「え、ううん。なんでもない」

「ならいいですけど。辛くなったら言ってくださいね。さつき小咲さんが俺に言ったみたいに、俺も辛そうにしてる小咲さんを見るのは嫌なんですから」

「うん。ありがとう」

「いえ、俺にとって小咲さんは大事な人なんですよ。小咲さんがいなかったら春とこんな仲良くなかったかもしれないんですから」

「だ、大事な人!?なんでそんな事言うのさ風君は!!大体それで言ったら私だって風君の事……あ………そっか。そうなんだ。私が一条君の事を好きで大事な人と思うように、風君の事も。」

「あ、小咲さん、見てください!花火上がりましたよ!」

「この胸のドキドキもそういう事なんだ。やっとわかった。これからどうするとかはまだわからないし、るりちゃんに相談して行きたいけど、とりあえず今わかるのは私、小野寺小咲が一条楽君だけじゃないって、黒崎風君の事も好きだという事。」

小咲 side out

風 side

「ああ、疲れた。なんか今日は色々あったな……ってあれ?風から電話?」

家が隣なんだから直接いえばいいのに、何の用だろう?

「もしもし?」

『凧君? 凧だよ』

「知ってるよ。何の用?」

『えっとね、この前の短冊の時の約束覚えてるよね?』

約束? なんの事だろう?

『その感じだと忘れてるね。私とデートする約束。明日休みだし2人で遊びに行こう。場所はもう私が決めてあるから。明日の朝9時に家の前でね。それじゃあ』

「あ、おい! 凧! ……何だ?」

確かにデートの約束はした事思い出したけど、なんでそんなに急いで決めたんだ?

「ま、いつか。久しぶりに凧と2人で遊ぶんだし明日は楽しもう。

……一応胃薬用意しとくか」

明日の準備をして俺は布団に入り眠りにつくのだった。

第22話 ジブンの気持ちに正直に

「で、今日はどこに向かうんだ、風？」

「どこへ向かうとかはあんまり決めてないかな。 風君は？」

昨日の夜、風にいきなりデートしようと言われたが、朝なんとか起きることができた俺は約束通り風とデートしている。 はたからみたらこれはデートなんだろう。 というか、デートの定義って一体なんなんだろう。

「俺も特に行きたいところがない。 ていうか、風が誘ったんだから風が行きたいところに俺はついてくぞ？」

「風君優しいー。 じゃあとりあえず公園行こ」

なんの予定も考えてなかった風は公園の方へと足を向ける。 俺もそれについていくような形で歩く。

「よく二人で遊んだよね、公園で」

「ん？ そうだな。 俺はまあお前のワガママに振り回されていた事が多かった気がするけどな」

主におっきい砂のお城作れだの、二人でかくれんぼしようだの、おままごとで俺が二股の男をやってみせろだの。 なんか難しい事ばかりやらされてた気がする。

「まあそれは置いといて。 でも風君と一緒に居れたのが楽しかったのは確かだよ。 風君もそうでしょ？」

「……………そうだな。 昔から振り回されてばかりだけど、風といるのが悪いことは一回もなかったな」

「でしょー？ 私もだよ。 春といるのが私好きだけど、風君といえるのも好きだからねー」

ふふっ、と笑ってこつちを見る風。 この顔はまた俺をからかう時の顔だ。 いつもの手には乗らぬ！

「そうだなー。 俺もお前と一緒にいるのが好きだぞ」

いつもなら俺がテンパってからかわれるんだ。 だが今回は違う。 風はどう返してくるのか……………

「ホント？ 私たち両思いだね。 付き合っちゃおっか？」

「うんうんそうだな……………つてはあ!!?」

え、何いつてるのこの人。付き合う?俺たちが?マジで意味わかんないんだけど。

「あ、やった。オツケーしてくれたね風君」

「いやいや、待て待て。今のはあれだ。お前の返答が予想外すぎたからであってそういうことではないんだけど」

「え、じゃあ今の言葉は嘘なの?」

ウルウルとした涙目で俺を見る風。見るな。そんな目で俺を見るんじゃない!

「まあそういうことになる。仕方ないんだ」

「むう……………せっかく風君が私に振り向いてくれたと思ったのに、残念だな」

いや待つて何その言い方。まるで俺と付き合いたいみたいな。そんなの風にはあるわけないけど、なんか期待させるような感じ。……………てか俺結局風に振り回されてるじゃん。

「てか風。結局なんで今日俺とデートしようなんて言い出したんだよ。なんかわけがあるんだろ?」

俺はこのまま風のペースにもってかれるのが嫌になり話題を逸らす。

「あ、風君話題逸らした。……………まあいいけど。……………ねえ、風君。少し真剣な話するよ。いい?」

いつもニコニコ笑つてて何を考えてるのかわからない風が、こっちに振り向いて今とても真剣な顔で俺を見つめてくる。

「な、何だよ?」

「風君つて、春の……………ううん、春と小咲さんの事ってどう思ってるの?」

「……………え?」

風 side out

春side

「今日はいい天気だね、春ー」

「うん。そうだねお姉ちゃん」

私とお姉ちゃんは『おのでら』が今日は人手が足りてるということで二人で買い物に出かけてた。

「ねえ、お姉ちゃん。私こんな暑い中歩きっぱなしで疲れちゃった。公園で少し休まない？」

「うーん……そうだね。私も少し疲れたし休もつか」

二人で公園に入り、ベンチに座る。

「春、私飲み物買ってくるけど、何か欲しいものある？」

「んー、じゃあオレンジジュースがいいかなー。なかつたらお姉ちゃんに任せる」

「うん、わかった。ちよつと待っててね」

そう言つて自販機の方へ走るお姉ちゃん。

最近私は悩んでる事がある。私の友達の風の事だ。風の事を好きてって自覚してから彼の事を意識する事が多くなった。今日はバイトないけど今何してるのかな、とか一緒に遊びたいな、とか考えちゃう。

「はあ……今日の買い物、風も誘えばよかったかな。そしたらもつともーっと楽しくなったかもしれないな………つてあれ？あそこにいるのって」

公園の入り口近くにいる人。もしかして風かな？

「おーい、風………と風ちゃん!？」

風ちゃんの姿を見た瞬間突然身を隠す私。何で風ちゃんが風と一緒に？というかどうして私は身を隠したんだろ？

「二人で何の話してるのかな？ちよつと気になる………」

『でも、その言い方だと小咲さんが一条先輩を好きじゃなかったら。春や私や翔太君が私たち四人の事を気にしないって言ったら好きになっちゃう、みたいな感じなんだけど?』

『それはー……………いや、そうだな。そうなっちゃまう』

『でしょ? そういう変な言い訳しないところ、私結構好きなんだー』

風ちゃんまた風の事好きって……………ううん、それよりも風の気持ち

……

「春ー? どうしたの、そんなところに隠れて?」

「わあ!! お姉ちゃん!? ちょっとこっち来て!!」

いきなり現れたお姉ちゃんを私は手を掴んでこっちに引き寄せる。

「お姉ちゃん!! 何でこんなタイミングで戻ってくるのさ! 空気読んでよー!」

「え、何で私いきなり怒られてるの?」

「いいから少し静かにしてて! ……二人にばれてないよね?」

頭に3つくらいはてなマークを浮かべてるお姉ちゃんは置いといて。風と風ちゃんはこっちに気づいてない様子。よかった。バレなくて。

『というか何で風はいきなりそんな事聞いてくるんだよ!』

確かに。いつも私を助けてくれる風ちゃんがどうしてそんな事聞くのか私も気になる。

『うーん……………私偶然見ちゃったの。この前の縁日で風君が小咲さんの事おんぶしてるところ。その時の小咲さんの顔見たら……………風君がどう思ってるのか聞きたくなって』

そういえば縁日の時、風とお姉ちゃんが迷子になっちゃって私一人になっちゃったのを迷子になって一人だった一条先輩とまわる事になっちゃったんだっけ。本当なら風ともっとお祭りまわる予定だったのに……………というかお姉ちゃんはどうして顔を真っ赤に?」

『見てたのかよ。てか、その時の小咲さんの顔って?』

『それは秘密ー。乙女の秘密ですー』

『なんだよそれ。意味わかんないぞ』

『うーん、鈍感な風君に言う事なんてありません』

『なんだよ鈍感って。俺別に鈍感じゃねえし』

『『どの口がそれを言うの?』』

私とお姉ちゃん。風ちゃんが声を揃えて言う。

『なんだ?今絶対いないはずの小咲さんと春の声も聞こえた気がするぞ?!』

やっぱり風って鈍感だ。よくお姉ちゃんが一条先輩の事が好きって気づいたよね、風って。

『気のせい気のせい。でも風君。一つ覚えといてね。人を好きになるのに理由っていらなんだよ?風君は小咲さんが一条先輩の事が好きだから、とか。四人の関係が崩れるから、とか言ってるけどそんな恋愛には関係ないんだよ?』

『けど俺は……………』

『風君。私たち四人の関係ってそんなに脆いものなの?』

『そんなわけない!わけない……………けど』

『ならいいんじゃない?自分の気持ちに正直になっても、ね?』

『自分の気持ち……………正直に』

風ちゃんがふふつ、と笑い風の手を握る。

『さっ、話はこれくらいにしてデートの続きしよ。今日の風君はへ私のものゝなんだからね』

『お、おい、いきなり手を握るな腕組むな!少しは俺から離れろー!』
なんか今すごい私ものを強調された気がする。気のせいかな?

『というかお姉ちゃん。さっきから顔真っ赤だけど大丈夫?もしかして日にやられたの?』

『ち、違うよ。違うの……………ただ』

『ただ?』

(私が風君におんぶされたのを見てたって……………恥ずかしい……………私あの時どんな顔してたの!?)

ただただ顔を真っ赤にしていくお姉ちゃん。というかどうして風ちゃんはあそこであんな話してたのかな……………

春 side out

風side

まさか話の当の本人の二人がいるなんて予想外だったなく。まあ、あそこでは春と小咲さんを助ける事になっちゃったような気がするけど。春には悪いけど私も頑張ろうかな。だって風君は私の1番の友達の幼馴染だから。

第23話 ホウカゴに惚れ薬

「自分の気持ちに正直になれ、か……」

この前風とデートした時に言われた言葉。なんだか凄く意識してしまう。

「俺が春や小咲さんに向けている気持ち……ただの友達や先輩という感情だけだと思うんだけど」

ダメだ。意識すればするほどわからなくなる。とりあえずこの事を一旦置いといて今日はすぐに家に帰ろう。

「おーい、 凧ー！」

名前を呼ばれ振り向くと、後ろから小咲さんと春が小走りやってきた。なんでこのタイミングで現れるんだろう、二人とも。

「今日うちで仕事ないんでしょ？一緒に帰ろ？」

「いや、その……まあ、いつか」

断ろうとしたけど、断る理由も思いつかなかったから3人で並んで一緒に帰ることに。

「はあ、なんだか今日の昼休み変なことおこちゃった」

「変なこと？」

「うん。なんだかつぐみちゃんにもらったグミを食べたら、少しの間だったんだけど、つぐみちゃんの事を好きって意識しちゃって。あれなんだっただろう？」

グミを食べたらその人のことを好きに？なんか惚れ薬みたいな感じだなそれ。

「そんな事ってあるんだね、お姉ちゃん」

「うん……あ、そのグミ数個持ってきちゃったから凧君と春も食べてみる？……はい、これ」

そう言っって小さな袋から2、3粒グミを取り出す小咲さん。

「え、これ持ってきちゃったんですか？」

「うん。一つ食べたなら美味しかったから、ダメかなって思ったんだけど、少し持ってきたらよかった」

「わー、ありがとうお姉ちゃん！」

今の話を聞いて何も思わなかったのか、春は袋から一粒取り出してそれを口に放り込む。

「いや待て春！それちゃんと鷓先輩に聞いてからじゃないと………」
「ふえっ？」

俺の忠告が遅れて春はこつちを見ると同時にグミを飲み込んだ。すると春は目をトロンとさせて頬を赤くしこつちを見る。

「え、春？」

「春？大丈夫？」

いきなり様子が変わり心配になり、俺と小咲さんが声をかける。

「……………なくぎく」

春がいきなり俺のことを抱きしめてきた。……………つて

「ええええええええええ!!?」

「え、春?!どうしちゃったの!?!」

「なーぎ。私の事をちゃんと見て？」

「いや見てる。見てるけど!!」

小咲さんが食べたグミ。本当に惚れ薬だったのかよ!

「なぎは私のこときらい？」

「え、いきなりどうした？」

「だーかーら。なぎは私の好き?それとも嫌い?」

「いや、そりゃ好きだぞ。お前は俺の友達だし」

「うん。私もなぎのことだーいすきだよー」

さらに俺の方へ身を寄せてくる春。てか待ってこれ以上は流石に俺も理性とかそういうのが限界になるから!!

「春! 凧君が迷惑そうにしてるでしょ! だから離れて!」

「やーだ。私は凧のことが好きだから、もつとくつつくのー」

頬と頬とがくつつくくらいまで身を寄せてくる。やばいやばいやばい。そんなこと言われたら俺どうしようも……………

「凧君、ごめんね。春……………どうしたら?」

「と、とりあえず鷓先輩にこの対処法を聞きましょう。もしかしたら何かしってるかもしれないです!」

「う、うん。わかった。ちよつと電話してみるから。凧君は春の相手

をお願い」

「わ、わかりました」

小咲さんは取り出して携帯電話を耳に当てる。

「ねえ、なぎ？」

「な、なんだ？」

「……………なんでもない。ただ呼んでみただけー」

なにそれ!?この子すつごく可愛い。すつごく可愛い。大事なことから二回言ったよ俺。でもこのままじゃ本当にどうしようもなくなる。

「は、春?おねがいだから少し離れてくれない?」

「ええ……………やだよー」

「頼むよ。な?俺のこと好きなら俺の言うことも聞いてくれてもいいと思うんだけど?」

「んー……………じゃあキスしてくれたら離れてあげてもいいよ」

「はい!」

「ふえつ!」

『大丈夫ですか小野寺様!?今キスという言葉がそちらから聞こえたのですが!』

俺と小咲さん。そして、電話していた鶴先輩までその言葉を聞き驚く。いや、キスつて。

「は、春?キスするなら本当に好きな相手とすべきだぞ?俺のような本当に好きじゃない相手とすべきじゃないと思うんだけど?」

「私はなぎのことが好きだからいいの。だから、キスして〜」

「いや、ちよ、待つて!」

目を閉じてキスを待つような体勢で俺を見ないでくれ!!頼むから!

「ねえ、なぎ。まだー?」

「待て待て。キスはダメだ。キスはダメだから。な?」

「だめなんかじゃないよ。好き同士でキスするのは当たり前だもん」

ダメだ。今の春になにを言っても全く通用しない。どうしようこ

れ。

「あ、凧じゃん。お前そこでなにして……………」

……………ちよつと待て。少し整理しよう。今の俺の状況は抱きしめられながら

キスを待っている春と、鵜先輩と電話している小咲さん。そして、いきなりそこに現われた翔太。

「……………ごめん、お邪魔だったな。この事は誰にも。もちろん風ちゃんにもこのことを黙つとくから。じゃあな……………」

来た道をそのまま戻ろうとする翔太。

「ちよつと待って！頼むから話を聞いてくれ！これには訳があるんだよー！」

「ウルセエー！いつかその時は来るかなとか思ってたけどまさかお前らがそこまで関係が進展してるなんて思つてもなかったぞ！お前なんてもう絶交だ絶交ー！」

「誤解だ。これは春が鵜先輩が持つてきた惚れ薬のせいで決してそういう関係じゃないんだよー！」

「俺はそんなこと言われても誤魔化されないぜ！」

「だったら小咲さんに聞いてみればいいだろ！小咲さん！翔太にこのことが誤解だつて説得してくださいー！」

なにを言つても理解してくれそうにない翔太をどうにかするため小咲さんに助けを仰ぐ。

「凧君と春がキス凧君と春がキス凧君と春がキス凧君と春がキス凧君と春がキス凧君と春がキス凧君と春がキス凧君と春がキス凧君と春がキス凧君と春がキスがキス凧君と春がキス」

『小野寺様！しっかりしてください！』

なんか壊れたロボットみたいになつてるし!!?

「ほらみろーいきなりそんな場面見せつけられた小野寺先輩がびつくりして壊れてるじゃないか!!」

くそー!!もういいよ！凧のことなんて嫌いだ!!この裏切り者ー!!」

「あ、翔太!!……………くそ、ろくに話も聞かないで行きやがって」

「ねえなぎー。もういいでしょー？私とキスしよー」

春はなんでそんなにキスして欲しいんだ！惚れ薬強力すぎだろお
い!!でも、これを引き離すには説得するしか……うん、決めた。決意
しよう。

「……………いいか春。確かに俺はお前の事が好きだ。だけど今の俺の
好きは友達としての好きでそれ以上としては見てないんだ。いや、ま
だはつきりしてないんだ。お前への好きが俺にとってどうなのかが。
だから、キスはできない。わかるか?」

「好きなのにキスできないの?」

「まあそういうことになる。……だから今はこれで我慢してくれよ
な」

そう言つて俺は春の前髪を手でよけて、おでこにキスをした。これ
でいい。俺の気持ちがちやんとしてないのにキスするなんて俺はで
きない。だからこれで……

「……………風、今、私に、なにをして」

「春?」

「今、私の、おでこに、き、き、き、キス、した、よね?」

「正気に戻った!?てか、このタイミングで!」

「……………な、な、な、風の……………」

「へっ?」

「風のバカー……!!」

「ぐはああ!!」

なんで俺が春にビンタされる仕打ち受けないといけないんだよ

……………理不尽だ……………

「私帰る!!」

(……………あれ?私お姉ちゃんにグミもらってそれ食べて……………その
あと私なりにしてたんだっけ?気づいたら風抱きしめられて……………
おでこにキスされて……………どうしたらこうなっちゃうの!?)

「風君と春がキス風君と春がキス風君と春がキス風君と春がキス風君
と春がキス風君と春がキス風君と春がキス風君と春がキス……………」

『小野寺様!小野寺様!しっかりとしてください!!小野寺様つてば!!』

顔を真っ赤にした春が去ったあとには、春にビンタされて地面に倒

れている俺と、壊れたロボットのようになんか呪文を唱える小咲さんと、小咲さんの携帯電話から聞こえる鶴先輩の声だけが残っていた。

第23. 5話 ホウカゴに惚れ薬（by小咲）

「自分の気持ちに正直になれ、か……」

この前風とデートした時に言われた言葉。なんだか凄く意識してしまう。

「俺が春や小咲さんに向けている気持ち……ただの友達や先輩という感情だけだと思うんだけど」

ダメだ。意識すればするほどわからなくなる。とりあえずこの事を一旦置いといて今日はすぐに

「おーい、 凧ー！」

名前を呼ばれ振り向くと、後ろから小咲さんと春が小走りやってきた。なんでこのタイミングで現れるんだろう、二人とも。

「今日うちで仕事ないんでしょ？一緒に帰ろ？」

「いや、その……まあ、いつか」

断ろうとしたけど、断る理由も思いつかなかったから3人で並んで一緒に帰ることに。

「はあ、なんだか今日の昼休み変なことおこちゃった」「変なこと？」

「うん。なんだかつぐみちゃんにもらったグミを食べたら、少しの間だったんだけど、つぐみちゃんの事を好きって意識しちゃって。あれなんだっただろう？」

グミを食べたらその人のことを好きに？なんか惚れ薬みたいな感じだなそれ。

「そんな事ってあるんだね、お姉ちゃん」

「うん……あ、そのグミ数個持ってきちゃったから凧君と春も食べてみる？……はい、これ」

そう言つて小さな袋から2. 3粒グミを取り出す小咲さん。

「え、これ持ってきちゃったんですか？」

「うん。一つ食べたなら美味しかったから、ダメかなって思ったんだけど、少し持ってきてきちゃった」

「へえ、これがそのグミなんだ」

春は小咲の手に乗っているグミを覗き込むに見ている。そして、それを1つ手に取った。

「ん〜、やっぱりこれおいしいよ〜」

小咲さんはグミを幸せそうに食べていた。って、もう小咲さん口に入れてるし!!

「ちよつと待って、小咲さん!もう一度鵜先輩に詳しく聞いてからじゃないと!」

「ほえっ?」

俺の忠告が遅れて、小咲さんはこっちを見ると同時にグミを飲み込んだ。すると小咲さんは目をトロンとさせて頬を赤くしこっちを見てくる。

「風君……………」

「な、なんででしょうか?」

「なんでそこで立ち止まっているの?早く帰ろうよ〜」

「え…………あ、はい」

2回目だからなんともないのかな?耐性ができたとかそんな感じ。いや、でも顔は赤くなってるし……

「ほら、行こっ!」

小咲さんは俺の手をとると、右手で俺の手を握って、左手は俺の腕に絡めるように密着して歩き出した……………つて

「ええええええええええええ!!?!」

「お、お姉ちゃん!?何してるの!!」

ちよ、ちよつと待って。これやばい。色々やばい。小咲のいい匂いとか、小咲の胸の感触とか、小咲さんの体温とか全部感じる。やばい。本当にやばい。

「こ、小咲さん!少し離れて」

「ん〜?なくに〜?」

何この人!可愛い!超可愛い!今までに見たことないにつこり笑顔&間の抜けた声で返事する人いないから!本当に可愛い!!

「な、風!何してるの!お姉ちゃんから離れて!!」

「そ、そう言われても、小咲さんを乱暴にできないし…………とりあえず、

春、お前は鵜先輩に連絡してくれ」

「わ、わかった」

春は携帯電話で鵜先輩に連絡した。なんでいきなりこんな事に
……………

「ねえ、凧君？」

「は、はい？なんでしょうか？」

「私の事、これから小咲さんじゃなくて、小咲って呼び捨てで呼んで欲しいな？」

「ええっ!？」

「ダメ？」

「いや、ダメっていうか……………ほら！小咲さんは先輩ですし！それに……………」

「うう……………」

涙目で俺を見つめてくる小咲さん。そんな目で俺を見ないで!!なんでもお願い聞いちゃうよ俺。小咲さんにそんな目で見られたら誰でもそうなるよ！本当だからな！

「……………こ、小咲？」

「うん！嬉しいよ、凧君！」

つないでいる手を離してくれた。と思ったら、今度は正面から抱きついてくる小咲さん。

「んなっ!？」

「ちよつと凧！お姉ちゃんに何してるの!!」

「お、俺じゃねえよ!!」

『小野寺様！今どんな状況なんですか！詳しく教えてください！』
ああ、もう。これどうしたらいいんだ……………

「凧君、今度は頭撫でて欲しいな？」

「え、頭をですか？」

「うん。優しくいつぱい撫でて欲しい」

「は、はあ、それくらいなら」

言われた通りに小咲さんを右手で優しく撫でる。すると、小咲さんは目を猫のように細めて気持ちよさそうにしていた。

……にしても、こんな様子を誰かに見られたら大変だな。

「舞子君、ついてこないでくれる………んなつ!!」

「同じメガネのよしみだよ、るりちゃん………風?何してんの?」

………ちよつとまで、状況整理だ。俺は小咲さんに抱きしめられてる。その小咲さんの頭を優しく撫でる俺。そんな俺と小咲さんに驚く。舞子先輩と宮本先輩。そう、宮本先輩だ。

「………舞子君。あなたの鞆かして頂戴。今すぐあの裏切り者をその鞆で吹っ飛ばしてくるわ」

「風、今回ばかりは庇えないぞ………、ほい、るりちゃん」

舞子先輩の鞆を受け取り、それをブンブン振り回しながら近づいてくる宮本先輩。なんか俺の殺害計画が実行されようとしている。ていうか、宮本先輩の後ろに修羅がいる!鬼がいる!

「ちよ、ちよつと待ってください!!流石にそれは死にますから!!

………あ、そうだ。春!その電話を早く宮本先輩に!」

「へ?あ、うん」

春が宮本先輩に電話を渡して事情を説明している。ふー、これで俺の命は助かりそうだ。だが、俺の命もつかの間。

「ねえ、風君」

「あ、はい………小咲さん?」

小咲さんは頬を膨らましてこつちを見ていた。え、何この人?もしかして怒ってるの?」

「頭撫でてって言ったのに。途中でやめたら私怒るよ!」

「あ、はい。ごめんなさい」

「罰として、私のことぎゅーって抱きしめて!!」

「はい!」

「えっ!」

『今凄い言葉が聞こえたんですが、小野寺様!』

「………小咲、何考えてるの?」

「うわー、今のこの状況、楽に報告したらなんで反応するんだろう」

約1名この状況を楽しんでる人がいる!?!じゃなかった。抱きしめてって何言ってるの!!

「小咲さん、それは流石に……………」

「……………風君からしてくれないなら私からするよ?」

「ええっ!?」

小咲さんは自分の手を俺の手と絡めて、背伸びをしながら、もう片方の手を俺の背中へと伸ばしてくる。

「ま、待ってください!小咲さんには一条先輩がいるじゃないですか!俺じゃダメです!」

「一条君は今はいいの!私は風君にぎゅってして欲しい」

一条先輩、本当にドンマイ。今の小咲さんのハートは俺がゲットしている!じゃなかった。

「なあ、風。今の言葉録音したんだけど、これ楽に聞かせていい?」

「やめろ!いや、やめてください!!」

突然のことで敬語を忘れてダメ口に……………

「ねえ、風君。早く〜」

どうしよう。小咲さんを正気に戻すためにぎゅつとするべきなのか?それとも、このままなんとかごまかして待つべきなのか?……………そうだ第三者の意見を。

「お、お姉ちゃんが風に取りられちゃう……………」

『小野寺様!早まらないでください!!』

「小咲……………あなたまさか……………」

「だ、ダメだ。俺笑い堪えるので必死」

使い物にならない!顔真っ赤にしてる人と、電話越しに必死に呼びかける人と、何か1人で納得してる人と、笑い堪えてる人しかいない。どうしよう、全力でどうしよう。とりあえず笑い堪えてる人はあとでしばこう。

「こ、小咲さん」

「風君、はやくつてばく。それとも私からぎゅつとすればいいの?」
覚悟を決めろ。覚悟を決めるんだ黒崎風。この状況を打破するために。小咲さん、一条先輩。春、宮本先輩、鶴先輩、ごめんなさい。こんな俺を許してください!

「ごめんなさい!!」

俺は小咲さんのことをぎゅつと抱きしめた。決して小咲さんが痛くないように優しく。けれど、ぎゅつと抱きしめた。

「凧！お姉ちゃん!!」

あ、すごくいい匂いがする。なんだろう、すごく落ち着く。これなら永遠抱きしめてられるかも。

「……………凧君？」

「小咲さん？」

「あれ、私何して……………というか、この状況……………あれ？え？私……………私!!」

抱きしめていた体を離すと小咲さんは顔を真っ赤にして、下を向いていた。あれ？もしかして……………

「正気に戻った？」

「わ、私凧君に抱きしめられて、私何して……………えと、その、あの……………」

「小咲さん？小咲さん!!」

正気に戻った小咲が顔を真っ赤にしたまま気絶してしまった。

「気絶しちゃった……………でも、よかった。これで一件落着だな。うん、解決だ」

「何が解決なの？」

……………あれ、おかしいな。後ろから凄まじい殺気を2つ感じる。後ろに振り向きたくない。でも、振り向かないと殺される。振り向かなくても殺される。そんな気がする。

「えと、春、宮本先輩？」

「凧、何か言い残すことある？」

「黒崎君。とりあえず小咲をこっちに預けてもらえるかしら？」

後ろの修羅2人になすすべもなく、気絶した小咲さんを預ける。

「えと、その……………許してください？」

「む、り」

「ですよー」

俺はその日、今まで生きてきた中で1番。いや、これから生きていても食らうことのないようなパンチを2発食らった。

「最っ低!!!」

「ごめんなさい」

謝って俺は気絶した。

第24話 2人とデートデ

お祭りの日から少し経った日のこと。俺はもう最近では当たり前のように、『おのでら』でバイトをしていた。今日も小咲さんと春と3人で店番をしている。

「お客さん、来ないですね……………」

「そうだねー。向かいのケーキ屋さんも落ち着いてきたはずなんだけど」

向かいのケーキ屋さんを見ると、向こうも暇みたいだ。店長さんがお店の外を箒で掃いている。

「あ、そうだ風！ちよつと話があるんだけど？」

「ん？どうした？」

「明日休日でしょ？私とお姉ちゃんまで水族館行こうとしてるんだけど……………よかったら風も来ない？商店街でもらったチケットが余ってるし、明日は風もお仕事休みだよね？」

そう言つて、俺に水族館のチケットと渡してくる春。

「水族館？いいのか、俺と一緒に行っても？」

「も、もちろんだよ！ねっ、お姉ちゃん？」

「うん！風君も一緒だときつと楽しいよ。どうかな？」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

春からチケットを受け取る。一条先輩、ごめんなさい。俺、明日小咲さんと春とデートしてきます。

「じゃあ、明日10時に水族館前で待ち合わせでいいかな？」

「わかった。ありがとな、春」

「う、うん」

明日が楽しみだ。でも、こんな可愛い2人とデートできるって。俺明日あたりなんか不幸なこと起きるんじゃないかな……………

「あ、凧！お待たせ！」

「凧君、おはよう。ごめん、待たせちゃったかな？」

「いえいえ、そんな事ないですよ。全然待つてないです、ただ、少し寝不足なんですよ」

翌日。2人とのデートが楽しみで夜全然眠れなかった俺は、遅れなように早めに家を出てきた。着いたのは待ち合わせより30分前。

「凧君、眠たそう。もしかしてあまり寝てないの？」

「ええ。でも大丈夫ですよ。それにしても……春も小咲さんもその格好、とつてもいいですね」

「え、本当？」

「はい。2人ともとつても可愛いです」

「……………」

「あれ、どうかしましたか？」

「ううん、なんでもない」

(いきなり可愛いって言うてくるのは反則じゃないかな……)

俺の言葉になぜか顔を背ける2人。俺そんな変なこと言ったかな？デートの際に女の子の服装を褒めるのは当たり前だって姉貴に教えてもらったんだけど……

「さっ、いー！時間も永遠にあるわけじゃないんだし」

春が俺の腕を取り、そのまま引いていく。……………なんかこの感じ凄いでジャブを感じる。

「春、ちよつと待った」

春の手を一旦離して、俺は小咲さんのところへ行く。

(小咲さん、俺この前の祭りの時と凄いでジャブを感じるんですけど……春に先導させたらまた春が迷子になるんじゃない?)

(あ、それもそうだね。どうしよつか?)

(それで一つ考えたんですが……)

「ちよつと、凧、お姉ちゃん！これ何さ！」

「いや、その……春はちよつと鈍臭い……じゃなかった。少し前科があるからこうさせてもらうことに」

「ごめんね、春。これもみんな春のためだから」

俺の考えた春を迷子にさせない作戦。春の両手を俺と小咲さんがつなぐという作戦。俺は手をつなぐのは恥ずかしいから春の腕を掴む感じにしている。

「なんでこれでまわるの！私やだよ！」

「いいじゃん別に。仲よさそうに見えるだろ？」

「そういう問題じゃ！というかどうかどうせなら凧も手を……」

「ん？なんか言った？」

「な、なんでもない！」

今春は俺になんて言ったんだ？前半しか聞こえなかったんだけど。

「まあいいか。じゃあいこうか？」

「えっ、本当にこれで!？」

「文句言っちゃダメだよ春。ほら、行くよ」

3人で並んで水族館に入る。入口付近は混んでいてなかなか前へ進めない。

「さ、さすがに入口は混んでますね」

「そうだね。少し人がすくまで待つ出た方が良かったかな？」

「そしたら時間なくなっちゃいますよ」

春を挟んで小咲さんと会話する。春は顔を真っ赤にしながらも歩いていた。

「ふー、なんとか抜けた」

「中はゆっくり回れそう」

「その前に記念撮影しますか？」

「それ賛成！」

今まで一言も喋らなかつた春がいきなりカメラを取り出した。い

きなりどしたんだ？

「じゃあお姉ちゃん。撮影お願い」

「う、うん。わかった」

春のいきなりのテンションの変わり方に小咲さんも驚いている。

(いきなり腕取られた風に使返ししてやる。思いつき腕に抱きついてやるんだから)

「じゃあ撮るよー」

「は、はい……………って春？なんでそんなに距離近いの？」

近いところが腕に抱きついてきてる。密着してる方が意味的にあつてるくらいに。

「こ、これでいいの！お姉ちゃん、撮って！」

「うん。じゃあ……………はい、チーズ」

シャッター音が聞こえ俺と春が離れる。凄い緊張した。春の胸が俺の腕に当たってたし……………うん、なんか得した気分。

「じゃあ次はお姉ちゃんの番ね。撮ってあげる！」

春と交代して小咲さんが俺の隣にやってくる……………あれ？小咲さんもなんか距離近くない？てか、なんで俺と手繋ぐんですか？

「お、お姉ちゃん？距離近くない？」

「そ、そんな事ないよ。春は腕に抱きついて撮ったんだし、これくらいが普通だよ」

「いや、でもお姉ちゃん、風と手繋いでる」

「折角の記念だから。ほら、撮って春！」

(春ばかりズルいよ。私も風君と密着するんだから)

「じゃ、じゃあ……………はい、チーズ」

シャッター音が聞こえると春が撮った写真をチェックする。問題ないと思うけど……………

「小咲さん？そろそろ手を離してくれても……………」

「じゃ、じゃあそろそろどこかいこ！」

「あの、小咲さん？」

春だけじゃなくて小咲さんも様子おかしいような……………

「まあいいか……………もうすぐイルカのショーがあるみたいですよ？」

行ってみませんか?」

「そうしよう!春もいいよね?」

「え、あ、うん」

「じゃあ、失礼して……」

小咲さんと繋いでない方の手で春の手を握る。

「つつ!」

「あ、ごめん。手は嫌だったか?」

俺が手を握った瞬間、春があとずさる。

「あ、違うの。ただびつくりしただけ。別に嫌じゃない」

「ならいいけど」

春の手を握ってイルカのショーへ向かう事にした。………なん
かこんな可愛い2人の手を握って、俺って凄い得してるよな。

ちようど前の方が空いていたので手をつないだまま3人でそこに
座る。

「と………いつまで俺は2人と手を繋いどかないといけない
んですか?」

「まだダメ!!」

「そうですか………」

声を揃えてそう言われたので、そのままにしておく事に。

イルカのショーはどんどん続いていく。イルカってやっぱり凄
んだな………なんか喉乾いてきたな。

「すいません、飲み物買いに行きたいので、手放してもらっていい
ですか?」

「だ、ダメ!」

「いや、ダメと言われましても………」

なんで2人は俺の手を放してくれないんだ?よくわからない。

「うーん…………じゃあ私が行ってくるよ！」

「いや、それは悪いから俺が行くよ」

「いいの。私行ってくるから少し待ってて！」

春が席から立ち上がって小走りで飲み物を買に行った。俺はともかく小咲さんに買わせにいくのを悪いと思ったのかな？

『それでは、次のショーに移りたいと思います。次のショーはお客様に手伝ってもらおうと思います……………』

「てか、春にジューズ買いに行かせて良かったんですか？忘れてましたけど、あいつとんでもない方向音痴なんですけど？」

「……………あ!!」

今頃そのことに気づく俺ってバカだろ。もともと春と手を繋いだのこのためだったのに！

「すぐ探しに『そのカップルお二方！手伝ってもらってもよろしいですか？』え？」

「ふえ？」

いきなり手をこっちに向けられてびっくりする俺たち。てか、小咲さんの間の抜けた返事凄く可愛い…………

「もしかして…………私たちの事かな？」

「みたいですね。こうやって手を繋いでるからそう見えたみたいですよ」

「ど、どうしよう凧君!?!春のこともあるのにー！」

「ま、まあ、少しの時間で済むでしょうし、ここはあの人に従いましょうよ。小咲さんが嫌ならいいですけど」

「い、嫌じゃないよ。むしろ嬉しいというか…………」

「へっ?嬉しい？」

「ううん、なんでもない!!」

春のことは心配だが、俺たちは席から立ち上がり、一旦手を放して係員がいるところへ行く。

『ではこの旗を持ってください。こちらが合図した時にこの旗を上げるとルー君がジャンプしますので』

ルー君というのはおそらくイルカの名前なんだろうな。イルカだからルー君……安直な名前だ。

『お二人とも、手を繋いでください』

………こういうのってカップルぽく見せたほうがいいのかな？
その方がなんか盛り上がりそうだし……

「小咲さん、ごめんなさい」

一言言って手を握る時俺は指と指を絡める、いわゆる恋人繋ぎの繋ぎ方で小咲さんと手をつなぐ。

「ふえっ!!」

『あ、ちよつとまだ!!』

いきなり恋人っぽい握り方で手を握ったのにびっくりしたのか、小咲さんが持っていた旗を上げてしまった。

すると、ルー君が水面から思いつきりジャンプした。その勢いで凄い水しぶきが上がる。

「小咲さん!!」

水しぶきが上がるのを予感した俺は小咲さんから水しぶきをかばうように、小咲さんの前に立ち、抱きしめた。

ザッパアーン!!

水しぶきが上がり、俺の服はビショビショになる。小咲さんは女の子だ。それに今日は暑い夏。格好もワンピース。そんな中、水でビショビショに濡れたらどうなるか。おそらく、服が透ける。そんな羞恥を小咲さんに晒すわけにはいかなかった。

「あ、あれ? な、風君?」

「大丈夫ですか? 小咲さん?」

俺がかばったおかげで小咲さんへの被害は少なそうだ。そのかわり、俺は服どころが全身ビショビショになったが。

『そ、想定外な事が起きましたが、皆さん!! 彼女さんを水しぶきで濡れるのを身を挺して守った彼氏さん。このかっこいい彼氏さんに大きな拍手をお願いします!!』

係員さんの言葉とともに、盛大な拍手が俺に送られた。

『すげえ!!』

『カッコいいぞー!!』

『私もあんな彼氏欲しい!!』

『リア充爆発しろー!!てか死ね!!』

変な野次というか、悪口が聞こえたが気のせいだろう。

「風君!大丈夫!?!ごめんね、私をかばったせいで……」

「え、あ、はい。水で濡れただけなんでなんともないですよ。元はと言えば、手をつなぐ時に恋人繋ぎした自分が悪いんですから……:……:……ふあつくしよん!!」

全身が濡れたせいとか、少し寒気がして、クシヤミをしてしまう。

「早く体拭かないと体冷えて風邪ひいちゃう!」

「そ、そんな大げさな……」

「いいから!とりあえず戻ろ。私タオル持つてるから!」

バッグからタオルを取り出す小咲さん。でも、俺はそんなことより気になる事があった。

「……………あの、小咲さん?みんな見てます」

「へっ?」

「ですから、お客さん。みんなこっち見てます?」

俺に言われて周りを見渡す小咲さん。すぐ目の前にいる係員は顔を真っ赤にして顔をそらしていた。

『え、えと、これでイルカのショーは終わりです。ご来場ありがとうございました。ございました』

こんな大人数の前で。それもこんなにイチヤイチャしていたら。それは顔を真っ赤にするだろう。

『お二人は未長くお幸せに〜』

係員の余計な言葉に俺たち2人とも顔を真っ赤にしてしまう。こんなほぼいじめに近い。というか、いじめだ。

「あの、えと、その……………ごめんなさい」

「なんで謝るんですか!とりあえず、早くここから去りましょう!恥ずかしいのは俺も一緒なんですから!」

小咲さんの手を取って、イルカのショーの場から去った。

「ごめんね。凧君。はい。これで体拭いて」

「すいません、お借りします」

小咲さんが顔を赤くしながらタオルを渡してくれた。それを受け取った俺は体を拭いていく。

「……………あ!!」

「え、どうしたの?」

「携帯……………壊れた」

「ええっ!」

おそらく水没したんだらう。あれだけ勢いよく水を浴びたんだから。

「姉貴になんて言おう……………」

「ほ、本当にごめんね!なんでお詫びしたらいいか」

「いや、別にいいですよ。俺としては小咲さんが無事で良かったです」

「うん……………ありがとう、凧君」

「お待たせく、ごめんね。少し道に迷っちゃって……………ってどうしたの凧!?全身ビショビショだよ!」

そこにジュースを3本持った春が戻ってきた……………え?

「春?お前……………一人で?」

「ううん、迷ったけど、なんか凄い優しい女の人にここまで連れてきてもらった」

「凄い優しい女の人?」

「なんだそれ?春が方向音痴って知ってる人だよなそれ。」

「それより凧、大丈夫!」

「あ、うん、大丈夫。ただ、水に濡れただけだし」

「ならいいけど……………お姉ちゃん?どうしたの?凧をそんなに見つめて?」

「へっ？いや、なんでもない！なんでもないの！」
「??？」

「すいません小咲さん。このタオル、洗って返しますね」

「え、そんなのいいよ別に。今返してくれたらいいよ」

「したら小咲さんのバッグの中が濡れちゃいますよ。そんなの悪いです」

「そ、それはそうだけど」

「そういうことです。次はどこに行きますか？」

小咲さんに借りたタオルの俺の鞆の中に入れる。

「あ、お土産屋さん！あそこ行こ！」

春の指差す方向にはお土産屋がある。

「いいね。小咲さんも行きましょう」

「うん、ごめん。私ちよつとあそこで休憩してくるから、2人で行ってきて」

「へ？どうしたのお姉ちゃん。体調でも悪いの？」

「ちよつと歩き疲れただけ。だから心配しないで。大丈夫だから」

「熱中症とかじゃないですよ？無理しないでくださいね？」

「うん。ありがとう。大丈夫だから」

「わかりました。……あ、これ。俺の分のジュースです。良かったらどうぞ」

「うん。ありがとう」

お土産屋さんから少し離れたベンチに小咲さんは座った。まああそこなら俺もお土産屋さんから見えるし大丈夫だろう。

「行こ、凧！」

「了解！」

小咲 s i d e

「どうしよう……私」

私から身を挺して守ってくれた凧君。もうこれで3度目。1度目はバイクに轢かれそうになった私を守ってくれて、2度目は落ちてきた鉄パイプから私を守ってくれて、3度目はさつき、水しぶきから私を守ってくれて……

「黒崎凧君か……」

ついこの前までは同じ学校の仲良しな後輩っただけだったのに……同じお店で働くようになって、春と一緒に笑ってる凧君が羨ましくなって、夏祭りの時に、恋してるってことに気づいて。

「本当にどうしよう……」

あんな風に何度も助けられて、恋人みたいなこととして、凧君と一緒にいたらいつも楽しくて。ずっと一緒にいたいって思ってた。

「私もう凧君の事しか考えられないよ……ずっと一条君の事好きだったのに、本当にどうしよう……」

凧 s i d e

お土産屋で色々見て回って買い物した俺たちは水族館から出て、小咲さん達の家に向かっていた。

水族館の中とは違い、外は暑かった。これだけ暑いと濡れていた服もすぐ乾いた。携帯は治らなかつたけど。

「はあ、楽しかった。ね、お姉ちゃん、凧！」

「ああ、そうだな。充実した1日だったよ」

「うん、本当に楽しかったね」

お土産屋さんから出てきた後も小咲さんは少し元気がなかった。

なんというか、いつもの明るい笑顔じゃない。

「……………あ、そうだ！春、小咲さん。これ見てくださいよ！」

俺はポケットからお土産屋さんで買ったあるものを2人に見せる。

「これ……………」

「ストラップ？」

「そう。それも海の生き物と和菓子っていうコラボのストラップ！かわいいな、って思って買ったんですよ！」

「へえ、いい！すごくかわいい！」

「だろ？春もそう思うよな！」

「本当だ。すごく可愛い！」

春も小咲さんもストラップに興味深々になっていた。

「これ3つ買ったんです。別々のやつ。だから、春、小咲さん。好きなやつ選んでください！」

「え、いいの!？」

「凧君、これくれるの？」

春にも内緒で買ったストラップ。元気がなかった小咲さんを元気付けるために買ったのもあるけど。

「だって俺たち、和菓子屋『おのでら』の高校生3人じゃないですか。

3人でつけたら、お揃いみたいですごく良くないですか？」

「うん。いいと思う！」

「でも、いいの？本当に？」

「もちろん。好きなものどうぞ？」

「じゃ、私これ！」

「じゃあ……………私はこれで」

春がクジラのストラップ。小咲さんがイルカのストラップをとった。残るはサメのストラップ。

「ありがとう凧！すごく嬉しい！」

「うん。私も！ありがとね、凧君！大切にするよ！」

良かった。喜んでもらえて。これで少しでも小咲さんの元気が出てくれたらいいんだけど。

「じゃあ、帰りますか」

買ったストラップをポケットの中に入れて俺たちは小咲さんたちの家に向かった。

夜

「ごめん、姉貴。携帯水没した」

「うん、知ってる」

「えっ!?!なんで!?!」

「だって、あのイルカのショー私も友達と見てたもん」

「ええっ!?!」

「あんた達がイチャイチャしてるの見て腹立ったから途中で抜け出したけどね。そしたら、春ちゃんが迷子になってたぽかったから私があんなの元に連れてったのよ。あんたに顔見られるの嫌だから、つれてった後、すぐ去ったけど」

「な、なんだよそれ。てか、春は姉貴と会ってるだろ?なんで春は気がつかなかったんだ?」

「そりやそうだろ。私、家にいるときと友達といるときでは全然違うんだから。化粧とかするし」

「ええっ!?!」

姉貴の知らない一面を知った日でした。

第25話 トツゼンの告白

春side

「な、凧君、こ、これ、どこにおいたらいいかな?」

「あ、それはまな板の上にお願ひします」

「わ、わかった」

「……………おかしい。なんてお姉ちゃんは凧に話しかけるだけでこんなに緊張してるの?」

「凧君、小咲、休憩入っていいよー。あと、私今からちよつと出てくるから、凧君、悪いけど、今日長くいてもらえるかな?」

「あ、はい。わかりました。行きましょ、小咲さん」

「わ、わたしはまだ大丈夫だから、春、先に行つて来たらどう?ね?」
「……………おかしい。なんで凧と一緒に休憩しようとしなの?」

「あの小咲さん。俺の作ったの味見してもらっていいですか?」

「え、いや、あの……………ごめんなさい!!」

「なんで逃げられたの俺?……………春、代わりに味見して……………つて、ない!!?」

「……………おかしい。なんでお姉ちゃん、凧から逃げるの?……………」

あ、凧の和菓子おいしい。

「ごめんね、凧。今日は少し長く働いてもらっちゃつて。お母さんまだ帰つてきてないけど、よかつたら晩御飯一緒に食べる?」

「え、お邪魔なんじゃ?」

「大丈夫だよ。凧がいるなら私も作るの頑張っちゃうから!!」

「な、なんなら、私も凧君のために料理作っちゃうから!!」

「それはダメ!!!」

「やっぱりおかしい。お姉ちゃんが自分から料理作るなんて言うことあるわけがない。」

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて。姉貴に連絡してくるので少し待つて下さい」

「そう言つて凧は携帯で電話をかける。その隙に私はお姉ちゃんに近寄つた。」

「ねえ、お姉ちゃん。風と何かあった？」

「べ、ベベベベ別に何も無いよ!!」

「お姉ちゃん、誤魔化すの下手すぎ……」

「ううっ……」

あからさまにしよんぼりするお姉ちゃん。はあ、とても可愛い。すぐく和む……じゃなかった。

「で、どうしたの?言えないこと?」

「うん……ちよつとね。風君にも春にも話せないかな?」

(春はきつと風君のことを……だから)

「ふくん……じゃあ話せる時になったら話してね?」

「うん。ごめんね、春」

謝ってくるお姉ちゃんに私は微笑んだ。さてと、そろそろ私も晩御飯の準備をしないと……

「あの、春、小咲さん。ちよつといいですか?」

「ん?どうしたの?」

「いえ、その、本当に頼みにくい事なんだけど……今日泊めてもらえない?」

「へっ?」

風side

「あ、もしもし。姉貴?今日帰るの少し遅くなるけど、いい?」

『風か?ちよつどいいところに。お前今日バイト先に泊めてもらえ』
「……………は?」

いきなりの事で何も言えない。

「ちよ、どういう事だよ?」

『いや、私も咲も今日は家帰れないから』

「どうして!?!」

『母さんと父さんと泊りがけで温泉行ってるから。あ、ちなみに風もいるぞ!』

何てひどい家族だ。息子1人だけ置いてみんな温泉とか…………

「なんで俺誘わねえんだよ!!風はいるのに!!」

『誘おうとしたけど、お前電話にでないから。とにかくそういう事だから。バイト先小野寺のそこなんだろう?できるならそうしてもらえ。無理なら悪いが、友達の家泊めてもらえ。じゃ』

「あ、おい、ちよつと!!」

どうすんだよこれ…………

「て事なんで。ダメですかね?無理なら翔太とかに相談してみますけど?……………つてあの、2人とも?」

(どうしよう。風(君)がとんでもなくかわいそう…………)

なんか2人にもものすごい同情されてる気がする。まあ、そりやそうだろうけど。

「と、とにかくお母さんに聞いてみるね?」

春は携帯を取り出し電話をかける。

「…………あ、もしもしお母さん?風がね今日家に帰れないらしくて、もしよかったら泊めて欲しいそうなんだけど?……………理由?なんというか、家族にハブられたみたいで」

ハブられたとかやめてくれない?俺マジで泣きそうなんだけど。

「うん、わかった。お母さんはいつ帰ってくるの?……………え、今日帰ってこない?明日の朝に帰る?ちよつと待って、それは流石にやばいんじゃない?あ、お母さん!?!」

プツツ、と電話が切れる音が聞こえた後、春はこっちを向いた。

「泊まるのは大丈夫なんだけど、風が泊まるなら、私はお邪魔だろうかから今日帰ってこないって…………」

「えつとー。つまりそれは…………」

今日は俺と小咲さんと春の現高校生3人で一夜を過ごさせて事なのか?それは流石に…………

「…………と、とりあえず晩御飯作ろつか」

「お姉ちゃんはゆっくり休んでね。お願いだから」

エプロン姿になった春が小咲さんを念入りに釘を刺してソファに座らせる。小咲さんは納得していないようだったが、仕方ないという感じでソファに座った。

「風、晩御飯なにがいい？希望に沿ったものを作るけど？」

「なんでもいいぞー。ていうか、俺も手伝うよ」

「え?!いいよ。風はお客さんなんだからお姉ちゃんと座って休んでて」

「泊まらせてもらうんだし何かしないと悪いから。エプロン貸してもらえるか?」

「でも……………」

「いいんだよ。俺も家では料理してるし」

「……………わかった。じゃあ、はい」

納得した春は着ていたエプロンを脱いで俺に渡してくる。

「風は私の使つて。お姉ちゃん、悪いけどエプロン借りるね?」

「うん。いいよー」

「なんで俺が春のエプロンを?俺が小咲さんにエプロン借りたらよかつたんじゃないのか?」

「うーん……………それはダメ。今お姉ちゃんお悩み中だから」

よく意味がわからない。なんで俺が小咲さんのエプロンを使つてはいけないのか。

「じゃあこれ借りるな」

春から受け取ったエプロンを着て俺もキッチンに入る。……………というかこれ春がいつも着てるエプロンなのか。なんだか恥ずかし

い。でも得した気分。

「風、今いやらしいこと考えたでしょ？」

「え！あ、いや、そんな事……」

「……変態」

「ご、ごめんなさい」

春に心を読まれた。なんでそんな事が出来たのかわからないけど、とりあえず謝った。

「まあ、いいけど。で、なに作る？」

「無難にカレーでいいんじゃないか？」

「カレーか。いいんじゃないかな？ルーもあつたと思うし」

「じゃあ決まりだな」

食材を準備して、2人で並んでそれらを切っていく。

「なんだか俺ら新婚の夫婦みたいだな」

「夫婦!!？」

「そつ。だつてそうだろ？こうして2人で晩御飯決めて、食材切つて、一緒に料理作るなんて………つてどうかしたか？」

「なananなんでもない！」

顔を真っ赤にした春は手早く野菜類を切っていく。

にしても、春が俺の妻だつたらどんなに幸せなんだろう。家事全般は出来るし、優しいし、可愛いし。仕事から帰ってきた俺を春が迎えてくれる。

『ただいまー』

『おかえり風。晩御飯もお風呂の準備もできてるよ？』

『ホントか？さすが春だな。俺にはもつたいない妻だよ』

『もう…:そうやってすぐ褒める。嬉しいからいいけど。……ねえ、風。お風呂でも晩御飯でもなく、まずは私もいただいて欲しいな？なんて……』

………最高だな!!今すぐ嫁にしたい!つてこんなこと前にも考えた事あるような。

「ねえ、風。風ってば！」

「え、何？」

「ずっと呼んでるのに返事しないからどうしたのかなって思ってた」

「いや、俺の未来の事を考えていた」

「なにそれ……それより、風に聞きたい事があるんだけど？」

「聞きたい事？」

「その……風はさ、私と風ちゃんとお姉ちゃん。誰が好みのタイプなのかなって」

「え？」

好み？春と風と小咲さんで？なんでいきなりそんな事聞いてくるんだ春は？

「ちよつと気になってね。いいから答えて？」

「急にそんな事言われても……」

好みか。春はさつき考えた通りだし、風はなに考えてるかわからないけど、基本優しいし、一緒にいるとなにが起るかわからなくて楽しい。小咲さんは基本春と同じだけど料理が壊滅的にできない。でも、抱擁力は春より上だし。

「悩むな。タイプって事は外見とかはなしにして内面的につて事か？」

「うーん……そうじゃなくて……その、付き合ってみたい、とか？」

「っ、っ、付き合う!？」

「もしも！もしもの話だから!!」

「もしもって言っても……」

もしもの話でもここで春じゃなくて他の人を選べば春はショック受けるだろうし、どうすれば……

「いや待てよ」

よく考えたらこれは前に風に聞かれた事を今一度確認できるチャンスなんじゃないか？自分の気持ちに正直なるチャンス。よく考えてみよう。俺は誰が好みなのか。

「あの、風？例えばの話だからそんなに顔こわばらせて考える事じゃないんだけど」

風にああ言われてから俺真剣に考えた事なかった。だからちゃんど考える。春、小咲さん、風。みんな可愛いし、優しい。となると、い

つまでも一緒にいたいと思う人。誰だ？……………

『…………ううん。そのお誘い受けるよ。だから、しっかりとエスコートしてよね、凧君…………ううん、凧！』

『私の事、下の名前で…………小咲さんって呼んで欲しいな…………』

『でしょ？そういう変な言い訳しないところ、私結構好きなんだー』
……………そうか。

「春」

「え？」

「こんな話やめとこう。うん。例えでも俺そういう事言いたくない」

「凧？どうかしたの？」

「いや、なんでもない。さっ、早く料理作ろうぜ」

「う、うん。わかった」

(凧、どうかしたのかな？なんか変な感じに)

春 side

そのまま晩御飯を作り終えてそれを美味しく完食した私たち。凧はあの話をしてからずっと悩んでいるような感じだった。お姉ちゃんもそれを何か感じたみたいだった。

「な、凧君、どうかしたの？なんか悩んでるような表情だけど？」

「あ、いえ、なんでもないんです。小咲さん、心配してくれてありがとうございます
うございます」

「う、うん……………さつき私お風呂沸かしておいたの。よかったら凧君先入ってきて」

「え、先にいただくの悪いですし、小咲さん達が入ってきたらどうですか？」

「いや、あの……………私たちが使った後のお風呂に凧君が入るのは

ちよつと……………」

お姉ちゃんの言う通りだよ！それは本当に恥ずかしい。わたしもお姉ちゃんも顔を真っ赤にしてしまう。

「ああ、すいません。デリカシーがなかったです。じゃあ申し訳ないですけど、先にお風呂いただきますね」

「うん。カゴにお父さんが使ってるTシャツ置いてるから」

「ありがとうございます、小咲さん」

一言礼を言つて風はお風呂へと向かつていった。

「風君、どうしたのかな？」

「多分、私に変な事聞いたから」

「変な事？」

「うん。風は私とお姉ちゃんと風ちゃん。誰が好みなのかなって」

「なっ!!？」

お姉ちゃんは顔を真っ赤にして驚いた。私も逆の立場だったらそうなつてたかもしれない。

「私も聞くつもりじゃなかったんだけど、この前の風ちゃんと風の話とか、今日のお姉ちゃん見てたらなんだか気になつちやつて」

「春……………」

「でも、よく考えたらここにお姉ちゃん入れるの意味なかったかも。だつてお姉ちゃんが好きなのは一条先輩だもんね！」

なんで私あの選択肢にお姉ちゃんも加えたんだろ。お姉ちゃんが風と一緒にいるのをよく見かけるからかな？それとも、風がお姉ちゃんの命の恩人だからかな？

「まあいいか。とりあえず私は食器片付けるからお姉ちゃんもお風呂の準備を…………お姉ちゃん？」

なぜがお姉ちゃんが涙目になりながら真剣な表情でこつちを見ている。何か私悪い事したのかな？

「春」

「な、なに？お姉ちゃん」

「ごめん!!」

お姉ちゃんはいきなり頭を下げ謝ってきた。

「え？な、なんで急にお姉ちゃん謝るの？意味わからないよ」

「私、春が凧君の事好きって知ってるのに。知ってたのに、でも、どうしようもなくて。凧君に助けられた事とか、凧君と一緒にいる事考えたりしたら、もう……………自分じゃ止められないの」

顔を上げたお姉ちゃんはボロボロと涙を流している。拭いても涙は止まらなく溢れている。

「え？どういう事？言ってる事がわからないんだけど。なんで泣いてるの、お姉ちゃん？」

「ごめんね、春……………さつき言えなかった事、今言うね」

「う、うん」

「私……………」

凧君の事、好きになっちゃった。一条君以上に……………もう、凧君の事しか考えられないくらい、凧君の事好きになっちゃったの！」
そう言われた瞬間、私の頭は真っ白になった。

第26話 ソレゾレの思い

「え……………嘘どうして? だってお姉ちゃんは一条先輩の事」

「あの時はそうだったの…………でも、春が知らないところで私風君と触れ合って、優しい仲良しな後輩っていうのが、異性としてみちやつて……………今はもう」

「そ、そんな…………」

「ごめんね…春の事を悲しませるつもりなんてなかったのに、でも、もうどうしようもなく風君の事が好きなの…………隠しておいても春ならいつか気づくかもしれないから」

（お姉ちゃんは風の事が好き。でも、私だって風の事が好き。そんなのって…………）

「ごめんね、ごめんね、春」

ひたすら涙を流しながら私に謝り続けるお姉ちゃん。お姉ちゃんがこんな悲しそうにして涙を流すの見るのいつ以来だろ…………お姉ちゃんとはずっと仲良くしていたのに、このままじゃ…………

「春、ごめん、本当に…………」

お姉ちゃんには笑顔でいてほしい。だから私は…………

「謝らないで。お姉ちゃん」

私はお姉ちゃんに近づいてそのまま抱きしめた。

「春…………?」

「仕方ないよ。風の事好きになっちゃったんでしょ? そりゃ、一緒にバイトして、たくさん遊んで触れ合ったりしたんだから仕方ないよ!」

「春、でも私は! 『そ、れ、に!』」

「私が風の事を好き? そんな事ないよ。風は私の男子の中の1番の友達!! 恋愛感情なんて私にはないんだよ!」

「えっ?」

私は泣きたい気持ちを抑えて、笑顔でお姉ちゃんに言った。だって守りたいから。お姉ちゃんの笑顔を。そのためなら私は。

「一条先輩はショックだろうな。こんなに可愛いお姉ちゃんにフラ

れたみたいなもんなんだから」

「フラれ!? 違う。そんなつもりじゃ!」

「とにかく私は風の事は恋愛的に好きってわけじゃないの。お姉ちゃんには私に謝る事なんて何も無いんだよ?」

「春……嘘ついてる」

「嘘じゃないよ。それより、はやくお姉ちゃんもお風呂に入る準備して。私は食器洗わないといけないんだし、他にもやらなきゃいけない事たくさんあるんだから」

「春……」

「さあ、はやく! それより大変だよ。これから風に猛アタックしないといけないんだから」

「う、うん………わかった」

お姉ちゃんはしぶしぶという感じでリビングから出て行った。

「お姉ちゃんが幸せになるなら、お姉ちゃんが笑顔になれるなら私はこの気持ちは隠しておく」

嘘をついてでも隠す。それが例えバレている嘘だったとしても、私はお姉ちゃんのために……風を好きだという気持ちは……

「私がお姉ちゃんのために色々助けてあげないと!! そのためにはまず……」

風side

風呂でさっぱりしたけど、モヤモヤする。やっぱりこれってそういう事なんだろうな。

「春ー、お風呂あがったぞー」

「あ、うん。わかった。じゃあ、布団を……あっ!!」

「ん、どうかしたのか?」

「いやー、よく考えたらお布団がないんだよねー。ほら、私とお母さんとお姉ちゃんが使ってるやつしかないんだよー」

「はい?」
「だからね。悪いんだけど、今日お姉ちゃんの部屋で寝てくれないかな?」

「はあ!?ふざけんな!そんな事できるわけ!!」

いきなり家泊めてもらって悪いのはわかるけど、初の家で小咲さんの部屋で寝ろってそんな事できるわけない!普通に考えて。

「だって、私の部屋はちよつと今散らかってあげられる雰囲気じゃないしー。お母さんの部屋は……何かとプライバシーとかあるだろうしー。お姉ちゃんならいつも部屋綺麗にしてるから大丈夫だよー」

「なんでそんな棒読みなんだよ。てか、そんな事できるわけ……」

「いいからいいからー。私もお姉ちゃんに頼んであげるから。ね?」

「いいわけあるか!俺はリビングのソファーとかで寝かせてくれれば大丈夫だから!」

「ダメだよ!そんなんじや体痛めちゃう!て事で、レッツゴー!」

「おい、ちよつと待て!」

春は俺の腕を引いてそのまま小咲さんの部屋へと向かう。

「お姉ちゃん、入っていい?」

『え、いいけど……』

「お邪魔しまーす」

春は小咲さんの許可が出ると、すぐにドアをあけ中に入った。

「春?どうかしたの………って風君!」

あれ、なんでそんなに俺驚かされてるの?

「春、どうして風君が!」

「いやー、さつき思い出したんだけど、布団がなくてさー。わたしの部屋今散らかってるから、悪いんだけど、お姉ちゃんの部屋で寝かせてあげて?」

「ええっ!?ちよつと待って!いきなりそんな!!」

「て事でよろしくー。お姉ちゃん、頑張ってねー」

「あ、おい、春！」

「ちよつと春！」

春は用件だけ伝えると、そのまま部屋を出て行った。ちよつと待つて。この状況どうしたらいいの？

「小咲さんどうしたら？つて、なんでそんなに顔真っ赤なんですか？」

「いや、その、なんていうか、どうしよう……………」

(春、もしかして、さつき私に言われた事気にして…………)

「小咲さん？」

「あ、ごめん、ちよつと考え事してて。それで、どうしよつか？」

「その事なんですけど、俺リビングのソファア貸してくれば別にそれで大丈夫なんですけど？」

「あ、そっか……………てダメ！そんな事で寝たら体痛めちゃうよ！」

「それさつき春にも言われたんですけど」

姉妹だから考える事はやっぱり似るのかな？ていうか、それがダメなら俺どうしたら…………

「あ、じゃあ、私が春の部屋に行つて、凧君がここで寝たら？」

「ああ。それはいいかも……………つていやいや、絶対ダメでしょそれ！！」

この人何考えてるの!?女子高校生の部屋に1人にするつて！

「え？なんで？」

しかも、理由を理解していない。

「あの、思春期の男子高校生を1人にして、俺が何かするとか思わないんですか？」

「何かつて……………つてええ!!？」

「いやいや、もちろんするつもりはないですよ！でも、そういう事を考えたりはしないのかなつて？」

「あ、うん。そうだよね。凧君だもんね。そんな事するわけないよね、あはは」

凧君だもんね、つてどういう事？俺どういう風に見られてるの？

「じゃ、じゃあもう、()で寝てもらおうしか／／」

「そ、そうですか…………」

自分で言っつて顔赤くしないでくださいよ！俺まで恥ずかしくなる
じゃないですか!!

「……………」

「……………」

やばい、この沈黙どうかして欲しい。

「と、とりあえず私おふるはいつてくるね。話はそれからしよう」

「あ、はいわかりました。いつてらっしゃい」

「いつてきます……………」

なにこの新婚夫婦みたいなやりとり。おふるいつてくるだけなの
に!?

「……………あ、あの凧君」

「はい?」

「そ、その、下着とか持つていくから、できれば部屋から出てもらえる
とありがたいんだけど」

「え……………あ、すみません、すぐに出ます!」

小咲さんにそう言われて急いで部屋を出た。俺何してんだろ本当
に……………」

「ただいま……………」

「あ、おかえりなさい」

数十分経ち、風呂から上がってきた小咲さん。なんでだろ、同じ
シャンプーとか使ったはずなのにこんないい匂いがするのは。
やっぱり、女の子だからなのかな……………」

「それで、どうしよう?」

「どうしようと言われましても……あ、毛布とかないんですか？あ
るならそれで床で寝ますから」

「あ、うん。それなら多分押入れに……」

そう言っただけで押入れをあける小咲さん。今度は見ないように後ろ向
いとかないと。

「あ、あった！」

「よかった。なければ本当に小咲さんのベットで寝る事に……」

「へっ？」

「あ……」

しまった、何言ってるんだ俺……これじゃあ小咲さんと一緒に寝た
いって言ってるみたいじゃん！

「……」

「……あの、小咲さん？」

「え？あ、ううん、なんでもない。なんでもないよ」

「は、はあ」

（風君、私と一緒に寝たかったのかな……つて、私何考えてるの!?!）

「そ、それより、まだ寝るには早いんだし、何かしよ！ほら、中学の時
のアルバムとかあるよ！」

何がそれよりなんだろう。まあいいか。

「いいですねそれ」

毛布を置いて、床にアルバムを広げて隣り合わせになって、2人で
見る。

「……………これが体育祭の時の写真で、これが文化祭。あと、修学旅行
の時の写真とか」

そこには小咲さんと宮本先輩と一緒に写ってる写真が。

……………つてあれ？

「写真の中にチヲホラと、小さいですけど一条先輩が写ってる」

俺がそういうと小咲さんが顔を赤くして俺の方に向いた。

「ち、違うの！これは、その、なんかこういう写真しかなくて。それ
で、仕方なく！仕方なくなんだよ！」

顔を真っ赤にして必死に言い訳をする小咲さん。なんかすごいか

わいい。

「あー、はいはい。わかりました。小咲さんがどれだけ一条先輩の事が好きかって事が十分伝わりましたよ」

「も、もう！違うの！それに今は……………!?!」

「今は、なんですか？」

「な、なんでもない！」

（あ、あぶなかったー。今うつかり言っちゃうところだったよ…………）

「にしても、中学校の頃、懐かしいですね。中2の時からずっと一条先輩たちと一緒にいた記憶しかありませんけど」

「あー、そういうえばそうだったかも。風君って友だち少なかったの？」「べ、べつにそういうわけじゃなかったですけど、なんか舞子先輩とかと一緒にいる方が楽しかったんで」

「言えない。実はあんまり友だちいないなんて。中3の時なんて、クラスで1人の時の方が多かったなんて言えない。恥ずかしい。」

「でも今は楽しいですけど、春や風や翔太がいますから」

「そうだね〜」

（あれ？そういうえば朝は風君の事を好きって自覚して、さっきまで、恥ずかしくて全然話せなかったのに、今はそんなことない）

「そうですよー。翔太やバカやるのを俺が止めて、春と風はそれ見て笑って。今は本当に楽しいです」

「2年もそんな感じだよ。舞子君が変なこと言うのを鶴ちゃんや万里花ちゃんやるりちゃんやんが止めて、みたいな感じ」

「そつちも同じ感じなんですネ」

「そう思うとなんだか笑えてきて、どちらともなくプツ、と吹いて笑い出す。」

「…………まあでも、そんな楽しい事があっても、いつまで続くかわかんないんですけどね」

「え？どうして？」

「それはまあ…………こつちにも色々あるんですよ」

「ふーん。悩みならいつでも聞くよ？」

「ありがとうございます。でも大丈夫です。これは俺自身で解決しな

いといけないことなので。それより、次は小咲さんの高1の頃の話が
ききたいです。一条先輩とどんな事があったのか」

「どんな事ってなんでもないよー!!」

「本当ですか？余計に気になる？」

「本当になんでもないから!」

その後も俺と小咲さんは色んな話をしていった。

春side

「いいなー。向こうは楽しそう」

隣のお姉ちゃんの部屋から凧とお姉ちゃんの楽しそうな笑い声が
聞こえてくる。

「私もそっちに混じりたい。もつと凧と一緒にいたい。でも……」

それはお姉ちゃんを悲しませることになるかもしれない。私はそ
んなことしたくない。

「はあ……いいなー、お姉ちゃん」

そうつぶやくと、私の目から涙がこぼれた。

「泣いちゃ、ダメなのに。ダメなのにどうして……」

涙を拭いても、とめどなく溢れてくる。自分じゃ止められないくら
いに。

「凧……好き。でも、言えない。悲しい。悲しいよ、凧」

わたしは涙が枯れるまでひたすら泣き続けた。

風 side

「あ、もうこんな時間。そろそろ寝よっか?」

「そうですね」

小咲さんはベットに入り、俺は毛布にくるまって横になる。

「じゃあ、電気消すね?」

「はい」

俺が返事をする、小咲さんは電気を消した。

「じゃあ、おやすみ、風君。またお話ししようね?」

「はい。おやすみなさい」

さて……………どうしよう。というか、俺はどうしたらいいんだ。こんな気持ち初めてだ。

「これが誰かを好きになるってことなのか」

かされるような声でそう呟く。こんな気持ち感じたことない。

「ただ、これはどうしたらいいんだろう。本当に困る……………」

そう呟くと、俺のすぐ横に置いてある携帯が音になった。

「メールか?こんな時間に誰が……………」

携帯を開くとメールが一件きていた。差出人は風だった。

『明日風君暇?暇だよな?わたしとデートしよ』

「こっちの予定は無視なのか?というか、またかよ」

『べつにいいけど?』

『じゃあ、明日10時にいつもの公園で待ち合わせね』

「了解、と」

返信して、携帯を閉じ目を閉じた。風のやつ、今度は何を考えてるんだ?

風side

「風君、大丈夫だって〜」

「ホント!? 風さん、チャンスだよ!」

「私も多少は応援する。だから頑張れ」

「うん、ありがとう。2人とも〜」

風君。明日は楽しもうね〜。

第27話 ドウシテそう思うのか

「すいません小咲さん、春。家の事情とはいえ泊めてもらって。今度またちゃんとお礼しますね？」

朝起きて風との約束があるため、早くに『おのでら』出ることにした。

「ううん、いいの。私も凧君とたくさん話せて楽しかったよ。ね、春？」

「う、うん。そうだね」

(この様子。やっぱりお姉ちゃん、昨日凧君といっぱい話せたんだろうな。いいな……ってダメ。そんなこと考えたら)

確かに昨日は楽しかった。ただ、1つ気になるのは昼の目の下が少し赤い。まるで、ずっと泣いてたみたいだ。

「春、昨日あれからなんかあったのか？」

「う、ううんなんでもない。ただ少し眠れなかっただけ」

「ふーん……まあ体には気をつけてな」

「うん、ありがとう」

なんだか今春は無理して笑った気がした。そんなに昨日言った事を気にしているのかな？まあ、俺も気にしてないわけではないけど。

「では、また明日。学校で」

「うん、ばいばい凧君」

「ばいばーい凧」

俺は2人に手を振って、そのまま風との待ち合わせの公園に向かう事にした。

「さてと、時間は9時半。少し早すぎたかな？」

「そんな事ないよ、凧君」

「うわあ!!びっくりした」

いきなり後ろから名前を呼ばれ振り向くとそこには風の姿が。

「脅かすなよ。てか早いな。待たせた詫びにジュースでも驕ろうか？」

「別にいいよー。私もさつき来たところだから」

「ならいいけど……で、今日はどこに行くんだ？」

「うーんとね。まずは映画かな？見たい映画があるの」

「映画か。まあいいぞ」

「じゃあ、いこー」

そう言つて風は俺の手を握る。突然すぎて、俺はとつさに手を離してしまった。

「い、いきなりどうした!」

「ん〜?今日はなんだか凧君と手をつなぎたい気分なの。だめ?」

「だめってどうか」

いつも腕組んだりしてくるから慣れてるとはいえ、びっくりする。てかいつもは許可なく手とったり腕組んだりしてくるのに、なんで今日はいきなり許可取ろうとするんだ?……そういえば今日はなんだか格好もいつもと違うっぽい気がする。

「だめ……なの?」

うっ、そんな目で俺を見ないでくれ。はいとしか言えなくなる。ていうか、最近俺頻繁に女の子と手繋いでないか?小咲さん、春、風、咲。「まあ、いいよ。ほら」

今度は俺から風の手を握る。すると風はフフツツと嬉しそうに笑った。

「じゃあ、行こっか……あ、その前に。凧君?」

「ん?」

「今日は私の事、風じゃなくて、涼って呼んでね?」

「はあ?」

「いいでしょ?昔は涼って呼んでくれたんだし」

確かに俺は小学校低学年の頃は風の事を涼って呼んでた。姉貴と咲は元から風だったのでそれが俺にも移って、今の呼び方になったのだ。

「なんで今更昔の呼び方に変えねえといけねえんだよ？」

「まあまあ。細かい事は気にしないで？」

「つたく……………まあいいけど」

「じゃあ、はい。今呼んでみて？」

「いや別にいいだろ」

「いいから〜」

「……………涼」

なんか無性に恥ずかしい。今日風……………じゃなかった。涼はますます考えてる事がわからない。

「うん、凧君。じゃあ今度こそ行こ〜」

「へえへえ〜」

適当な返事をして涼と手をつなぎながら映画館へと歩き出す。

「なんかこうしていると、小学校の頃思い出すね？」

「……………そうだな。あの時は毎日お前と手を繋いで学校から帰ってたもんな？」

「うん。覚えてる？凧君が雨の日に私が傘忘れて帰れなくてどうしよううつて時に、凧君、なんのためらいもなく、凧君の傘の中に入れてくれたの」

「ああ……………ぼんやりとだけ覚えてる」

小学2年生の頃、涼が傘忘れて家に帰れなくてどうしよううつて泣きそうな顔してる時に、俺が持っていた傘の中に涼を入れて帰ったんだったかな。

「あの時も私の手を握ってくれてたんだよね。凧君は優しいよね〜」

「そうか？あの時の状況なら男なら誰でもそうすると思うけど？」

「そんな事ないよ〜。あれはきつと凧君だからそうしてくれたんだよ」

「そうかな？」

「そうだよ〜。私がそう言うんだから」

「まあそういう事にしとくか」

「うん。まあそれは置いて他にもいろんな事あったよね？」

涼とゆつくり歩きながら昔話をしていく。こんな事を悪くないな
と思っっていると、映画館に着いた。

「で、なんの映画がみたいんだ？」

「えつとね。あ、これこれ」

涼が指差すのは最近流行っている恋愛映画。俺もCMやニュース
で見た程度だが人気があるという事は分かっていた。

「いいぞ。じゃあチケット取りに行くか。俺が払うよ」

「え？いいの？」

「ああ。バイトで稼いだお金もあるし、気にしなくていい」

「ふーん……じゃあお言葉に甘えようかな？」

了解、と返事をするとともにカウンターの方は歩き出す。日曜日。
それもお昼前という事もあり、映画館には人がたくさん来ていた。

「涼、手放すなよ？」

「わかってるよ。もし離れ離れになったら、私が大きな声で凧君を探
してあげるよ」

「そいつは頼もしい。じゃあ俺も離れ離れになったらお前の事を大き
な声で呼んでやるよ」

「さすが凧君、頼りになる」

まあそんな事はさせないと思いつながら、行列に並ぶ。これだけ人が
多いと中々列が進まないな。

「にしても、暑いな。夏でこんな人が多いとそうなるか」

「そうだね。それにカップルが多いから、そのイチャついてる感じ
の熱い熱のせいじゃない？」

「プツ、それはあるかも」

涼のいう事は一理あると思いつ、思わず吹き出して笑ってしまう。

「……………凧君、やっと笑った」

「へっ？」

「ここまで歩いてくるのにたくさん話したけど、凧君全然笑ってな
かったよ」

「えっ？そうだったのか？」

全然気づかなかった。でも言われてみれば確かにいつもしているツッコミとかは全然してない気がする。

「もしかして、何か悩みでもある？」

「いや、そんな事は……………」

「嘘。凧君、私に嘘ついてもすぐバレるよっ。」

「うっ……………」

そうだった。幼馴染である故か、涼には俺が何か隠し事をしようとしてもすぐバレてしまうのだ。長年の付き合いというやつだろう。

「まあだいたいわかるけどね。春と小咲さんの事でしょ？」

「ち、ちがつ！『それも嘘』……………」

「まあ、何があつたとかは聞かないけど、今日は私とデートなんだから、もっと笑ってて欲しいって思うんだけど？」

「あ、ああ。そうだな。ごめん……………」

「いいよ。あ、ほら。列進んだ。前に進も？」

「お、おう」

涼に言われ前に進む。確かに、せつかく涼が誘ってくれたんだし、楽しまないと損だよな。よし！

「涼？なんか食べたいもんあるか？ついでに買ってやるよ」

「いいの？凧君太っ腹。じゃあポップコーンのキャラメル味とオレンジジュースね？」

「りょーかい！」

列が進むのを待ちながらも涼と話をする。たわいもない話だけど、2人の事で悩んでる俺からすれば凄く考える事を紛らわせるのに近い感じになった。

「ふう、楽しかった。まさかあんな展開になるとはね〜?」
「そうだな〜」

映画の内容として、好き同士だった2人のうちの男が遠くに離れる事になるから、2人の気持ちはそつと胸の中にしまうつもりだったのが、友達に勇気を押ししてもらい、男が好きな女の子に告白して、付き合い始めるといふ話になるとは。人気だから分かっていただけ、結構面白かった。感動もした。

「そろそろ昼か。涼、お昼どうする?」

「あ、それなら私弁当作ってきたから。それ一緒に食べよう」

「おう。つて、お前昨日俺の家族と泊りがけでどこか行ってたんだろ?よく、弁当なんて作れたな」

「あ、うん。帰りの車の中で寝たし、朝早くに帰ってきたから」

「ふーん。まあいいや。どこで食べる?」

「じゃあ、いつもの公園で」

「またかよ。まあいいけどさ」

涼に手を差し出すと、涼は少し驚いたがすぐに笑って俺の手を握り返してきた。

「な、なんだよ?」

「ううん、まさか風君の方から手出してくるなんて思わなかったからべ、別にいいだろ」

「うん。私は嬉しいよ〜」

またゆつくりと歩いて、いつもの公園に向かう。今度も涼はずっと俺に話を振ってくれていた。

「ふうー、着いた」

「そうだな。暑いし、日かげで食べようぜ」

「うん。そうだね〜」

影のあるところに向かい、涼はカバンからレジヤーシートを取り出す。

「持ってきてたのか。じゃあ、俺飲み物買ってくるから」

「あ、大丈夫。水筒持ってきてるから」

「……本当用意周到だな。じゃあ食べるか」

レジャーシートに2人で並んで座り、涼はカバンから弁当を取り出す。

「へえ、結構作ってきたんだな。大変だったんじゃないかな？」

「まあ、それなりにね。でも味は保証できるよ」

「……なんで？」

「咲に味見してもらったから」

「感想は？」

「美味しいって。『これでお兄ちゃんも風さんの手でイチコロですね！』だって？」

「俺はそう簡単に落とされませんよ、と。じゃあいただきます」

たくさん作ってある中のおかずは、最初に卵焼きに目をつけてそれを口にする。

「……………うまいな」

「でしょ？私、風君の好きなものなんでも知ってるんだよ」

「さすが涼。お前は料理できない系の女子だと思ってたのに」

「ひどい。でも、そんなことないってわかったでしょ？」

「まあな。本当に美味しいよ」

「ふふつ、ありがと……………ねえ、風君？」

「ん？どうした？」

「春と小咲さんの事で何があったのか教えてくれない？」

続けて卵焼きを掴もうとしたはしが止まる。

「……………どうして？」

「風君、私が指摘してから、指摘する前よりは笑ってくれたけど、明らかに無理して笑ってたよ。気づいてなかっただろうけど」

「……………本当に涼はなんでもわかるのな」

「分かるよ。幼馴染だもん」

「そうか。……………そうだな。幼馴染だもんな」

「うん」

さつきまで明るく振舞っていた涼の顔が一転して、いつもと違い真

剣な表情で俺を見てくれている。

「……………ごめん、話せない」

「どうして?」

「だって……………」

これを話したら、俺は最低な人間だと思われてしまうかもしれないから。

「……………ごめん」

「……………そっか。でもね、私はいつでも風君の味方なんだよ?たとえ誰がなんと言おうと。風君の悩んでる事で、世界の誰もが、風君も攻めたとしても、私は風君の味方で居続けるよ?」

「……………風……………」

名前で呼んでと言われたの忘れ、いつもの呼び方で呼んでしまう。

本当に俺の事をなんでも理解してるのか。いつもは俺の事をからかって、それを見て笑って。いつでもニコニコと笑顔を絶やさない風は今、真剣な表情で俺の味方になると言ってくれている。だから、俺は気になった。どうしても気になってしまった。

「風、どうして……………どうしてそんなに俺の事を?」

聞いてしまった。でも仕方ない。こんな事言われて気にならない奴がいるわけがない。

「だって……………私、風君の事好きだから」

「……………え?」

「好きだから。風君が。小学校の頃からずっと」

突然の告白。いつもなら、ニコニコしながら『私、風君の事好きだよ』と冗談半分で言ってくるのに、今は違う。顔を赤くして、俺の頬に手をやってそう言ってきた。冗談だ。これはいつもの冗談に決まっている。

「……………や、何言ってるんだよ。どうせいつもの冗談なんだろう?風。それに俺はお前の事」

「……………風君は今の私がしてる事、冗談に見えるの?」

「うつ……………」

どうすればいい。咲やいつもの風のような感じで言ってくれるな

らいつものようにツツコミで返せばいい。でも、こんな突然の告白で俺はなんて返せば……………

「……………風君」

「え、あ、その……………俺は…風の事」

「幼馴染としか見れない？」

「な、なんで…」

「言ったでしょ？風君の考えてる事は私、なんでもお見通しなんだよ〜？」

「うつ……………」

「どうしよう。なんでもお見通しの風を俺はどうしたら……………」

「ねえ、風君？」

「は、はい!？」

「私と付き合ってよ〜」

「……………ええ!？」

何言いだすんだ。いや、告白したんだからそう思うのは当然だろうけど。

「私の事幼馴染としか見れない。それはわかったよ〜。じゃあさ、私と付き合って、その考えを変えてくれればいいんだよ〜」

「変えるって……………何を？」

「それはもちろん。私を彼女として、女として見ること、だよ〜？」

「ええ!？いや、そんな。俺は……………」

今まで幼馴染として俺と一緒にいてくれた風を女として見るなんて……………

「そんな事……………」

「そんな事できないかどうかは付き合ってみないとわからないよ〜？」

「うう……………」

「どうしよう。本当にどうしよう。昨日から一気にいろんな事起きすぎて、頭の中がついていけない。」

「……………風君」

「は、はい」

風は突然俺の手を握った。

「もしこの手を握り返したら私と付き合う。手を離すなら私と付き合いわない。これは風君と決めないといけない事だから、風君が決めて。私はどんな結果になっても風君を責めたりしないよ？」

私は目を閉じてるから風君は今ゆっくり考えて。あともう一回だけ。私は風君がどんなに悩んでも、どんなに辛くても風君の味方だから。

風は俺の顔を見てにつこり笑った後、目を閉じた。

どうしたらいい……………いや、答えはもう出てる。この手を離す事。俺は風とは付き合えない。だって俺は……………の事が好きだと昨日気づいたから。

「だけど……………」

この手を離し辛い。俺が悩んでいるのがわかっていて。その悩みを俺の事をなんでもわかる風はおそらく理解していて。そのうえであんな事を言うのだから。

『風君、一緒に帰ろう？』

『どうしよう風君、雨が降ってて帰れないよ』

『風君、明日公園で遊ぼう？理沙さんや咲も誘って』

小学校の頃の風との思い出が頭の中で蘇ってくる。なんでこんな時に……………

『風君、春ともどもよろしくね？』

『風君、私のこと好き？』

『私は好きだけどなく』

『…………じゃあ、もし私が幼馴染じゃなかったら風君は私に振り向いてくれたのかな？』

『風君へのスキンシップ』

『私は風君の味方で居続けるよ？』

『好きだから。風君が。小学校の頃からずっと』

なんで今になって風の事をこんなに思い出すんだ。風は俺の事を高校に入ってからはずっと好きって言ってたな。それを俺は本当にそうだと気づかなくて……………俺って鈍感なんだな。

「風……」

「なに〜」

風は目を閉じながらも返事をする

「その、ごめんな。俺鈍感だったんだな」

「そうだよ。やっと気づいたんだ。風君の鈍感」

「うっ……」

「でも、そんなところもわたしは好きなんだよ〜」

「そっか。じゃあもう1個。俺の悩み理解してるだろ？」

「そうだね〜。なにで悩んでるかは分かるよ〜」

「だよな……さすが俺の幼馴染」

悩みがあつてテンションが暗かった俺に風は………本当にずるいな、風は。

「本当にずるいよ、風は。もしかして、俺がこんな悩む状態になるのを狙ってた？」

「さあ、どうでしょう〜？」

「つたく、いつも通りすぎるな、風は」

俺の悩みは多分解消されないだろう。実際今でも風の事を恋愛的に好き、という風には捉えられない。風は俺の幼馴染だ。そして、俺が好きなのは………だ。

だけど、俺が悩んでるのを見て、理解して、感じて。そして俺を助けようとしてくれている。俺の悩みを理解した上で。俺が誰が好きなのか理解した上で、風は告白してきたんだ。

だから………

「風……いや、涼」

この暑い中ずっと握っててくれた手。その手を俺は………

握り返した。

「……………それが答えなんだね？」

風は瞑っていた目を開けて俺を見る。

「最初は手を離すつもりだったけどな。けど、俺がこんな状況の時に、あんな事言われたら流石に……………俺じゃなくて、どんな男でも心が揺れるんじゃないのか？」

「そうかもね……………わたし卑怯かも」

「けど、俺はそんな卑怯な手に負けてしまった。今でも俺が好きなのは……………だ」

「うん。わかってるよ」

「この先どうなるかはわからない。俺の気が変わるかもしれない、本当に風……………いや、涼に惚れるかもしれない」

「惚れるかも、じゃないよ？私が惚れさせるの」

「そっか。でもまあなんだ。とりあえずしばらくはよろしく」

「しばらくじゃない。永遠に、だよ」

「ははっ、そっか。頑張れよ。俺も少しはお前の事よく見てみるよ。鈍感なりにな」

「うん。鈍感なりに頑張ってね」

そう言うとなんだかおかしくなってプツと吹き出して笑ってしまふ。でもこの時わかった。俺今日ちゃんと笑えた事に。

「さっ、弁当食おうぜ。次はこのコロッケを」

「うん。それもきつと美味しいよ」

俺が今好きなのは……………だ。でもこれから付き合うのは涼だ。悩みが解決したわけじゃないし、この先どうなるかわからないけ

ど、とりあえず今は今の事を考えよう。そう思った。

第28話 オイワイしましよう

「ねえ、今日凧君の家に行つていい?」

「え、なんで?」

「いいからいいから。とにかくいこ」

「いつものごとく俺の意見は無視なのか……まあいいけど」

涼と付き合う事になったその日の帰り道。涼が突然俺の家に来る事に。まあ高校に入ってから何回かそういうことがあったし、幼馴染という事もあって咲も姉貴もそんな事は気にしない。

「……涼、お前何か企んでるだろ」

「なんのことう?」

「とぼけるなよ。俺とお前が付き合ったその日に俺の家に行くつて。何かあるんだろ?」

「それは家に着いてからのお楽しみ」

やっぱり何を考えてるのかわからない。俺鈍感なせいなのか? ……ともう家の前に。まあ入ればわかることか。

「ただい『パンツ!!』……へ?」

家のドアを開けるといきなり大きな音が響いた。一瞬何が起きたのかわからなかったが、何か飛んできたのと火薬の匂いがした事でそれがクラッカーだというのはすぐ理解した。

「おかえり、お兄ちゃん!」

「おかえり」

玄関の前に立っていたのは咲と姉貴。いつもは部屋かりビングにいるはずなのになんで今日に限って玄関の前で……

「んふふ。風さん、おめでとう!」

「ありがとう咲」

繋いでいた俺の手を離して抱き合う咲と涼。

「凧……いつまでそこに突っ立ってるの?」

「いや、その……これなに?」

「なにつて……お前と凧が付き合う事になったつて連絡きたから、咲がテンション上がつて、出迎えてあげようつてなったんだよ」

「そう！今日はめでたい日だからね！今日は腕によりをかけて私がご飯作ったの！早く上がって上がって」

咲に急かされてリビングの方へ上がる涼。それに続いて俺もイマイチ状況を理解しきれてないが、とりあえずついていく事にした。

「ちよつと待て、風」

「ん？」

と思ったが姉貴に呼ばれてそっちに振り向く。

「お前……本当にこれで良かったのか？」

「……何のことだ？」

「とぼけなくていい。私はお前が今悩んでる事も全部理解してるつもりだよ。だからこそ、聞く。お前は風と付き合う事になって良かったのか？」

姉貴が真剣な表情で俺を見てくる。姉貴には何から何までお見通しなのかな。

「……………本当に姉貴は涼と一緒に勘が鋭いよな」

「風、昔の呼び方に戻って」

「いいんだよ。今はこれで。俺は涼の口説きに負けたんだよ。なにやり……これで涼と付き合う事で今とは違う何かが見えるかもしれないしな」

俺は笑って姉貴にそう言った。

「……風がそれでいいなら私はなにも言わない。でも、ひとつだけ言っておく。私はお前の判断が正しいとは思えない」

「えっ？」

「勘違いするなよ？私は咲と同じで風を応援してる人間だ。だから、風とお前が付き合うならそれは嬉しいことだし、わたしも応援した甲斐があったと思っている。」

でもな、そういうのを関係なしに、お前の気持ちだけを考えると、それが正しいとは思えないって話だ。私はお前の周りにいる人間がお前の事をどう思ってるのかも大体理解してるからな」

小咲さんとか春とかと数回しか会ってないのにそんなことわかるとかこの人、本当に人間かよ。

「だからまあなんだ。私に言えるのはこれだけだ。お前が決めたことだ。自分でした事にはきつちり自分でケジメをつけろよ？ 私からはそれだけだ」

「……………サンキュー、姉貴」

「ああ。まあ今はそういうことは忘れて楽しもう。せつかく咲がご飯作ってくれたんだしな」

姉貴はポンと俺の肩を軽く叩いてそのままリビングへと向かった。俺も一瞬色々考えようとしたが、すぐにやめて姉貴の後ろをついていくようにリビングに向かった。

「では！お兄ちゃんと風さんが付き合ったよ、おめでどう会というこ
とで、かんぱーいー！」

「「かんぱーい」」

コップに注がれたお茶を4人で打ち合っつてそれを口に含む。うん、冷たくて美味しい。

「で、なんで咲と姉貴は俺が涼と付き合ったことを知ってるんだ？ 告白されて付き合おうと思っつてからそんなに時間経ってないのに、なんでこんな豪華な食事を作ることができたんだ？」

「あれ〜？お兄ちゃん昔の呼び方に戻ってる〜。やっぱり付き合い始めた効果かな？」

「質問に答えろ、咲」

「はーい。えつとね……………実は昨日お兄ちゃんには嘘をついておりました」

「嘘？」

「うん。私たち昨日泊りがけで温泉なんて行ってないの」

「はあ!？」

「本当は私とお姉ちゃんと風さんの3人で、お兄ちゃんにどう告白するかの話をしていたのです」

「……………マジ?」

「大マジだよ、風君」

俺騙されてたってこと?なにそれ。でもそう考えると今日の涼の弁当の事も納得がいく。いくら早く帰ったからといってもあれだけの食材を使った料理を短時間で作れるわけないし。

「ごめんねお兄ちゃん。騙してた事を考えると、私心が痛むよ。でもね……………最近お兄ちゃんの周りにドロボウ猫が2匹いるのを見ちゃってるから、ちよつと心が…………グへへ」

やばいやばい。なんか咲が悪に染まったみたいになってる。なにこの子。本当に俺の妹なの?

「告白するのは知ってたから、後はお昼のうちから私が料理を作ってたってた訳。風さんから連絡来た時は嬉しかったよ」

どこからかハンカチを取り出して、こぼれ出る涙を拭く咲。

……………ん、昼から?

「ちよつと待て。もし俺が風と付き合わなかったらこの料理どうするつもりだったんだ?」

「ん?それはもちろん。私の愛情のこもった料理だから、その愛をぜーんぶお兄ちゃんに受け取ってもらおうと」

「お前、この量の料理を全部俺に食べさせるつもりだったのか!!?」

「私の愛情をたっぷりこめた料理だからね」

理由になっていない。なに考えるんだこの妹は。

「ねえねえ風君」

「ん?どうした、涼」

「私たちが付き合ってる事、春たちには言うの?」

「んっ!!」

涼のいきなりの質問のせいで口に含んでいる料理を吹き出しそうになる。

「お前!いきなり!」

「でも、どうするか決めない」と」

「……確かに」

どうしよう。春や翔太。小咲さんや一条先輩言うべきなのかな……舞子先輩？あの人にバレたら即学校中に広がるから却下。

「どうしよう……でもいずればバレる事だろうしな」

「まあ、私と凧君ならいつも通りのスキンシップしてたら、なんだまたこの2人か、みたいな感じで一生バレなさそうだよ？」

「そのせいで俺はクラスの男子から嫌悪されてる気しかしないけどな」

林間学校の時から始まり、今ではクラス内でもあのような事をしてくる時がある。おかげで俺はクラスでは少し悪目立ちしている。

「……とりあえずは黙っておくか。涼もそれでいいか？」

「凧君が決めたならそれでいいよ。それで、さっき春からメール来てただけど」

「メール？なんて？」

「明日、小咲さんたち2年生が夏休みの宿題を終わらせる勉強会するんだって。春も誘われたから、良かったら一緒にしないって？」

「勉強会か。俺も全然宿題終わらせてないし。いいよ、別に」

「了解。返信しとくね」

勉強会か。そんなのするのいつぶりだろ。とりあえず明日バレないように行動するのを最優先に考えよう。

次の日

「いや、こうやってみんなが集まって宿題するのもいいものだな」

「こういう機会でもないよ、やる気起こらねえもんな」

学校の図書室の長机をつかい、みんなで教材を広げて勉強している。いるのは2年生でいつも一緒にいる人たちと俺と涼と春。翔太は今家族と旅行だそうでいけないらしい。

「なあ、す……………風。これどうやって解くんだ?」

隣にいる涼に数学でわからないところの問題を見せる。すると涼は近すぎず遠すぎずという距離でそれを教えてくれる。あまり近すぎると疑われるかもしれないし、昨日言ったことを守ってくれているようだ。

「えつとねく、これはここにこれを代入して……………」

「おお! 本当に解けた! サンキュー、風」

「いえいえく」

「むう……………」

「ん? どうした春?」

「別に! なんだか今日の風ちゃんと風は仲よさそうだなく、って思っただけ」

何故か機嫌を悪くしている春。それを見た涼はなにひらめいたのか。俺に話しかけてくる。

「ねえ、風君く。私ここわからないから教えてくれる?」

「ん? いいけど。どれ?」

「英語のこの問題く」

教材を近づけてくるとともに、涼がものすごく密着してくる。ちよ、距離近いんだけど!

「なっ!」

「……………!!」

「小咲? どうかしたの?」

「な、なんでもないよ、るりちゃん!」

変な事するから春と小咲さんまで驚いてる。

「なにになにく? なんか2人とも今日仲良いねく? もしかして、夏休み中に付き合ったりした?」

やっぱりこういう話しに突っ込んでくるのは舞子先輩だった。そ

の言葉にみんながこつちを向く。

「ち、違います!!俺と涼はなんでも!!」

『涼?』

「あ……………」

やっちまった。焦っていつもの呼び方じゃなくて昨日からの呼び方に変えてしまった。なにやってんだ俺……

「凧君……………これもう言い訳できないよ?」

本当になにしてるんだろ。まさか俺の方からボロを出すことになるとは。俺は大きなため息をついて言った。

「そうです……………俺黒崎凧は隣の風……………彩風涼と付き合うことになりました」

「え……………」

『ええええええええええええ!!??』

図書室だけでなく、学校中に広がると思えるような驚きの声が響き渡った。

「嘘だろ!?まじかよ、凧!」

「うわあ、これ大スクープ。今すぐ翔太に報告しないと」

「いつから?いつからの?」

「まさかカップル第1号は黒崎様になるとは。楽様、私たちも付き合いましたよ!!」

「つ、つつつ、付き合う?付き合うって?」

「……………おめでどう」

「……………」

あまりのことに驚く一条先輩。翔太に即報告しようとする舞子先輩。興味深々に聞いてくる桐崎先輩。いきなり一条先輩に飛びつく橘先輩。湯気が出そうなくらい顔を真っ赤にしている鶴先輩。ただ祝福の言葉をくれる宮本先輩。そして、その事で暗い顔をしている春と小咲さん。

「ちよ、ちよつと待っててください!……ここ図書室ですよ!!もう少し静かに!涼もなんか言ってる……………涼?」

涼は黙って違ふところを見ていた。視線の先は……………春だった。

「おい、涼。どうし『ねえねえ黒崎君、風ちゃん！色々話聞かせて！』ちよ、桐崎先輩!？」

桐崎先輩はあまりのことだったのか、机から身を乗り出して聞いてきた。

「ちよつと！話します、話しますから!!」

もう一度、春を見ようとすると、春は座っていた席からいなくなっていた。横を見ると小咲さんも。2人ともどこに行っただんだ？

「まあまあ落ち着いてください。ちゃんと話しますから」

今まで黙っていた涼がやっと桐崎先輩を止めてくれた。気のせいかな、と思うふと横を見ると、気のせいではなく、やっぱり2人の姿はなかった。

「じゃあ、まず。いつから付き合いはじめたの？」

「昨日ですよ」

桐崎先輩と涼が俺たちの事を話しているのは気にならず、いなくなっていた2人の事が気になった。2人は一体どこに行っただんだ？

春side

「お姉ちゃん!？」

風の突然の告白。びっくりして何も言えなくなったけど、お姉ちゃんが席を立って飛び出したのを見て、私も席を立った。

「風君！お姉ちゃんが!!」

風にお姉ちゃんが飛びしたのを知らせようとすると、風は桐崎さんやみんなに気を取られてこっちに気づいてなかった。

「……………もう!!」

風にもう一度声をかけようと思ったけど、お姉ちゃんを追う方が正しいと思い、私も飛び出したお姉ちゃんを追って廊下に出る。

「お姉ちゃん……………どこ行ったの?」

「春」

「あ、るりさん！お姉ちゃんが…………」

お姉ちゃんが飛びしたのを見て様子が気になったのか、るりさんも廊下に出ていた。

「説明するのは後。春は上の階を。私は下の階を探すから。見つけたらすぐ連絡しようだい」

「わ、わかりました!」

るりさんと別れて廊下を走りお姉ちゃんを探す。途中先生とすれ違って注意されたけど、それを無視して廊下を走る。

「お姉ちゃん!!」

教室は休みだから閉まっているから入れない。女子トイレや、更衣室など扉を開くところを片っ端から開けてお姉ちゃんを探す。

「いない……………どこ行ったの……………お姉ちゃん……………」

2階も3階探せるところは全部探したけどお姉ちゃんの姿はなかった。全力走ってたからか呼吸が辛くなる。

「後探してないところっていえば……………」

まさか外に出たなんてことはないと思うんだけど……………外?」

「屋上!」

3階からさらに階段を登り屋上を目指す。屋上の扉が開いてるは

ずがないのに、何故か扉は開いていた。

「お姉ちゃん？……………」

屋上に出て、周りを見渡すとお姉ちゃんの姿が。背中を向けていて顔は見えないけど、とりあえずるりさんに見つけた事をメールで報告して、お姉ちゃんに声をかけて近寄ろうとする。

「おねえ『なんでだろーね』え？」

「なんで2人は付き合ってたんだろ」

「お姉ちゃん……………」

お姉ちゃんはこちらを向かずに背中を向けたまま話しかける。

「喜ばしいことなのに。おめでどう！って言ってあげないといけないのに。素直に喜べないの。むしろ、悲しくて……………」

「うん……………私もなんでかわかんない」

前に風は言っていた。風ちゃんのこととは幼馴染としか見れないって。風ちゃんは風の好きなんじゃないのかなって思った。だから、告白されても絶対断ると思っていたのに。

「もしかしたら、春が風の事は好きって知ってたのに、私も好きになっちゃったから。バチが当たっちゃったのかな……………」

「そんな事!!」

「うん。そんな事ない。ただ単に風君が風ちゃんの事が好きにだったんだよね。だから2人は付き合ったの」

「……………」

「でも……………やっぱり悲しいね……………好きな人が他の子と付き合っちゃうのって。私もう2回目だよ。1回目は違うってわかったけど」

一条先輩と桐崎さんの事だ。すぐにわかった。あの2人は嘘の恋人同士だというのは私も知ってる。夏祭りの時に偶然聞いちゃったから。

「なんでだろ……………一条君の時は……………涙なんて出なかったのに……………なんでだろ……………」

「お姉ちゃん……………」

「どうしよう……………涙……………止まらない……………」

「お姉ちゃん!!」

お姉ちゃんはこっちに振り向いた。その顔は涙でいっぱいになっていた。そんなお姉ちゃんを見て、私はお姉ちゃんに抱きつく。

「春……ごめんね、ダメなお姉ちゃんです」

「ううん……ダメじゃないよ。私も悲しいから。悲しくてせつなくて……慰めないといけないのに、そうできないの……」

お姉ちゃんの胸のところに顔をうずめて涙を流す。お姉ちゃんの服が涙で濡れちゃう。止めないといけないのに止められない。これが失恋って事なんだ。

「そうだよね……私も……同じだから」

2人で抱きしめあって、お互いに涙を流した。

「みんな心配してるかもだけど……今はいいよね」

しばらくはその場で2人で泣きあつた。お互いに身体を抱きしめ合いながら、思いつきり泣いた。

「もう大丈夫。ありがとう、お姉ちゃん」

「ううん、私こそ。ごめんね、春」

何分経ったかわからないけど、涙が止まってお姉ちゃんから身体を離す。

「……………あ、ごめん。お姉ちゃん。涙で服がびしょびしょに……」

「あ、ううん。いいの。わたしの方が少し背高いからそのせいだよ」

あはは、と元気のない笑顔を私に浮かべるお姉ちゃん。

「小咲、春」

後ろから名前を呼ばれて振り向くと、るりさんがペットボトル持って立っていた。

「はいこれ。さつき自販機で買ったの。これ飲んで落ち着いて」

「ありがとう、るりちゃん」

「ありがとうございます」

「気にしないでいいわよ。それより小咲……正座」

「えっ?」

「説明してくれる?」

「うっ……………」

お姉ちゃんはその場で正座をしてるりさんを見る。

るりさんは中学の頃から一条先輩の事が好きだったお姉ちゃんの事を知ってる。でも勘のいいるりさんの事だ。きつと今の事で何が起こったのか大体理解してると思う。

「話してくれるわよね?小咲?」

「はい……………」

……………なんだからりさんの後ろから修羅の姿が見える。気のせいかな?」

「黙っててごめんなさい。私一条君じゃなくて、凧君の事を好きになっちゃったの」

「ええ、それはわかってる。いつからなの?」

「凧君の事好きだって気づいたのは、夏祭りの時に。先に行った春を探してる途中で色々あって……………」

「え、その時だったからなの!?!」

お姉ちゃんと凧が迷子になった時に私は一条先輩に助けてもらったけど、私がない間に一体何が……………」

「それで?」

「その時はまだ一条君と凧君の事両方好きだったんだけど……………この前凧君と春と3人で水族館に行った時にイルカショーがあって、その時にも凧君と色々あって、それから凧君の事しか考えられなくなっちゃって」

また私がない時に。あの時はジュース買いに行ってから気づいたら見た事ないとこにいて。あの時助けてくれた人誰だったんだろ。

「へえ……………」

「あの、るりちゃん、怒ってる?」

「別に。私が散々あなたに一条君へのアプローチ考えたのを無駄にして、それだけではなく、一条君じゃなくて、他の子を好きになったことなんて全然怒ってないわよ?」

るりさん、絶対怒ってる。

「……………はあ。まあ、あなたが黒崎君に2度も助けられた事を聞いた時から、そうなる事があるかも、とは思ったけど」

「えっ!？」

「まさか予想通りになるなんて」

るりさんすごい……………改めてそう思った。

「でもまさか、その恋のライバルが……………春だったとはね?」

「うう……………ごめん、春」

「いや、私は別に風の事……………」

……………いや、もうここまでくるとバレてる嘘もつくような必要もないよね。るりさんもいる事だし。

「まあ、そうですね……………でも、いいよ。誰が人を好きになるなんてその人次第なんだし」

「春……………」

「それに、私はまだ諦めたわけじゃないし」

「えっ?」

「そうなの、春?」

「はい。前に風が自分で言ってたんですよ。風ちゃんの事は幼馴染としか見れないって。でも、あの2人はなんでか付き合った」

「黒崎君の心が変わったとか、そういう事は考えられないの?」

買ったのわからないですけど。もしかしたら何か理由があるからかもしれないじゃないですか。だから、私は諦めません」

これで諦めてたら意味ないし。私は風ちゃんから風を奪ってみせる……………ってなんか私悪者みたい……………

「春……………」

「あなたの妹はこう言ってるけど、あなたはどうするの、小咲?」

「……………私は……………私も諦めない。だって私も風君の事好きだもん。ここで私が諦めたら、ここまで応援してくれたるりちゃんに悪いし」

「そう思うのなら、今まで通り一条君の事好きでいてくれないかしら？」

「えっ!!」

「冗談よ」

私からしたらライバルが減るからありがたいんだけど……やっぱダメなんだ。

「と、とにかく！私も諦めないよ！」

「お姉ちゃん……」

「はあ……あの男も大変ね」

諦めるつもりだったけどやっぱり諦めきれない。私、風の事好きだもん！お姉ちゃんがライバルになるとしても、絶対諦めないんだから。

「それで、今日はどうするの？勉強会、続けるの？」

その問いかけに私とお姉ちゃんは顔を見合わせて、2人で頷いて答える。

「もちろん！」

「そう。じゃあ私は行くわ。みんな心配してるだろうし」

「あ、じゃあ、私も！」

「お姉ちゃん！」

立ち上がって図書室に戻ろうとするお姉ちゃんを引き止めた。お姉ちゃんは何？みたいな顔をしていた。でも、これだけは伝えとかないといけない。だって風ちゃんだけじゃなく、お姉ちゃん……

「私、負けないから!!」

お姉ちゃんは、私の初めての恋のライバルだから!!

第30話 オミマイへ行く

「え、一条先輩が盲腸？」

「そうなんだって。だから明日お見舞い行かない？」

もう夏休みも終わりに近づいてる頃。バイトの休憩中に俺と春は2人で夏休みの宿題を消化していた。てか、盲腸って……あの人不運だな。確か2年生組で海に行こうって話してたはずなのに、その様子じゃ無理だろう。

「ん？別にいいぞ。てか、行かないとあの人が拗ねるかもだし」

「あはは、そんな事ないよ。じゃあ、その……ふ、2人でどうかな？このバイト終わってからとか」

「なんで2人なんだ？涼とか誘おうぜ」

「……………はあ」

「え、なんで俺ため息つかれたんだ？意味わからないんだけど」
理不尽すぎるため息だ。

「相変わらずだね。いいじゃん。別に2人でも」

「いや、でも涼が怒るかもだし」

「……………そっか。じゃあ仕方ないか」

（やっぱり風は風ちゃんのこと……ううん、こんな事で諦めてられない！）

「じゃあお姉ちゃんも誘っとくね」

「ああ、了解。でさ、この英語の問題なんだけど……」

「どれどれ……………正面からじゃ見にくい。隣行ってもいい？」

「え、あ、うん。いいけど」

「ありがと」

春は席を立ち上がって俺の隣の席に座る。

「えつと〜」

必死に考えている春。てか、なんか距離近くない。意識しちゃうんだけど。自然と顔が赤くなる。

「これは未来系の文章だから、助動詞を……って聞いている？」

「え？聞いているぞ？」

「……もしかして？」

春は俺の異変に気付いたのか。近かった体をさらに近づいてきた。

「春、ちょ、近い！」

「だってこれ英語なんだもん。単語見にくいからさ。もっと近づかないと教えにくいし」

「だ、だけど！」

近すぎて教えてくれることが頭の中に入ってこない。この状況、誰か助けて！電話でもいいから!!

「春ー、風君ー、そろそろ休憩終わ……り……？」

誰か助けてとは言ったけどなんでこの状況の時に小咲さんが入ってくるんだ。タイミング悪すぎる……

「は、春！何してるの!?!」

「風に英語教えてたの。これくらい近づかないと単語小さくて見にくくて」

「………春、なんで英語見えない今も身体を寄せてきてるんだ？」

あはは、と笑いながらも春はさらに身体を寄せてくる。今バイトの服だといえど緊張するから！流石に緊張するから!!

「むう………」

「あれ？小咲さん？なんでそんなに顔膨らませてるんですか？」

「な、なんでもない！」

何故か小咲さんは俺の顔をじっと見て顔を膨らませていた。

「でも……フグみたいですね。可愛いですよ」

「か、かわつ!?!と、とにかくそういうことだからすぐ来てね！」

「な、なんだ？」

顔真っ赤にして走って行った。

「風って絶対天然の女たらしだよね」

「え、なんで？」

「無自覚なのがまた酷い……」

はあ、とため息を吐いて立ち上がる。

「さっ、そういうことだから早く行こ」

「お、おう」

天然の女たらしってどういうことだ?……てか、結局英語の問題わ
からないままなんだけど……

バイトが終わってそのまま病院へと向かう俺たち。俺たちの前を
小咲さんと春が仲よさげに話しながら歩いている。

「涼、もう少し離れて歩いてくれ。てか腕に抱きつくな」

「なんで?付き合ってるんだしこのくらい」

「周りの人がこっち見てるし恥ずかしいから!」

「じゃあ周りを見なかったらいいんだよ」

「んなことできるか!!」

「しかたないな」

いつものようにニコニコしながら腕を離す涼。ショックなのか、か
らかっているのかどっちかわからない。

「にしても、小咲さんは1人で行かなくて良かったんですか?」

「え、なんで?」

小咲さんに声をかけるとこっちに振り向いて不思議そうな顔をす
る。

「だって、そっちの方が一条先輩にアプローチできるんじゃないです
か」

「……………」

「あれ、なんでそんなジト目で俺を見てるんですか?てか、なんで春も
?」

姉妹揃って2人にジト目で見つめられてしまう。俺なんか悪いこ
とやったわけ?

「相変わらずだね、凧君」

「相変わらずってなんだよ、涼」

「まあ、そっちの方が風君らしいけど」

相変わらず？なんのことかさっぱりだ。

「……………この前自分で気づいたのに」

「ん？なんか言ったか？」

「ううん、なんでもないよ」

「そ、それより風！今日お見舞い行ったら宿題の続きだからね！」

「げっ、今日はもういいじゃん。バイトもして疲れてるんだし」

「ダメ！もうすぐ夏休みも終わるんだから今のうちに終わらせとかないと最終日苦労するよ！」

なんか春が俺のお母さんみたい。母親は仕事で忙しいからそういうこと言う人はいつものならないのに。

「どっちかって言うと春は風君の彼女みたいだね。風君の心配をする」

「か、かの!!？」

「涼、ナチュラルに心読むな」

しかもそれが当たってるのがまた怖い。春は彼女って言葉に顔を真っ赤にしてるし。てか、この反応……………

「……………んなことないよな」

「もう風ちゃん！変なこと言わないで！大体今の風の彼女は風ちゃんでしょ！」

「私は春のことも好きだから、貰い手がいなかったら私が貰ってあげるよ？そしたら、私と風君と3人で暮らせるよ？」

「まさかの一夫多妻制!?確かにそれはありかもしれない…………」

「風君からも許可出たよ？」

「な、風とく、暮らすなんて…………」

春はさらに顔を真っ赤になる。もうリンゴみたいだ。正直に言う。可愛い。もうなんとも見てる姿かもしれないけどそれでも言う。可愛い。

「もう、風ちゃん！からかわないで！」

「ごめんごめん。春があんまりにも可愛いから」

うふふと笑いながら顔を真っ赤にして怒る春の顔をどこからか取り出したデジカメラで撮る涼。マジでどっから取り出したんだよ。

「……………病院着いたよ?」

今まで会話に参加してこなかった小咲さんがボソツと呟く。あれ、なんか少し機嫌悪そう。

「一条先輩の病室は……………ここか」

エレベーターで上の階に行き、廊下を歩くと一条先輩の名前が書いてある病室を見つけた。ドアをノックして中に入る。

「失礼します。一条先輩、元気ですか?」

「たまたま近くに来たので……………お邪魔します、先輩」

「失礼します」

俺、春、涼、小咲さんの順で病室に入る。というか、こんな大人数がいっぺんにお見舞いに来たら迷惑だったかな?

「今度は風か。それに風ちゃんと言ちゃんに……………小野……………あいだだだだ!!」

「こ、こんにちは……………って大丈夫!」

小咲さんの姿を見た瞬間驚いて、お腹を抑える。盲腸って大変なんだな。

「……………きてくれたのか、小野寺」

「うん。千棘ちゃんが教えてくれて」

改めて小咲さんを見るも今度は安心したのか、嬉しかったのか頬を緩ませた。この人本当に小咲さんラブだな。

「あ、そうだ。りんご食べる?持ってきたの」

「……………不本意ですが、私も剥いてあげます」

「じゃあ私も」

「いや、ちよつと待って。一応この人病人だから。そんなにいっぱい食べさせるのはダメだと思う」

いきなりりんごと果物ナイフを取り出してりんごの皮を剥こうとする3人。

「って話聞いてないし」

小咲さんも春も涼も俺の話の間はずにりんごの皮を剥いていく。

一条先輩はそれを見て少しギョツとしてる。一気に3つも食べたなら流石にやばいんじゃないか……ていうかこれ一条先輩ハーレムじゃん。「あ、ちなみに私は凧君のために皮剥いてるので一条先輩は小咲さんと春のを食べてくださいね」

「え？あ、おう」

「ちよつと待て！お前それなんのために持ってきたんだよ！」

「凧君に食べてもらうために」

「せめて嘘でも一条先輩のためについて言えよ」

「というか、一条先輩本人がいる前で俺のために皮剥くなよ。バカツプルみてえじゃん。」

「むう……」

「あの、なんで2人は俺のこと睨んでるんですか？」

りんごの皮を剥きながら俺のことをじつと睨む小咲さんと春。

「よし、剥けた。はい、凧君」

「……………いやちよつと待て。せめて八つ切りにするとかしろよ。なんで丸ごとなんだよ」

「凧君はそのまま食べるのが好きかなって思ってた」

「いつ誰がそんなこと言ったんだよ……………まあ、いいや」

涼から渡されたりんごを受け取り、それをかじる。

「おいしい？」

「ん。まあうまいな」

「よかった」

うまいけど、手がベトベトになる。ティッシュ持ってたかな？

「凧」

「ん？」

「あーん」

「……………はい？」

いきなり春が八つ切りにしたりんごの一切れに爪楊枝を刺して俺の口の方に持ってくる。え、なにこれ？

「食べて」

「あ、そういうこと。じゃあ……」

爪楊枝の刺さったりりんごを取ろうとすると、春はその手を開いてる片方の手で止めた。

「あーん、って言ってるんだからそのまま口開けてよ」

「いや、それは……」

流石に恥ずかしいし、何より涼がいる前でそれはやめてほしい。

「いいよね、風ちゃん？」

「ん〜……まあそれくらいなら〜」

「だって」

許可していいのか!? それ!

「まあ涼がいいなら……」

そのまま口を開けてりんごを食べる。

「おいしい?」

「……さつきとあんまり変わらないけど、まあうまいな」

「ならよかった」

……なんだこれ? 結局春はなにがしたかったんだ?

「凧君」

「はい?」

「あーん」

「今度は小咲さんですか……ええ!?!」

今度は小咲さんがウサギの形に切ったりんごを俺に一切れ向けてくる。なんで小咲さんが!?!というか一条先輩。そんな悲しいような目で俺をみないでください。俺なんも悪いことしてないですから!

「こ、小咲さん。そういう事は一条先輩に」

俺がそう言うとな一条先輩は顔を輝かせて、うんうん、と頷き始めた。

「え、いや、その……春もやったし、私もやってみていいかな? っと思ってる」

「いや、答えになってないですよそれ」

一条先輩には恥ずかしすぎてできないとかそんなところか? 涼を見ると、別にいいよ〜、みたいな顔でこっちをみていた。

「まあ、悪い気はしませんし、せっかくですので」

向けられたりんごをそのままかじる。うん、やっぱりさつきと変わ

らずおいしい。

「どう……かな？」

「おいしいですよ。ありがとうございます」

「うんー」

小咲さんにはにつこり笑った。こんな笑顔と行動を一条先輩に常にできたら、付き合うのもできそうなのに。

「じゃあそろそろ行こっか、凧。あんまり長くいると一条先輩にも悪いし」

「そうだな……先輩。早く治して元気になってくださいね」

「……………おう。サンキューな、みんな」

そんなに小咲さんにあーんしてもらえなかったのがショックだったのか。今すごい暗い顔してるよこの人。

「げ、元気出してくださいね。それではまた」

「バイバイ、一条君」

「さようならです、一条先輩」

「失礼します」

それぞれ一言言ってから病室を出て、そのまま病院を出る。

「さて、じゃあ帰るか」

一息ついて俺一人違う方向から帰ろうとすると、グツ、と誰かに腕を掴まれた。

「なに帰ろうとしてるの？今日は宿題するんだよ？」

「いや、今日は……そう！俺が晩飯当番だから」

「今日の夜ご飯の当番は理沙さんだよね？」

涼。お前だけは俺の味方だと思ったのに、こんなに簡単に裏切るのか？

「嘘ついちゃダメだよ凧」

「そうだよ、凧君。溜め込むのはよくないよ？」

「いやでも……」

涼に助けると視線を送るが、みてないふりをしてるのか、俺とは違う方を見ている。

「……はあ。お姉ちゃん、ちよつと来て」

「ん？どうしたの春？」

春が小咲さんに耳打ちをして何かを話している。

「……………え!?ここで!？」

「そう。お姉ちゃんなら大丈夫だから！なぎのためだとおもって。ね？」

「う、うん」

話が終わったのか、春と小咲さんは俺の方を向く。

「凧君……」

「は、はい？」

「えと、その……私が勉強付きっ切りで教えてあげる。だから……………」

「え？」

小咲さんが、俺に、勉強を、付きっ切りで、教えてくれる……………？なにそれ、どんなご褒美より嬉しいかも。

「だから、その……………私と一緒に勉強、しよ？」

首を傾げて、両方の手を合わせモジモジしながら、言う小咲さん。恥ずかしいのか若干顔を赤らめてるのがまた可愛い。

「わかりました!!」

こんな頼まれ方して断る奴はいない。俺は返事とともに小咲さんの手を取りそのまま歩き出した。

「え、ちよ、ちよっと凧君!？」

俺はそのまま小咲さんの家へと向かった。……………と言うか、さっきの病室での出来事は一体何だったんだろう……………まあまた後で考えればいいか。

第31話 ヒサビサの兄妹喧嘩

夏休みも終わり、新学期が始まった。あれから夏休みの宿題も無事に終わり、一条先輩も盲腸を無事に治して新学期を迎えることができた。

「今日新しい先生が来たの。で、その人が一条君の幼馴染なんだって」

「へえ、その人美人なの、お姉ちゃん？」

相変わらず俺は『おのでら』でバイトを続けている。春とも小咲さんとも色々あったけど、このバイトは好きなのでなんだかんだで続けている。

「うん。凄く美人な人だよ。しかも、凄く授業が上手なの。色々飛び級してたんだって。あ、でも一条君とは二つしか歳違わないって言うた」

「へえ、どんな人なんだろ。私も会ってみたいな」

「俺も会ってみたいですね。小咲さんの新たなライバル登場なんじゃないんですか？」

「そんなんじゃないよ。もう、凧君は何かと一条君の事を私と結びつけて。それに羽先生は先生なんだよ。そんなことあるわけないよ」
「……それもそうですね」

でも、もしその先生が一条先輩の事好きだったら………それこそ最大のライバル登場なんじゃないのか？

「にしても、今日も暇だね」

「そうですね……あ、せっかくですから俺がこの前作った和菓子。また作ってみたくて食べてみてくださいよ。この前何故か知らないですけど、小咲さん、食べてくれなかったじゃないですか」

「あ………うん、ちよつと色々あって。じゃあもうおうかな？」

「はい。じゃあこれどうぞ。春も食べる？」

「うん！食べる食べる！」

用意していた和菓子を小咲さんも春に渡す。2人はそれを素手で口に入れた。

「うーん！やっぱり美味しいね」

「うん。美味しいよ。でももうちよつと栗の良さを活かせたらいいんじゃないかな？」

「栗の良さ……ですか。わかりました。また作るときに試してみます。にしても、そんな細かな味がわかるのになんで料理できないんですか？」

「それは私もなんでか。というか、前にもこんな話春としたような……」

変なもの入れたりとかしない限り、味音痴ではない小咲さんが作っても変なものできないはずなだけだ。

「………そういえば、小咲さんの好きな食べ物ってなんですか？」

「好きな食べ物？私の？」

「はい。聞いた事ないなって思って。春は和菓子が好きって知ってるのに」

「うーん……私も和菓子は好きだけど、一番好きなのはやっぱり大学いもかな？」

「大学いもですか？作った事ないですね……」

大学いも。確か咲も好きだった気がするけど………買ってくることはあつたけど、作ったことはない。

「うん。美味しいんだよ、大学いも！」

「そ、そうなんですか」

小咲さんが目をキラキラさせて言うてくる。これはあれなのかな？作れるなら作って来て欲しいみたいだ。

「うーん……じゃあ次バイトの時に作って来ますね。せつかくですから、いつもお世話になってるお返しに」

「えっ!?ホント!？」

「はい。味は期待しないでくれるとありがたいですけど」

「風君が作るんだもん！きつと美味しいよ。ね、春？」

「うん……そうだねお姉ちゃん」

あれ、なんか春が不安そうな顔をしている。私には作って来てくれないのかな、みたいな顔をしてる。

「……………心配しなくても春にも作ってくるよ」

「ほんと?!?ありがとう風」

「ああ。期待はしないでくれな」

「大丈夫! 風ならきつと美味しいのがつくれるよ!」

「だいたいんだけど」

次のバイトは2日後。時間は少ないけど、なるべく美味しいのをつくれるように頑張らないと。

「さて。とりあえず材料は買って来たけど」

「どうやって作るんだろう。まずはネットで作り方を参考にしない
と……」

「あれ、お兄ちゃん? 何してるの?」

「咲か? ちよつと大学いも作ろうかなって思つて。それを調べてた」

「大学いも!?! もしかして私のために!?!」

「ん? まあ、そうだな。咲も大学いも好きだし、良かったら味見してくれるか?」

「もちろんだよー!! お兄ちゃん大好き!!」

「そう言つて春は俺に抱きついてくる。本当に好きなんだな。大学いも。」

「はいはい、わかったから。とりあえずそんなにくつついてたら作れないから、少し離れてくれるか?」

「はいー!」

咲は俺から離れてニコニコしている。かわいいな……こんなニコニコの笑顔できるんだから、咲つてもしかしたらモテるんじゃないのか?」

「なあ、咲?」

「なに? お兄ちゃん?」

「お前って告白とかされたことあるのか?」

「告白? うん。何回かあるよ。私以外とモテるんだ。新学期始まった初日にもされたし」

「え……………」

びっくりして持っていたサツマイモを危うく落としそうになる。

「マジ?」

「うん。でもなんで?……………あ、もしかしてお兄ちゃん私の将来の心配してくれてるの? お兄ちゃん、やっぱり優しいな」

作業を続けながら咲の話を聞く。てか、どれだけ俺のこと好きなんだよ。この妹は。

「ちなみに、付き合ったりは?……………ってないか。お前俺にゾツコンだもんな」

「うん。告白されても、無理だって断ってる」

「へえ、なんて?」

「私には将来結婚する予定の大好きなお兄ちゃんがいるから無理だつて」

「はあ!? って危なっ!」

今度は包丁で指を切りそうになる。てかなんて断りしてんだよ。

「お前、それ完璧ブラコンだと思われてるだろ」

「うん。もう学校中に広まってるかも」

「……………俺、お前の将来が心配なってきた」

「大丈夫だよ。私はお兄ちゃんとずっと一緒に暮らすから」

「いや、流石にそれは困る」

「どうして?……………あ、風さんとの営みは邪魔しないから心配しなくてもいいよ。なんたつて風さんはお兄ちゃんの彼女だもんね」

「そういう問題じゃねえよ!!俺が言ってるのはお前に男なんてできないんじゃないかって話だ!」

こんなブラコンなのなら絶対将来彼氏なんてできないんだろうな。どうにかして俺から離れさせないと。

「大丈夫だよー。私には将来に決めた風お兄ちゃんっていう彼氏がいるんだもん」

「彼氏じゃねえよ！お前は俺の妹だ！」

「妹だろうが家族だろうが愛はそれをすべき吹き飛ばすんだよ。だから大丈夫」

「大丈夫、じゃねえよ！法律上無理に決まってるだろ！」

「私は法律なんて城壁。ものともしないよ」

「どこの人間だ!!」

「黒崎家の末っ子です」

「知ってるわ!!」

あー、ダメだ。頭痛くなって来た。作業してるけど、こんな感じではないのかな？

「咲、俺のどこがいいんだよ」

「全部」

「即答かよ！」

「私の唯一のお兄ちゃんだもん」

「そうかい」

でも俺はこんなに愛されて実は幸せ者なのかもしれない。そう考えるとなんか嬉し。

「……………よし、こんなもんかな？」

「うわー、美味しそう!!」

「味見してくれるか？」

「もちろん!!」

咲は箸で大学いもを一つ掴み口に入れる。

「あつっ……………美味しい!!」

「本当か？」

「うん！これなら風さんもきつとイチコロだよ!!」

「ん？これ涼のために作ってるんじゃないぞ？」

「え、じゃあ誰のため？」

「小咲さんと春」

2人の名前はあげると咲は固まった。そして数秒経った後に俺に

質問してくる。

「……………なんで？」

「なんでって、バイトでいつもお世話になってるから」

「いや、彼女の風さんには作らなくて、バイトで同じの小野寺さんたちに作るの？」

「ん、まあ、そうなるな」

そう言うとき咲はあからさまに不機嫌になった。見てわかる。絶対こいつ怒ってる。そういえば、咲って小咲さんの事敵対視してるんだっけ。

「私そんなの絶対認めないよ!!せめて、風さんにもこれ作ってあげないとお兄ちゃんと絶交する!!」

「はあ?」

さつきまでお兄ちゃん大好き!とか言ってた人間がいきなりの変わりようで驚く。絶交って……

「いや、なんでそうなる」

「風さんはお兄ちゃんの彼女なんだよ!それを差し置いて小野寺さんたちに作るなんて私認めない!!」

「いや、涼には別のものあげればいいじゃん。あいつの1番の好物」

私にとって1番の好物は風君だよ、とかあいつなら言いそうだけど。

「ダメ!絶対ダメ!」

「なんでそんなに怒るんだよ」

「そりゃ怒るよ!いくらお兄ちゃんでも怒る!」

「いや、意味わかんねえ」

「意味わからないのはこっちだよ!お兄ちゃんのバカ!」

その言葉に俺もカチンときてしまった。咲の言うことも一理あるのは理解できるけど、それでも何故かカチンときた。

「バカってなんだよ!いいだろ別に俺が誰に何を作ろうとかなんて!」

「ダメ!お兄ちゃんは風さんのことを1番に考えてあげないといけないの!」

「意味わかんねえ。涼には違うもの作ってあげればいいって言ってるじゃねえか」

「お兄ちゃんは何もわかってない!!」

「何がだよ!確かに咲が言ってることもわかるぞ。涼に何か作らないと不公平だもんな。でも、今回はあの2人に作ってあげるってだけじゃねえか!」

「風さんはお兄ちゃんの事好きなんだよ!一番に考えて欲しいって思ってるはずだよ!だから絶対そうするべき!」

「でも、どうするかは俺が決める事だろ!」

「そういう事じゃないの!なんでわからないの!!」

「そつちこそなんで理解してくれないんだよ!俺の自由にさせろよ!」

「つっ!.....もういい!お兄ちゃんのをわからず屋!鈍感!バカー!!!」

咲は俺を突き飛ばすとそのまま走って台所を出て行った。なんだよそれ!.....どうするかなんて俺が決める事だろ。

「.....どうかしたか?さつき咲が泣いて自分の部屋に入ってたけど」

咲と入れ違いになるように姉貴が台所に入ってきた。姉貴は冷蔵庫の中に入ってるジュースをとって俺の前までやってきた。

「いや.....なんでもない。ちよつと言い争いになっただけだ」

「ふーん.....まあいいけど。面倒なことにはするなよ。てか私を巻き込むなよ?」

「ああ。わかってる」

そういえば咲と喧嘩なんてするのいつぶりだろ。もうずいぶん前のことだった気がする。

「.....それ一つ食べてもいいか?」

「ん?ああ。いいよ」

「.....うまいな。でももうちょい甘くてもいいんじゃないか?」

「そうかな?アドバイスありがとう」

「ん.....風」

「なに？」

「お前は今悩んでることは知ってるけど、それを咲にぶつけるなんて事するなよ」

「いや、俺別にそんな事してない」

「してないはずだ。確かに今の彼女は涼だけど、お世話になってる人にこうして何かを作るのは悪い事じゃないはずだ。」

「お前がそう思っても、周りがどう思うかなんてものは違うだろ？少なくとも咲はショックを受けた」

「違う！あれは咲が！」

「そうやって人のせいにするのもやめろ」

「うっ……………」

「なんで姉貴は咲の味方をするんだよ。俺も悪いところあったかもだけど、あいつも悪いところがあつたはずなのに。」

「とにかく早く仲直りしろよ。私はもう寝るから」

「ああ」

「姉貴はそう言って台所を出て行った。いいじゃねえか。俺が誰になにを作ったって。」

2日後

「はい、小咲さん、春。これ約束の大学いもです」

「2日後。姉貴にもらったアドバイスを参考にして作った大学いもを2人に渡す。」

「わく、ありがとう風君！」

「ありがとう風！食べてみていいかな？」

「おう。大丈夫だぞ」

そう言うと2人は顔を輝かせてタッパーの蓋をあける。

「美味しそう!」

「いただきまーす」

2人は爪楊枝で一切れとってそれを口に入れる。

「ん〜、美味しい!!」

「ホントホント!初めて作ったとは思えない美味しさだよ、凧!」

「ありがとうございます」

結局あれから咲とは仲直りできていない。家で顔を合わせても咲が顔を背けて俺と話そうとしない。

「でもよかったです。2人の口にあって」

「うん。本当に美味しいもん!また作ってきてね?」

「はい、もちろんです」

小咲さんが食べるたびに幸せそうな顔をする。これだけ喜んでもらえたなら俺も嬉しい。でも……………

「あの、小咲さん、春。ちよつと聞いてもらってもいいですか?」

「ん?どうしたの?」

「実は……………ちよつと相談したいことが」

「凧が?私に力になれるならなんでも聞くよ!!」

「ありがとう春。実は……………」

話そうとするとお店の扉が開いた。どうやらお客さんが来たようだ。

「いらつしやいませー……………つて咲!」

「咲ちゃん!」

「確か凧の妹の?」

扉から入って来たのは凡矢里中学校の制服を来た咲だった。なんで……………?

「あの、小野寺さん」

「はい?」

「私と凧さんのお兄ちゃんを取らないでください!!お兄ちゃんは私と凧さんの物なんだから!!」

「は……………?」

「はあああああ
!!??」
「」

第32話 兄をアイスルあまり

「いや、いきなり入って来てなに言ってるんだ？てか、なんでここにいるんだよ」

「お兄ちゃんが今日バイトって言ってたからつけて来たの。そんなことより、私は小野寺先輩たちに話があるの！」

いきなり店に入って来てズカズカと小咲さんと春に迫る。2人は若干引いていた。

「小野寺先輩！」

「は、はい？」

「お兄ちゃんの事どう思ってるんですか？」

「え？」

「どう思ってるって？」

2人は意味がわからないという顔をしている。それはそうだろう。いきなり俺のことどう思ってるとか聞かれても答えられないだろう。

「もちろん、お兄ちゃんの事好きなんですか？」

こいついきなりなんてこと聞くんだ。だいたい2人が俺のこと好きなんてことあるわけがないのに。

「な、ななな風くんのこと、好きって？」

「べべべ別に私は、風のことなんてなんともし」

あれ、2人とも顔を真っ赤にして焦ってる。

「ほんとですか？怪しいです」

「た、確かに風は優しいし、気配りもできるし、頼りになるし、いい友達だよ？鈍感だけど」

「うん、春のいう通り。風君は私の命を2度も救ってくれた命の恩人だし、私のために色々してくれたりしてくれるいい後輩だよ？鈍感だけど」

あれ、なんだろう。すごくいい事言われて褒められてるはずなのにこの脱力感。2人にも鈍感って思われてたんだ……

「2人の言うとおりにお兄ちゃんは優しいし、頼りになります！鈍感だけど」

妹にも鈍感言われた。これ俺帰っていいかな？こんなにデイスラれて、帰っていいよな？確かにそれ事実だけど。

「でも！そんなお兄ちゃんのお優しさに2人はポロリと落ちたんじゃないですか？そして、風さんと付き合いだしたお兄ちゃんを奪い取ろうとしてるんじゃないんですか？」

「咲！そんな失礼なこと言うな！小咲さんも春もそんなことする人じゃない！ですよ、2人とも？……………ってなんでそんなに目そらしてるんですか」

明らかに俺と目を合わそうとしない2人。まさか本当に奪おうとしてるんじゃないんですね？

「とにかく！私の目が黒いうちはお兄ちゃんをお2人に渡しませんかー！」

「いや咲、渡さないって……2人は俺のことそういう感じで見てるんじゃないから」

「お兄ちゃんは甘いんだよ！だいたいそんなのわからないでしょ！お兄ちゃん鈍感だし！お兄ちゃんは風さんのことを第一に考えたらいいの！」

「なんだよ。鈍感鈍感って！俺だってこの前涼と色々話した時に鈍感って自分で気づいたんだよ！」

「「えっ!? そうなの!?!」」

「なんで3人ともそんなに驚いた態度取るんですかね!!?」

もう俺挫けちゃいそう。いろんな意味で。

「だいたいなんでお前が俺のバイトについてきてんだよ！お前この前からちよつと変だぞ！」

「変なのはお兄ちゃんの方だよ！風さんと付き合ったくせに他の女の子にデレデレして！それでも風さんの彼女なの!?!」

「で、デレデレなんかしてねえよ！てか、いちいち俺を監視にしにくるな！お前は俺のお母さんか!!」

「妹だよ！」

「知ってるよ!! ああもう腹立ってきた！」

「あの、2人とも。喧嘩は……………」

小咲さんが俺たちの喧嘩を止めようとするが、ここまできたら止まらない。もう言いたい事は全部言う。

「俺はこの前のこと悪いか思ってたねえからな。俺がしたいからそうしただけだ。涼は彼女。春と小咲さんは仲のいい親友と先輩。確かに周りから見たら涼を大事にする事が正しいけど、俺からしたら2人だって大事だ。ほっとけない人だ。感謝したい人だ。いつも世話になってるからそれを感謝の気持ちとして返したかった。だからあの時俺は大学いもを作ったんだよ！」

「なにそれ！そんなのどうせお兄ちゃんが小野寺先輩たちがすこし可愛いからって思って、それで気にしてるだけでしょ！風さんだって可愛いのにそれをほったらかして。だいたい付き合ってるのになんてお兄ちゃん風さんのことを全然気にしてないの!?彼女だよ彼女！意味わからない！」

「なんでお前が俺にそんな涼のことでどやかく言われねえといけねえんだよ。付き合ったからってどうするかは俺の勝手だろうが！俺と涼がしたいようにすればいいだけだろ。涼がしたい事、して欲しい事に俺が付き合う。逆に俺がしたい事、して欲しい事に俺が付き合う。それでいいじゃねえか。お前に俺と涼の事を言われる筋合いはない!!」

「なにさ！お兄ちゃん、中学の頃全然友達いなかったくせに。知ってるよ私。たまに涼に会いたくないから、って呟いてたの！それなのに今はどうなのさ。ちよーつと可愛い友達と先輩が出来たからってそっちの方にコロツといちゃつてさ。彼女出来たにもかかわらずお兄ちゃん全然気にしてない。そんなのただのろくでなしでしょ！」

「中学の頃は関係ねえだろ！あとお前の話は俺の話と脱線してる！」

「もう！ばかばかばか!!お兄ちゃんのばか！」

「なにも言えなくなっただからってそんなにバカバカ言うんじゃないよ!!」

「うっさい。お兄ちゃんの女たらし！」

「誰が女たらしだ、このブラコン！」

「ブラコンは自分で認めてるもん。鈍感バカ！」

「鈍感バカってなんだよ！鈍感は認めるがバカは認めねえぞ、風信者が！」

「風さんの信頼しててなにが悪いのさ！友達少ないダメ人間!!」

「少ないけど友達いるわ!!お前こそ友達いないじゃねえのか？学校でもそんなだけブラコン全開だもんなー！」

「私だって友達くらい『いい加減うるさいわ!!喧嘩なら外でやりなさい!!』」

いきなりの怒号で俺と咲の言い合いがピタツと止まる。声の方に向くと小野寺さんが鬼が怒ったような顔でこつちを睨んでいた。

「こつちは仕事で忙しいの！なにがあんのか知らないけど仕事なら外でやれ!!」

「す、すいません……」

あまりの形相に俺も咲もあつさり謝ってしまった。

「で、誰この子?」

「俺の妹です……超絶ブラコンの」

「どうもいつもこの『ダメ』兄がお世話になってます。この『ダメ』兄の妹の黒崎咲です」

明らかにこいつダメを強調してやがる。めっちゃ腹立つな。

「ふーん……喧嘩の原因は?」

「まあ家の事とか、学校の事とか、すこし色々」

「なるほどねえ……よし。小咲、春。あなたたちもう仕事終わっていいわよ」

「えっ!?!」

「その代わり、あんたらの部屋で風君が仕事終わるまでこの子の面倒見てあげなさい」

「へっ?」

「いや、小野寺さん。それは申し訳『こつちは私と風君だけでもどうとでもなるから。じゃあよろしく』ちよつと!!」

いきなりの小野寺さん乱入により、咲とその咲がすごく嫌ってる春と小咲さん3人が時間を潰すことになってしまった。これ大丈夫なのか?

春side

「あの、お菓子食べる？和菓子だけど」

「別にいいです。お腹すいてないんで」

「じゃあ飲み物は？冷たいジュースいっぱいあるよ？」

「別にいいです。気分じゃないので」

「そ、そう……」

(……………どうしよう。物凄く気まずい)

今お姉ちゃんとの思考がシンクロした気がする。お母さんも無茶だよ。事情を知らないとはいえ咲ちゃん、私たちの事すごく目の敵にしているのに……………

「それより、小野寺先輩」

「その小野寺先輩っていうのはちよつとやめて欲しいかな？私たち2人とも小野寺先輩だし。できれば名前で呼んで？私が春で。こっちがお姉ちゃんの小咲」

「……………春先輩。小咲先輩」

今すごい間があった！そんなに私たちの事名前で呼びたくないの!?

「さつきも聞きましたけど。お兄ちゃんの事、どう思ってるんですか？」

「どうって言われても……………その……………」

「好きなんですか？嫌いなんですか？」

「えと……………」

困ったお姉ちゃんは私にアイコンタクトを送ってくる。

(どうしよう、春!?)

(どうって……正直に答えるのがいいんじゃないかな?)

(でも、そんなの咲ちゃんが知ったら余計に……)

(かといつても風君の妹に嘘つくわけにはいかないよ!)

(確かに……)

お姉ちゃんは納得すると深呼吸する。心を落ち着けてるんだろうな。

「私は風君の事……好きでしゅ」

「ここで噛むの、お姉ちゃん!？」

「だって緊張して……」

「その好きは恋愛的にですか？」

「スルー!？」

やっぱり咲ちゃん、風君の事しか見れてないみたい。他の事はどうでもいいみたい。

「う、うん。そうだよ」

「それは春先輩もですか？」

「え?う、うん。そう」

「わかりました」

返事をする咲ちゃんは立ち上がってドアの方へ向かおうとする。

「えっと、どこ行くの?」

「お兄ちゃんのところですよ。2人はお兄ちゃんの事恋愛的に好きなんだって言ってます」

「「え……ちよつと待つて!!」」

絶対言つて欲しくない事を言いに行こうとする咲ちゃんに飛びついてドアを開けるのを止める私たち。

「は、はなしてください!お兄ちゃんは風さんと付き合ってるんです!お兄ちゃんに潔く振って貰えばお2人も楽でしょうから!!」

「ダメ!それだけはダメ!」

「そうだよ!絶対にダメ!」

「離してください!!」

体を掴んで離さない私たちを振り払おうとする咲ちゃん。これだ

けは絶対伝えさせては行けない。

「私はお兄ちゃんが大事なんです！お兄ちゃんの恋路を邪魔する女は誰であろうと許しません!!」

「ちよ、ちよつと待つて。一旦話し合おう」

「そうだよ。それに風にいきなりそんなこと伝えたら、逆に風が困るんじゃないかな？」

「……………確かにそうかもしれない」

説得すると咲ちゃんはおとなしく座った。そんな咲ちゃんを見て親指をグツと立てる。

「そ、それより私たち咲ちゃんともつと仲良くなりたいな、って思ってるんだけど？」

「嫌です。私はお2人とはなるべく話したくありません。特に小咲先輩はお兄ちゃんのこと押し倒してた事あるので嫌です」

「え、何それお姉ちゃん！私そんな話初めて聞いたよ!？」

「ぶ、誤解だよ！風君の看病に行った時にその、私が正座したら足しびれちゃって。そのままどうしたら足がよろけて、風君が寝てる方に……………」

顔を真っ赤にして頭をブンブン横に振りながら説明するお姉ちゃん。でも、その話が本当なら……………

「どうせそれも狙ってした事なんでしょう？お兄ちゃんをその時から狙ってたんでしょ!」

「ち、違う。本当に違うの!!あれは前に命助けてもらったお礼について!」

「……………まあ、いいです」

お姉ちゃんはホッ、とため息をついた。

「少し聞いてもいいかな？なんで、咲ちゃんはそんなに風のが好きなの？」

「なんで、って言われても。妹が兄を愛するのは当然のことですよ?」
「いや、そういうことじゃなくて、風のどこをそんなに好きになったのかなって」

「全部ですよ?」

「いや、あの……………もういいや」

なんだろう。この子は本当に話が通じない。凧のこと好きすぎるせいなのか？

「まあ、でもさっきお兄ちゃんに友達少ないとか言ったのも私のせいだったんですけどね」

「えっ？」

「……………少し私の昔話をしましょう」

あれ、誰も頼んでもないのに勝手に昔話を始め出しちゃった!?

「あれは私が小学校の頃……………」

第33話 昔のオハナシ

「こいつ、お兄ちゃんしかいわねえぞ。きもちわりい」

「ぼくしってるよ、おねえちゃんがいった。そういうのぶらこんつていうんだぜ」

「うう……………」

昔から私はお兄ちゃんの事が大好きでお兄ちゃんとはばかり一緒にいました。でもそのせいで小学校でも友達ができずに、よくいじめられていた事が多かった。

「おにいちゃん…………たすけてえ」

「うわ、またいったぞー」

「ぼくもしてみよー。おねえちゃん…………たすけてえ」

「そつくりだー」

小学校でクラスが一緒の男子数人が私を囲っていじめていた時。でも、そんな時にいつも助けてくれたのは

「ほんとうだ。そつくりだねー」

「ほんとほんと。風君、こういう時はどうするんだっけ？」

「そんなのきまつてる。悪を成敗するのがお兄ちゃんの役目だ！」

一つ上の学年にいるわたしの一つ上の兄と私の家の隣に住んでいる兄の幼馴染、風さんだった。

「今度睨いじめたら許さないからな！」

「…………ごめんなさいー!!!」

いじめられてる時、困ってる時はいつも私を助けてくれるお兄ちゃんと風さん。2人はいつも頼り甲斐があつて優しかった。

「大丈夫か、睨。もう大丈夫だぞ？」

「うん。ありがとう、おにいちゃん」

私は2人のことが大好きだった。もちろん、3つ上の姉、理沙姉の事も好きだったけど、理沙姉はこういう事にはあまり口を出さない性格だから、私は2人の方が好きだった。

「別にいいよ。困ってたら、いつでも助けてやるからな？」

「うん！」

「とかいって風君。教室にいない咲を探してあちこち走り回ったくせにー。本当にすぐ見つけられるのー?」

「それはいうなよ涼!今日は……そう!運が悪かったただけだ。次は大丈夫だ!」

「本当かなー?」

「本当だよ!」

「あはははははは」

小学校では授業や行事ことがない限りでは、3人でいるのがいつも一緒にいるのがほとんどだった。たまに風さんがいない時もあったけど、でもその時は別に気になることでもなかった。

「咲、今日は何して遊ぶ?」

「んーとね、かくれんぼ!」

「それは昨日もやっただろ………まあいいけど」

「風君って咲に甘いよねー?なんでも言うこと聞いちゃうし」

「そりゃ咲は妹だからな。当たり前的事だ」

「風君、シスコン過ぎ」

「うるさい!」

「ねえおにいちゃん。しすこんってなに?」

「咲はまだ知らなくていい!」

後に意味を知った私は本当にそうだなー、と感じた。私のお兄ちゃんへの想いもそんな感じだけど。

「聞いて聞いて!今日テストで満点とったんだよ!凄いでしょ?」

「凄いな。俺テストで満点なんかとった事ねえよ。流石俺の妹だなー」

「えへへ」

私がおかしい事をするとお兄ちゃんはいつも私の頭を撫でてくれた。優しく丁寧に。私はそうされるのが大好きだった。

「凄いな咲は。風君なんていつもテストの点悪いのにね」

「いつもじゃないだろ!5回に1回くらいは点数いいし!」

「その良い点数でも私には勝てないけどね?」

「あーもう!次は勝つからな!」

その時もお兄ちゃんは風さんにテストの点数が勝てなかったのをよく覚えてる。あの時のお兄ちゃん、涙流して悔しがってたし。

「おい見ろよー。黒崎と彩風。まーた2人で帰ろうとしてるぞー」

「本当だ。やつぱりあいつら付き合ってるんじゃないかね？ いーつも2人でいるしな。教室でも廊下でも給食食べる時もトイレ行く時でも」

「おい、お前らー聞こえてんぞ！ てか、トイレは一緒に行ってねえ!!」

「風君怒鳴る必要ないよ。私はそう思われて嬉しいけどなく」

「うるさい！ 涼は黙っとけ！」

「はーい」

ふと廊下でそんな事を話していたお兄ちゃんと風さんを見た。付き合うってなんのことかわからなかった私はその日に一緒に帰る時、思い切って聞いてみた。

「ねえ、お兄ちゃんと風さんは付き合ってるの？」

「はあ!？」

「とうとう咲にまでそう思われちゃうか。これは付き合うしかないんじゃない？」

「バカ言うな！ 誰がそんな事！ ていうか咲はそんな付き合うなんて言葉どこで聞いたんだ！」

「今日廊下でそんなこと言われてるお兄ちゃんと風さんを見たから。ねえ、付き合うってなんなの？」

「そ、それは……」

「私が教えてあげるよ。付き合うっていうのは『お前は何もいっかないちえ、つまんない』

「咲にはまだ早いことだから。な？」

「う、うん。わかった」

結局その時は付き合うとは何のことかわからなかった。でも、その時、私はもう一つ気になることができた。

「ねえおにいちゃん？」

「ん？」

「もしかして、お兄ちゃんって風さん以外に友達いないの？」

「ん なっ!!？」

「……………」

そう。さっきのお兄ちゃんと一緒にいた学年の男子。いつも2人でいるって言ってた。ということはずっと風さんと一緒って事。お兄ちゃんには風さんしかクラスに友達いないんじゃないのかなって思ってた気がした。

「そ、そんな事ないぞ咲。た、確かにクラスには涼しいないけど、他のクラスにはいるから」

「ふーん……風さんは？」

「私は風君と一緒にいたいから一緒にいるんだよ？友達がいないわけではないよ」

「そうなんだ」

なんかお兄ちゃんは焦ってるように見えただけのせいだよ。風さんはいつも通りだし。 だけどある日。それが嘘だって事がわかった。それが1年後の夏。私が休みの日に家で昼寝をしていて、ふと目を覚ました時だった。

「んん……………」

「なあ、風。それに風。いつまで咲と一緒にいるつもりなんだ？もう咲も5年生だぞ。お前らもうすぐ中学生なんだし、そろそろお前らが付き添ってやる歳でもないだろう」

「いや、でもまだ咲はたまに同級生の男子にいじめられてるし、まだ心配なんだよ。涼はどう思う？」

「確かに理沙さんの言うことは一理あると思うよ。風君はちよっと心配しすぎ」

「涼もそう言うのか」

「でも、別に風君の言うことは確かだよ。まだちよっと心配」

「結局どっちなんだ、お前は」

話の内容が気になった私は寝たふりをして話を聞くことにした。私に関係ある話だったみたいだし。

「でも、咲が聞いたら、あいつ自身がショック受けるぞ。咲のためにお前らが友達作らずにずっと一緒にいるなんて知ったら」

「そんなの俺たちがあいつに言わなければ済む話だろ。別に問題な

い」

「そうだよね。中学に上がったらまた変わるかもしれないだし、私達が卒業するまでは現状維持でいいんじゃないかな？って私は思う」

え……………お兄ちゃんと風さんが私のために友達を作ってない？
どういうこと？

「にしても、本当にお人好しだよな。お前ら2人とも。咲のことが心配で小学校入った後しばらく様子見てたら、クラスでは1人。いじめられてたり物隠されてたりして泣いてる咲を見て、これからはずっと咲の側についてやろうなんて思うなんて。しかも、小学校上がってできた友達の誘いも全部無視してさ」

「う、うるさいな。心配だったんだよ、咲のことが」

私のためにお兄ちゃん達がそんな事を…………でも、前にお兄ちゃん達友達いるって…………

「あ、そういえば1年くらい前に、咲が風君に友達いるの？って聞いた時にびっくりするくらい焦ってたよ。もう、あの時私、笑いこらえるの必死になったくらいで…………」

そんな…………じゃあ私のためにわざと嘘を？

「でも、お前らはもう小学校の生活を無駄にしたようなもんなんだぞ。友達も作らずあいつ1人のためにお前らはずっと」

「別に無駄じゃないよ。咲と涼と一緒にいる生活は楽しかったよ。涼もそうだろう？」

「私は風君と一緒になら何でも楽しいよー」

「あ、そう」

「でも、まあ楽しかったかな？」

「ほら。涼もこう言ってる」

「はあ……………このお人好しどもが。まあいいや。私にはもう関係ないことだし」

「関係ないって。理沙姉から話し始めたくせに」

「うるさい。風、晩飯作るから手伝え」

「あ、うん。わかった。涼はどうする？今日食べていくか？」

「うん。そうする。というか、私も手伝う」

「了解」

返事をして台所に向かった3人。私のために風さんとお兄ちゃんがそんな事をしてくれていたと思うと涙が出そうになった。

「でも、私どうしたらいいんだろ。お兄ちゃんと風さんが卒業したら、私1人に……………ううん、1人でも大丈夫。1年我慢して卒業して、お兄ちゃんと一緒に学校に入ったらいい事だし！うん。そうしよう！」

そうして、中学で友達を作ったらお兄ちゃんと風さんを安心させてあげられる。

「でも、私のためにお兄ちゃんと風さんがそんな事をしてくれたらと思うと、なんかお礼しないといけない気がする……………でもどうすれば？」

私がお兄ちゃんと風さんにしてあげられる事。風さんとお兄ちゃんが喜ぶ事……………

「プレゼント？いや、違う。そんなの誕生日に渡せるし、もっとううい事を……………」

お兄ちゃんと風さん。仲良し。幼馴染。いつも一緒……………
そうだ!!!

「お兄ちゃんと風さんが付き合ったらいいんだ。風さんにはきつとその気はあるし、お兄ちゃんは鈍感だけど、私が協力きつと出来る！あわよくば私もお兄ちゃんと……………」

そうと決まれば早速行動しないと!!まずは風さんにその気があるかチェックして、理沙姉の協力を得て、お兄ちゃんが風さんに惚れるように落とす。完璧だ!!!

「待っててねお兄ちゃん。お兄ちゃんは風さんと私のものなんだから!!」

「という事です」

「……………えつとー」

途中まではとてもいい話だった。というか、最後の最後まではいい話だった。凧の事は余計に好きになりそうだった。それは置いといて。

「つまり、凧君と凧ちゃんに恩返しするために2人をくつつけようとしたと?」

「はい」

「で、結果付き合う事にはなったけど、凧が凧ちゃんをほったらかして、私たちにデレデレしてるからムカつく、と」

「はい、その通りです。何か問題でも?」

「いや、その…………」

問題だらけな気がする。てか、最初は凧が友達できない理由のことを話してたんだよね。何で最後の最後に凧を凧ちゃんとかつつける話になったんだろう。というか、咲ちゃんは凧の気持ちを聞いてないみたいだし。

「あの、咲ちゃんは結局友達作る事に成功したの?あと、何で凧君には友達が少ないの?」

お姉ちゃん、ナイス質問!!

「友達作るのは失敗しました。お兄ちゃんの話ばかりしてたらドン引きされちゃって。まあそれは今もなんですけど。あと、お兄ちゃんが友達少ない理由はわかりません。直接聞いたこともないので」

結局わかったのは凧がシスコンだという事と、凧ちゃんはおそらくその頃から凧の事を、ということぐらい。

「おい、咲。バイト終わったから帰るぞー」

荷物を持ってノックもせず凧が不機嫌そうに部屋に入ってきた。というか、女子の部屋に入る時くらいノックしないとダメだと思っ

だけど。

「いい。私もう帰るから。お兄ちゃんとはしばらく話ししたくないから、後から帰ってきて。じゃあね」

凧の顔をみた瞬間不機嫌そうにした咲ちゃんは荷物を持って部屋を出て行った。

「ったく……すいません、小咲さん、春。あいつ迷惑かけてないですか？」

「ううん、全然だよ。むしろ楽しかったよ。ね、お姉ちゃん？」

「うん、楽しかったし、色々話も聞けたし良かったよ」

「そうですか。よかったです。じゃあ、あいつ1人になると心配なんです俺ももう帰りますね？」

「あ、うん。わかったよ」

一言礼をして、凧も部屋から出て行った。

「お姉ちゃん」

「何、春？」

「凧の妹って、なんというか凄い強烈だね」

「わかってくれて嬉しいよ、春」

お姉ちゃんとの絆が強まった気がした。

第34話 オウサマゲーム

「あ、舞子先輩。すいません、遅れてしまつて。せつかく誘つてくれたのに」

「いいのいいの。気にしないで」

咲と喧嘩して数日。お互い家でも一言も話そうとせず気まずい空気が家に漂っていた。正直理沙姉に申し訳ない。そんなある日、俺は舞子先輩に誘われて、釣具店に行こうとしていた。

「にしても、翔太も誘つたんですよね？なんで来なかつたんですか？」

「家族で旅行中らしいでござるよ」

「あー、それは仕方ないですね」

「さて、では、楽に電話を入れるとしよう」

「誘つてなかつたんですか!？」

携帯電話を取り、一条先輩に電話を入れる舞子先輩。というかそういうことは事前に連絡を入れておくべきなんじゃ。

「よー、楽。今日暇？こないだ話してた釣具店行ってみたいって言つてたろ？今日あたりどう？……………旅行？って事は何かい、今日は羽姉ちゃんと家で2人つきりつてわけかい？」

羽姉ちゃん？確か新しく凡矢里高校に来た先生で、一条先輩のクラス担任なつたつていう。年は離れてるけど一条先輩の幼馴染なんだつて。俺も話でしか聞いてないけど。

「じゃ、また誘うよ。バイビー」

電話を切る。そして、悪い笑顔を作つた舞子先輩は即効……………というか打ち込む速度が見えないほどのスピードで携帯をタップしてメールを打ち込む。

「舞子先輩、いったい何し『ごめん、風。予定変更だ』はい？」

「今から楽の家行くぞー。さあ、いそげ!!」

「えつとー……………?」

よくわからないがとりあえず面白そうなので舞子先輩の指示に従うことにした。

俺たちが家に着くと玄関の前で一条先輩と物凄い美人の女性。それと見知った数人の女子が立っていた。

「えーと、たまたま近くに来たから寄ろうかなって」

桐崎先輩。なんというか、言い訳が適當すぎる。

「あつ、私もそれで」

小咲さん。今あつ、つて言いましたよね。もう言い訳する気もないでしょ。

「私もだ」

鶴先輩もか。というか、みんなもう言い訳する気ないでしょ。適當すぎる。

「……………まあよくわからんが、とにかく上がってくれ。今お茶でも

『楽様ー！ー！！』ん？」

「ご無事ですか？楽様！！」

「ん！！」

「フフ、この橘万里花の目が黒いうちはあなたの好きにはさせませんよ！誰があなたと楽様を2人つきりになごー！」

「え？2人つきりつてお前そんなごで」

一条先輩がキョロキョロと周りを見渡すと、壁にもたれかかって決めポーズしている舞子先輩に気がついた。てめえの仕業か、みたいな顔をしてる。

「小咲先輩も来てたんですね？」

「な、凧君！うん、そうなの！」

「？それより、ちよつとお願いがあるんですけど、舞子先輩がなんてメールを送って来たのか見せてくれませんか？」

「あ、うん。いいよー」

携帯を取り出して、舞子先輩が送って来たメールを覗き込む。

『おっはよー！みんな大好き舞子集だよ！』

突然だけど楽のやつ今日は家で羽姉ちゃんと2人つきりなんだって。いきなりなんの話なんだよって感じだね！

あ、でも、凧が今日楽の家を持って行くものがあるとかいつてたら、2人つきりじゃないかも。

んじゃーねー!!』

あの人、何俺巻き込んで嘘ついてんだよ。

「はあ、全く。あの方は……つつ！」

「!?!?」

小咲さんの携帯を覗き込むようにみていた俺は顔を上げると、小咲さんの顔がくつつきそうなくらい近くにあった。

「うあ……………」

「な、凧君……………」

なんかいい匂いもするし、可愛いし。というかこんな近くで小咲さんの顔見るの初めてだし。もうここに誰もいなかったら絶対抱きしめてる。

「す、すみません！俺、すぐ離れないといけないのに!!」

「う、ううん、いいの。気にしないで。むしろ私も嬉しかったし」

「えっ?」

「ああ！違うの違うの！今の忘れて！」

「は、はあ」

なんで嬉しかったんだろ?でも、嫌だと思われてないだけいいか。てかどうして宮本先輩は小咲さんに親指たててるんですか。何がグッジョブなんですか?

「とりあえず入ってくれ。立たせてるのも悪いし」

そう言われてみんな家に入って行く。俺もそれに続いた。

「で、なんでこんなことに」

少し早い昼ごはんを羽先生が作ってくれた餃子を食べて何をしようとかと考えたところ、舞子先輩の提案で王様ゲームをすることになった。並び順は楽先輩から右に舞子先輩、橘先輩、俺、小咲さん、宮本先輩、桐崎先輩、鷗先輩、羽先生の順で。

「考えようによつちやチャンスなのよ、あなたは」

「そんなこと言われても」

「隣にいるんだし、もつとくつつきなさい。黒崎君は風と付き合ってるんだし、誰も変に思わないわ」

「で、でも、緊張する！」

隣で何話してるんだ？なんで俺の話が？

「えーつと、じゃあ最初の王様は……桐崎さんだ」

「……じゃあ、2番が6番の頭を撫でる、とかどう？まあ最初だし」

無難だな。俺の番号は……4番。違うな。

「2番……ついたら俺だな」

「わーい、私6番」

2番、一条先輩。6番、羽先生。羽先生すごく嬉しそうだな。そんなに一条先輩のことがいいのかな？

「えーつと、次の王様は」

「あ、私です！」

（うーんでもどうしよう、下手に命令したら風君がさつきみたいな目に合うかもだし。あ、でも、王様に何かする系なら、風君が何かされるのは防げるよね。無難過ぎない命令ってひざまくらかな？）

「えーつと、じゃあ。3番の人が王様に……」

（あ、でも、もしも相手が一条君だったら？舞子君もいるんだし、いやでも相手が風君なら嬉しいし。どうしよう……でも、このままなのもあれだし……）

今一瞬小咲さんが俺の方を見た気がする。というか、3番って俺な

んだよな。変な命令しなければいいんだけど。まあ、小咲さんに限ってそんなことはないよね。

(あー、どうすれば……ひざまくら以外に何か……あ、そうだ!!)

「次の命令が終わるまで3番の人は王様と手を繋ぐ!!」

「お、いいね。3番の人はだーれ?」

(これなら多分大丈夫。ひざまくらは大胆すぎるし、握手だったらなんといい味気ないし。うん、これなら)

「3番、俺です」

「ええっ!?!」

「お、凧か。ざんねんだったな、楽々」

「うるせえ!!」

一条先輩。本当にすいません。というか、小咲さんにしては少し大胆な命令な気がするな。

「はいはい。手繋いで〜」

「う、うん。じゃあ、ごめんね、凧君」

「い、いえ。こちらこそ、すいません」

お互いに顔を赤くしながらも、互いに手を握り合う。今までも何度か手を握っているのにやっぱり緊張するんだな。周りからの視線もなんだか痛いし。

「凧ー、凧ちゃんという彼女がいるのになんで罪深いやつなんだ」

「し、仕方ないでしょ!こういうゲームなんですかね?」

「ご、ごめんね。凧君」

「いえ、こんなの運みたいなものですし、気にしてないですよ。小咲さんも気にしないで下さいね」

(凧君でよかった……やったよ、るりちゃん!)

(まあ、褒めてあげるわ、小咲)

とまあ、こんな感じで続いていく王様ゲーム。橘先輩が王様になって、鷗先輩とチューしかけたり。鷗先輩が泣き出して免除になったが。羽先生が舞子先輩と橘さんの好きな人を聞いたり。舞子先輩は好きな人を宮本先輩以外の名を上げ、宮本先輩に何故自分だけ名前が呼ばれないのかと殴られたりしたが。

「じゃあ次だな、王様だーれ？」

「私ね」

「お、るりちゃんか。どんな命令をしてくれるのか楽しみだね」

「王様が3番を殴る、でいいかしら？」

「え……なんで俺の番号わかったの」

「勘よ。まあそれは冗談として。そうね、じゃあ私もさっきのように

……2番が王様にだけ好きな人を教えてもらおうかしら」

「えっ……？」

2番って俺ですよ？

第35話 フトシタ油断から出た言葉

「……………で、どうなの?」

「いや、どうなの、と言われましても」

王様だった宮本先輩とそれを当てられた2番の俺は1度部屋を出て、廊下で2人つきりで話していた。

「俺の好きな人は涼ですよ」

「本当に?」

「本当です」

俺はため息をつき、手を頭の後ろに当てながら言った。

「神に誓えるの?」

「か、神?」

「ええ。ちなみにそれが嘘だった場合、あなたは神様から罰せられるの。暴力的に」

「……………そんな神様いて欲しくありません。てかその話だと神って宮本先輩じゃないですか」

でも実際そんな事が起きるとしたらものすごく怖い。

「ところで知ってるかしら?あなたって嘘をつく時、絶対手を頭の後ろに当てるのよ」

「えっ!?!」

俺は慌てて後ろに当てた手を戻した。瞬間、宮本先輩がニヤツと笑った。

「嘘よ」

「うええっ!?!」

「そんなの嘘に決まってるじゃない。大体私と黒崎君はそんな事を見抜けるほど一緒にいるわけじゃないのよ?」

でも、今の行為で動揺するって事は、あなたやっぱり好きな人は他にいるのね?」

「ぐっ……………」

カマかけられた。それも漫画でしか見たことのないような方法で。なんでこの人はそんな事を平然とやってのけるんだ……

「まつ、それだけわかれば十分だわ」
「十分？」

「ええ。今のであなたが何を考えているのかが大体理解できたから」
「うっ……………」

ああ、ダメだ。この人には本当になわなない。俺の考えてることを全て見抜いて、それを確かめようとして今の行動をとったんだろう。「て事は、もしかして今までの流れは全部作戦だったんですか？」

「ええ。王様を引いたのは偶然だったけれど。あなたが2番を引いたのも、簡単な事で騙されることも、黒崎君が鈍感で単純でバカで一直線であつて事も分かつてたわ」

「いや、最後の方ももうバカにしてるようにはしか聞こえないんですけど。てか今バカつて言いましたよね！」

というか、この人絶対俺のことバカにしてるな。じゃないとこんなことしようなんて思わないはずだ。

「まあ、何を考えてるか大体わかったけれど、自分が後悔しないように選択しなさいよ」

「宮本先輩……………」

「でも、私の思い通りの結果にならないところ……………殺すわ」

「折角の良いイメージが台無しです。しかもいい直せてないです」

でも宮本先輩なら容赦しかねない。マジで俺今死刑宣告受けているのかもしれない。

「さてと、そろそろ戻るわよ」

「あ、はい、わかりました」

宮本先輩が部屋に戻ろうとするのを後ろからついて行く。でもよく考えたら宮本先輩とこうやって2人つきりで話したのってなんか新鮮かもしれない。

「あの、話は変わるんですけど？」
「なに？」

「宮本先輩って舞子先輩のことどう思ってるんですか？」

ずっと気になっていたことを聞くと宮本先輩は歩いてきた足を止めこつちに振り向いた。鬼形相のような顔をして。

「どうしてそんなこと聞くのかしら？」

「い、いえ、その…よく考えたら宮本先輩って舞子と一緒にいるのよく見かけますし、さつきも自分の名前呼ばれなかって物凄く怒ってましたし、気があるのかなって思いました」

「とりあえず、黒崎君。今あなたをここで殴ってもいいかしら？」

「えっ……………」

思いつきり拳を握りこんだ宮本先輩が俺にズカズカと歩み寄ってくる。

「えつと……………」

「私があんな男の事好きなのじゃないでしょ!!」

「す、すいません!!」

「大体、私が舞子君の事があるとわかれてる事が心外だわ」

「は、はあ……………」

なにもそこまで怒らなくてもいいと思うんだけど。ただ見て思ったことを言っただけなのに。

「まあいいわ。早く戻るわよ」

「は、はい、すいません」

はあ、とため息をついて早足で歩く宮本先輩の後ろを俺も同じ速度で歩いて部屋に戻った。

「ただいま戻りました」

「あれ、凧？」

「ん？春、涼、それにポーラも」

部屋に戻るとなぜか春と涼とポーラがみんなと一緒に円になって座っていた。

「3人ともどうして？」

「私はお姉ちゃんが物凄い勢いで一条先輩の家に向かうのを見たから」

「私はブラックタイガーがすごい勢いで飛び出して行って面白そうだったから」

「私はただ、春に誘われたから。風君がいるのは知らなかったよ」
春、ポーラ、涼の順で俺からの疑問を解消していく。要するにみんなそれぞれ誰かが心配だったというわけだ。

「というわけで一年生3人も交えて王様ゲーム再開!!」

舞子先輩の一言でみんなそれぞれ割り箸を引いていく。王様になつたのは……

「あ、私だ」

涼だ。一体どんな命令を出してくるのか想像がつかない。

「えーっと、じゃあ。2番と6番が3番のおでこにデコピン」

涼にしては軽い命令だな。というか、俺何番だっけ？

「……………3番俺じゃん」

「ごめんね、風君」

「いや、別に謝ることじゃないけど」

まあ、デコピンはいいとして。2番と6番は一体……

「えっと、ごめんね風」

「2番と6番私たちみたい」

そう言っただけで立ち上がったのは春と小咲さん。どうやら2人がおれにデコピンをするようだ。なんだか軽そうで良かった。

「いや、姉妹にデコピンされるってなんか得した気分になる。そう
だろ、風？」

「いや、これはどっちかっていうと損の方じゃないんですか、舞子先輩」

デコピンで得するって一体どういうことなんだろう。

「まずは春からお願ひ」

「う、うん。わかった」

春がデコピンをするように構える。それを見て俺はおでこを出すように前髪をあげた。

「じゃあいくよ?」

「お、おう」

何をそんな緊張することがあるのか。春の手はプルプルと震えていた。

「え、えい!!」

春のデコピンはうまく決まり、俺のおでこの中心くらいにヒットした。悶絶するほど痛いわけではないが、それでも少し痛い。少しだけおでこが赤くなっている程度だろう。

「ご、ごめんね風。でもこれもルールだから」

「いや、別に気にしなくていいぞ。じゃあ次は小咲さんですね」

「う、うん」

今度は小咲さんがデコピンする構えに入る。いつも優しい小咲さんだ。そんな強いわけがない。むしろ優しいまであるかもしれない。「なるべく優しくできるよう頑張ってみるね?」

「お、お願いします」

お互い正座をしてお辞儀する。まったく正座する意味もお辞儀する意味もないのだが……なんだかお見合いしてるみたいだ。俺たち2人の間に机があるならば間違いなくお見合いだろう。

「すう……………はあ……………」

たかがデコピンなのに、深呼吸するほど重要なことなんだろうか。でもそんな小咲さんも可愛いと思ってしまう。というか可愛い。

「じゃ、じゃあ……………」

「お願いします」

お願いします、なんて物凄いDMみたいだ。

「……………ん……………」

小咲さんがデコピンの構えを取る。目を閉じて、力いっぱい込めるのか、構えていた手はプルプルと震えていた。

「……………えい!!」

「つつ……………」

言葉とともに飛んで来たのは、優しい痛み。だと思ったのだが、姉妹なおかげなのか、それとも偶然なのか。小咲さんのデコピンは春が

当てたところと寸分狂わず当てて来た。いくら小咲さんのデコピンが他の人と比べて優しいとはいえ、これは少しくるものがある。

「あ、あの、ごめんなさい！痛かった？あ、私絆創膏持ってるから！よかったです……」

「いえ……大丈夫ですよ。でも、流石は小咲さんですね」

「あ、ありがとうございます」

俺は寸分狂わず同じところに当てた小咲さんを素直に賞賛した。小咲さんは何のことかわかっていない様子だったが。

「さーて。続けていこうでおじゃる」

今まで俺たちの様子を見守っていた舞子先輩が口を開き王様ゲームを再開し始めた。あー、おでこ少し痛い。

「ん？私が王様か？全員私にお菓子を持ってまいれ!!」

「子どもだ！子どもがいる!!」

王様を引いたポラがここにいる全員にお菓子を持ってくるように命令する。

「私ですわっ！今度こそ成功させます！」

「今度こそって一体何を………痛っ！」

(本田、ナイスです！)

「では！6番と王様がポツキゲームですわ!!」

「6番………って私じゃない!?!」

「そんなんっ!!私は確かに………はっ！9番と間違え………」

再び王様となった橘先輩が桐崎先輩とポツキゲームとなり一瞬駄々をこねたが、結局やる羽目になったり。

「あ、俺王様ー!!じゃあ、3番と6番が王様に愛のキスをー!!」

「させないわよっ!!」

「ぶふっ！ま、待って。3番と6番が誰かわからないだろー、るりちゃん!!」

「………それもそうね」

「………3番俺だ」

「6番が俺です………」

「だそうよ？よかったわね舞子君。3番と6番の人と愛のキスをされ

る事ができるわよ?」

「え、えーつと……」

自爆というのはまさにこのことを言うのだろう。そして、舞子先輩の引き連の悪さを呪った。この先のこと?……話したくない。

「で、では、王様ゲームは、最後にするでしょう……」

王様ゲームの仕切り役、舞子先輩。そして、見事に3番と6番を引いた一条先輩と俺はグロッキーな状態になっていた。

「うう……うう……うう……なんで、なんで俺が……」

「な、凧君!元氣出して!」

「そ、そうだよ凧!くじ運が悪かったただけだよ!うん!」

落ち込む様子を見て慰めてくれる小咲さんと春。2人とも優しい。

一条先輩はと言うと、羽倉先生と桐崎先輩は必死に慰めている状態。

「そうそうく。唇だけじゃないだけマシだよ」

「凧ちゃん!!」

涼の一言が矢のように俺の胸に突き刺さった。確かに唇ではなく頬だった。それだけはマシだった。でも……

「もうやだ。死のう」

「死んじやダメ!!」

「そうだよ!気をしっかり持ってよ凧!」

「なんだったら私が上書きしてあげよっか?」

「上書き?」

涼の言葉がイマイチピンとこなかった。上書きというのは一体

……

「凧君、じつとしててね〜」

「え、ちよ、す、涼?」

みんながいるにもかかわらず。みんなが見ているにもかかわらず、涼は両手で俺の頬を押さえて動けないようにして、顔を近づける。

「お、おい待て!冗談!」

「うふふ〜」

ニツコリと笑いながらも涼は俺の制止を聞くことなく近づく。涼が近づいてくるにつれて、女の子特有のいい香りや、綺麗な唇が俺の嗅覚、視覚を刺激する。

「おい!ホントっ!!」

周りを見渡してみるも、みんな顔を赤くして顔を背けるだけ。そして、俺と涼の唇が合わさりそうになった瞬間。

「だ、ダメー!!」

春が涼を引き離れた。

「み、みんな見てるのに何してるの凧ちゃん!!」

「え〜、凧君がショック受けてたから慰めようと思つて〜。ほら、私彼女だし〜」

「とにかくダメったらダメ!いくら凧ちゃんでもそれはダメなの!!」

「え〜」

危ない。俺もドキドキして溺れてしまうところだった。何に?決まっている。柔らかそうな唇にだ。あんなことされたら誰でも溺れてしまう。

「ふう…………ごめんな春。一応お礼を言っておくよ」

「べ、別に凧のためじゃないし…………」

「それでもだよ。ありがとう」

「う、うん」

「さ、さーて。やっぱり王様ゲームはお開きにしましょうか」

「そ、そうね。なんかすごいもの見ちゃったし…………」

舞子先輩の言葉に桐崎先輩が賛同して、そして次々とうんうん、と頷いていく。

「じゃあ次はなんのゲームを……」

「ところで、そろそろ日も暮れて来ちゃうけど、みんな帰らなくても平気なの？」

「え、もうそんな時間……」

羽倉先生の言葉とともに、ハツとする桐崎先輩。そしてその言葉と同時に桐崎先輩達は何か考えるように俯いた。

「……………今日は泊まっていきますー!」

「は!!?」

いきなり爆弾発言を投げる桐崎先輩と鶴先輩、そして橘先輩。この人達はいきなり何を言いだすんだ?

「え、泊まるって……お前ら本気か!」

「本気も本気よ!今日は朝まで遊び倒すんだから!」

「お嬢が泊まるなら私も!」

「私もご一緒しますわ!」

「ブラックタイガーが泊まるなら私も泊まるー」

次々と一条先輩の家に泊まろうとする先輩。そして、ポーラ。

「風君はどうする?」

「うーん……みんな泊まるなら俺も泊まろうと思います。いま家にはあんまり帰りたくないんで」

姉貴のこととか、咲のこととか色々面倒くさいし。

「じゃ、じゃあ私も泊まろうかな。楽しそうだし」

「お、お姉ちゃんが泊まるなら私も」

「春と風君がいるなら私も」

俺、小咲さん、春、涼も泊まることに決定。こんな大人数だけど大丈夫なのかな?

「一条先輩。泊まらせてもらうのに何もしないのは悪いので、今からスーパー行って何か買って来ますね?」

「いやちよつと待て風!俺泊まる事を許可した覚えねえんだけど!!」

「え、だってこれもみんな泊まる流れじゃないですか」

「ま、まあ、確かにそうだけだよ」

「て事で行って来ます。何かいるものあります?」

「あー、じゃあ飲み物とか適当に。食材はあるから気にするな」
「はい」

一条先輩に了承を得て、俺は部屋を出ようとする、それに気づいた春がこつちに歩み寄って来た。

「あれ、凧?どこかいくの?」

「泊まらせてもらうのに何もしないのは悪いから買い出しに」

「あ、じゃあ私もいく」

「いいのか?絶対帰り荷物重くなるぞ」

「それこそ誰かがついていく方がいいんじゃないの?」

「……………それもそうか」

まあ重い荷物さえ持たせなければ大丈夫だろう。お菓子とかそう言う軽いのだけ持ってもらおう事にしよう。

「じゃあ行くか」

「うん!」

心なしが春の機嫌がいいように思えたが、俺の気のせいだろうか?

「いっぱい買っちゃったね。支払い全部任せちゃったけど、お金大丈夫なの?」

「最近結構バイト入ってるからな。それなりには余裕ある」

「そっかー……………ならよかった」

スーパーで買い物を通し、春と並んで2人で歩く。こういう小さな心遣いができるのもやっぱり春のいいところだよな。

「ねえ、凧は文化祭どうするの?」

「文化祭?あー、そういえばもうすぐか」

2学期に入り文化祭の時期がやってきていた。俺たちのクラスは

お化け屋敷をする事になり、みんな役割を決めて準備に取り掛かっている。俺はまあ、ただの裏方だけど。翔太や春や涼はお化けをするのだ。

「その、誰かとまわったりしないの？」

「ん？ そうだな。まあ、涼とまわるのは確定だろうな」

「そっか……そうだよ。風の彼女だもんね」

「……………ああ」

「その……………もしかしたらだよ？」

「ん？」

「私とも一緒に……………まわらない？ 文化祭」

「ん？ 俺は別にいいぞ。涼は絶対許可してくれる『2人で！』えっ？」

「風と2人でまわりたいの。……………ダメ？」

……………毎回思うがそういう頼みごとをするときに上目遣いを使うのは反則だと思う。春みたいに可愛い女の子がそんな事したら断れるわけないじゃん。

「いいよ。俺はその、裏方だし。暇だと思うから」

「本当!? 約束だよ！」

「あ、ああ、もちろん」

「破ったら、絶交だから！」

「そこまでするのか……………わかった。絶対一緒にまわる。約束な？」

「うん!!」

「……………つつ……………」

返事をして満面の笑みを浮かべる春。ダメだ。可愛い……………

「風？」

「いや、なんでもない」

「ならいいけど……………ああ！」

「ん？ どうした？」

「あ、ううん。なんでもない」

「なんでもないって……………ああ、そういうえば、ここって入学式の時
俺が春を助けた場所だったな」

スーパーに向かう時は気づかなかつたけど、春が反応したから気づ

けた。入学式の日と違って桜は咲いてないけど、よく覚えてる。

「風、覚えててくれたんだ！」

「忘れるわけねえよ。あんな心に残る入学式の朝」

もう2学期だからあれからもう5ヶ月近くは経ってるんだな。時間が経つのがって本当に早い。

「あの時の風はかっこよかったなく。いきなりだったのに私の事彼女だ、って言って男の人たち追い払ってくれて」

「恥ずかしいこと思い出させるな。それでもあの時はどうするか必死だったんだよ」

「そっか。でも、初対面の私のために必死になってくれるって。風ってやっぱり優しいね」

「あんな困ってる女の子助けない男なんていない。俺は当たり前のことをしただけ」

「そんなことないよ。あの時の風はかっこよくて優しかったよ。足すくんで歩けないわたしをおんぶで学校まで連れて行ってくれたし」

「やめろ。そんなこと言われると照れる」

「じゃもつと言ってあげる。風はかっこいいし優しいよ？」

「ありがとう。でも、そんなになのか？」

「そうだよ。そんな優しくてかっこいい風だから私は風を好きになっただんだよ？」

「……………へっ？」

「えっ？」

いきなりのごとで俺は両手に持っている荷物をその場に落として、素っ頓狂な声を上げてしまった。今春は自分が何を言ったのかわかってないのか？

「……………えと、春？今お前俺になんて言ったかわかってるのか？」

「え？そんな優しくてかっこいい風だから……………私は風の事を……………好きになっただよ……………って……………」

自分が何を言ったのか理解したのか、春は俯いて、一瞬にして顔を茹でタコのように真っ赤にした。

「ち、違うよ！今のはそういうのじゃなくて！私は必死になってくれる風が好きだよって言っただけで、その、えと、な、風の事を好きだよって言ったわけじゃなくて。あ、でも、好きって言ったのは事実で。えっと、えっと……………」

「お、落ち着け。わかった。とりあえず落ち着け。な？」

「だから、その、えと……………必死な風が好きで、でも、好きってそういう意味じゃなくて……………あ、そういう意味って言うのは恋愛って意味で、あ、でも好きなのは好きなんだけど……………」

……………やばい。慌てふためく春。めちやくちや可愛い。こんな新鮮な春はなかなか見ないから。じゃない。どうしよう……………この焦りよう。もしかして俺は今、春に告白されたのか？俺の勘違いじゃなくて、本当にか？

「えっと…だからその……………」

「春。なあ、おい」

「えっと……………でも、風には風ちゃんがいるし、お姉ちゃんもいるし。そんな私なんか割って入っていいわけないし。いや、そうじゃなくて……………」

「春!!」

「ひゃ、ひゃい!!」

「落ち着け。本当に」

「あ、あれ？私今何して？」

「とんでもなく慌てふためいていたよ。もう面白いくらいに」

「うう……………ごめん、落ち着いた」

「よし」

深呼吸して落ち着いた春は俺の方を見つめる。

「春？」

「え、えっとね。今のは。その……………なんというか。無自覚に言葉が出ちゃってね。それでえと……………」

冷静にはなったが、茹でタコのように赤くなった顔は元に戻っていない。て事はやっぱり……………」

「その、ね。私は……………その…風の事、好きなんだよ。でもその好きって

いうのは……………」

「春……………」

だんだん春の顔は赤色から普段の色に戻ってきた。代わりに春の瞳が少しずつ潤んできていた。

「うん。わかってる。わかってるよ。こんなの迷惑だよ。風には風ちゃんがいるのに。なのにいきなりこんな事……………ごめん。ごめんね風」

なんで……………なんで春がそこで謝るんだよ。

「ごめん。風には彼女がいるのに……………なのに、文化祭2人でまわろうだなんて……………虫が良すぎるよね……………ごめん……………やっぱりさっきのなし。それと今のもなし。あれは私の口から無自覚に出ただけ。本心じゃない。だから……………なし」

なんでそこで春が泣くんだよ。

「ごめんね風……………私バカだね……………本当に1人で何やってんだろ……………」

春は溢れ出る涙を拭わない。頬を伝う涙はそのまま地面へとポタポタと落ちていく。

「……………」

「こんな涙でぐしゃぐしゃの顔で戻ったらみんなに心配される……………だから風は先に戻って……………私は後から、後からちゃんと戻るから」

俺は本当に……………バカだ。

「春」

「なに……………えっ」

ずっと泣き続ける春の腕を取り、俺はそのまま春を自分の胸へと引き寄せた。その勢いで春は持っている両手の袋を地面に落としてしまった。

「ごめん。春……………」

「……………なんで」

落としたお菓子が割れていようが、こんな道端で春を抱きしめる事だろうが、自分の服が春の涙で濡れようが関係ない。俺は……………こんな春を放ってわけにはいかないんだ。春を泣かせたのは他でもない俺自身なんだから。

「なんで……凧が……謝るの」

「……俺が本当にクズだからだ」

「そんな事ない……凧はクズじゃない……凧のせいじゃない。私が……私が勝手に……」

違う。春は何も悪くない。悪いのは全部俺なんだ。

「ごめん、春……」

「謝らないで……悪いのは私……だから」

違う。俺は春や小咲さん……いや、一条先輩にも舞子先輩にも宮本先輩にも。咲にも理沙姉にもみんなに……みんなに嘘をついていたんだ。

「悪いのは……俺なんだよ」

「え……」

そうだ。俺は自分の気持ちは誤魔化しているんだ。俺の本当に好きな人は涼じゃないのに。涼の正直な気持ちを俺は利用したんだ。涼を自分の気持ちからの逃げ道に使ったんだ。俺自身の気持ちを隠すために。

「春……」

「凧?どうしたの?」

こんな事をして後から辛い思いをするのは自分なのに。この事を話して軽蔑されるのは自分なのに。この事を話して一人ぼっちになるのは自分なのに。なぜ俺はこの選択を取ってしまったんだろう。

「春……まず言わせてくれ」

「な、何を……」

「俺も春の事が」

好きだ」